

府内城・城下町跡 6

第17次調査報告書

市営荷揚町中央駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009

大分市教育委員会

府内城・城下町跡 6

第 17 次調査報告書

市営荷揚町中央駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

大分市教育委員会

序 文

本書は、平成18年度に市営荷揚町中央駐車場建設に伴って実施した府内城・城下町跡第17次発掘調査の成果を収録したものです。

調査地点は、昭和62年に刊行された大分市史付図「府内城下の復原図」によると、府内城三ノ丸内に位置し、武家屋敷地が想定されている地点です。調査の結果、屋敷をおもわせるような建物痕跡は確認できませんでしたが、井戸跡や火災の後片付けをした穴、大量の陶磁器類を廃棄した土坑など、屋敷に住んだ人々の生活痕跡が発見された他、屋敷地の地割を示す溝などが発見されました。

市街化が進み、城下町としての面影を偲ぶことは難しくなってきた現在、府内城・三ノ丸の実態を知るうえで貴重な報告となると思われます。

本書が、広く市民の皆様に活用され、郷土の歴史研究に幅広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、文化財に対してご理解いただきました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心より感謝申し上げます。

平成21年3月31日

大分市教育委員会
教育長 足立 一馬

例 言

1. 本書は、保健所立体駐車場建設に伴う事前調査として大分市教育委員会が平成 18 年度に実施した府内城・城下町 跡第 17 次調査の正式報告書である。
2. 調査は、大分市教育委員会が主体となり平成 18 年 5 月 11 日から平成 18 年 8 月 31 日、平成 19 年 2 月 26 日から平成 19 年 3 月 28 日の 2 回に分けて実施し、整理作業を平成 18 年 12 月 20 日から平成 19 年 3 月 31 日まで行った。
3. 開発対象面積は 758 m²、うち 482 m²について発掘調査を行った。
4. 本書に掲載した遺構の実測は長直信が行った。
5. 遺構の写真撮影は長が行い、空中写真撮影は(株)九州航空株式会社に、遺物写真撮影は有限会社フォトワーク大分に委託した。
6. 本書作成に至るまでの整理作業(遺物の注記・復元・実測)および遺物・遺構図版作成作業(トレース・版組など)は担当職員のほか、次に記す大分市教育委員会臨時職員により実施されたものである。
伊藤こずえ、木村藍子、橋本千代美、松場泉、井口あけみ
7. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお文中では遺跡名を略している。

府 17SA045

→府(府内城・城下町跡の遺跡名の略称)17(調査次数)SA(遺構種別)045(遺構番号)

8. 出土遺物および図面、写真等の記録は大分市教育委員会が保管している。
 9. 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々に指導・御助言を頂いた。
凝灰岩製品の石材産地については、野田雅之氏(大分県地質学会会長)に御教示をえた。
また、遺物全般については吉田寛氏(大分県教育庁文化課)、高畠豊氏(大分市教育委員会)に、一部の遺物については、伊野近富氏(京都府埋蔵文化財センター)、森島康雄氏(同)、小川望氏(東京都小平市教育委員会)、堀内秀樹氏(東京大学埋蔵文化財調査室)の御教示をえた。
10. 本書の執筆・編集は長が行った。

凡 例

1. 本書で用いた遺構略号は原則として、SA：柵、SB：掘立柱建物、SE：井戸、SK：土坑、SX：性格不明遺構(火災処理土坑についても同標記とする)、SP：ピット を表している。
2. 遺構の規模はmを、遺物の法量はcmをそれぞれ用いる。
3. 遺構実測の基準及び方位は、平面直角座標 2 系(世界測地系)を用いている。
4. 出土遺物の断面は、須恵器及び供膳具を除く陶器類を黒塗り、瓦質土器を灰色で示す。
5. 本書で参考もしくは使用した遺物の分類は、主として以下のものによっている。

[陶磁器類]

太宰府市教育委員会 2000 年『太宰府条坊XV—陶磁器分類編—』

九州近世陶磁学会 2000 年『九州陶磁の編年』

[陶器類]

大橋康二 1987 年『考古学ライブラリー 55 肥前陶器』ニューサイエンス社

九州近世陶磁学会 2000 年『九州陶磁の編年』

日下正剛 1998 年『遺構年代の決定方法』『新蔵町 1 丁目遺跡 企業局総合管理センター(副知事公舎)地点』

[瓦]

吉田寛 2003 年「近世府内城・近世府内城下町跡出土瓦の編年的研究」『山口大学考古学論集 近藤喬一先生

[退官記念論文集]

武内雅人 2001 年「丸瓦製作技術からみた近世瓦の生産と流通」『ヒストリア』173 号

[その他全般]

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004 年『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊

大分県教育委員会 1993 年『府内城三ノ丸遺跡—大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』

江戸遺跡研究会編 2001 年『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房

中世土器研究会編 1995 年『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	2
第Ⅱ章	遺跡の立地と調査方針	4
1	調査区の位置と環境	4
2	調査地点周辺の環境と問題点の整理	9
第Ⅲ章	調査報告	12
1	調査概要	12
2	基本層序	16
3	主要遺構	17
4	調査地に残る石造物	32
5	出土遺物	33
第Ⅳ章	調査成果と課題	100
1	時期別の概要	100
2	江戸後期の屋敷の空間利用と三ノ丸の地割について	102
3	出土遺物の様相	103
4	今後の課題	106
	遺物計測表	108
	遺物観察表	117
	遺構番号一覧表	119
	出土遺物一覧表	121
	写真図版	127

插图目次

・第1図：周辺遺跡地図（1/40,000）	4	・第35図：17SX055出土遺物1（1/4）	42
・第2図：府内藩及び他藩領	5	・第36図：17SX055出土遺物2（1/4）	43
・第3図：調査地点位置図1（1/8,000）	6	・第37図：17SX055出土遺物3（1/3・1/4）	44
・第4図：寛保三年（1743）の大火で焼けた府内城下の範囲	7	・第38図：17SX055出土遺物4（1/4）	45
・第5図：調査地点位置図2（1/2,500）	10	・第39図：17SX055出土遺物5（1/4）	47
・第6図：府内城下における調査地周辺位置図 （1/2,500）	10	・第40図：17SX055出土遺物6（1/4）	48
・第7図：府内城・城下町跡第17次調査遺構切り合い図 （1/200）	12	・第41図：17SX055出土遺物7（1/4）	49
・第8図：基本土層模式図	13~14	・第42図：17SX055出土遺物8（1/3・1/4）	50
・第9図：府内城・城下町跡第17次調査遺構平面図 （1/120）	13~14	・第43図：17SX055出土遺物9（1/3・1/2）	51
・第10図：調査区南壁面土層図（1/80）	15	・第44図：17SX055出土遺物10（1/4）	52
・第11図：柵跡個別図（1/40）	17	・第45図：17SX055出土遺物11（1/4）	53
・第12図：井戸個別図1（1/40）	18	・第46図：土坑出土遺物1（1/3）	55
・第13図：井戸個別図2（1/40）	19	・第47図：土坑出土遺物2（1/3・1/4）	56
・第14図：火災処理土坑個別図（1/40）	20	・第48図：土坑出土遺物3（1/3）	57
・第15図：17SX055・SD040平面図（1/200）	22	・第49図：土坑出土遺物4（1/3・1/4）	58
・第16図：17SX055・SD040土層図（1/40）	22	・第50図：土坑出土遺物5（1/3）	59
・第17図：土坑個別図1（1/40）	23	・第51図：土坑出土遺物6（1/3）	60
・第18図：土坑個別図2（1/40）	25	・第52図：土坑出土遺物7（1/3）	61
・第19図：土坑個別図3（1/60）	26	・第53図：土坑出土遺物8（1/3）	62
・第20図：性格不明遺構個別図1（1/20）	27	・第54図：土坑出土遺物9（1/3・1/4）	63
・第21図：性格不明遺構個別図2（1/20・1/40）	28	・第55図：土坑出土遺物10（1/3・1/4）	64
・第22図：性格不明遺構個別図3（1/60・1/40）	29	・第56図：土坑出土遺物11（1/3）	65
・第23図：性格不明遺構個別図4（1/40）	30	・第57図：土坑出土遺物12（1/4・1/6）	66
・第24図：2面目の主要遺構（1/20・1/40）	31	・第58図：性格不明遺構出土遺物1（1/3）	68
・第25図：調査区周辺の祠の位置（1/400）	32	・第59図：性格不明遺構出土遺物2（1/3）	69
・第26図：祠実測図（1/5）	32	・第60図：性格不明遺構出土遺物3（1/2・1/3）	70
・第27図：17SA045出土遺物（1/3）	33	・第61図：性格不明遺構出土遺物4（1/3）	71
・第28図：井戸出土遺物1（1/4・1/8）	34	・第62図：性格不明遺構出土遺物5（1/3・1/4）	72
・第29図：井戸出土遺物2（1/4・1/8）	35	・第63図：性格不明遺構出土遺物6（1/3）	73
・第30図：火災処理土坑出土遺物1（1/3）	36	・第64図：性格不明遺構出土遺物7（1/10）	74
・第31図：火災処理土坑出土遺物2（1/3）	37	・第65図：性格不明遺構出土遺物8（1/10・1/3）	75
・第32図：火災処理土坑出土遺物3（1/3）	38	・第66図：性格不明遺構出土遺物9（1/4）	76
・第33図：火災処理土坑出土遺物4（1/4）	39	・第67図：性格不明遺構出土遺物10（1/4・1/2）	77
・第34図：溝出土遺物（1/3）	40	・第68図：2面目の遺構出土遺物（1/3・1/2）	78
		・第69図：近代の土坑出土遺物1（1/4）	79
		・第70図：近代の土坑出土遺物2（1/4）	80
		・第71図：近代の土坑出土遺物3（1/3）	81

・第72図：近代の土坑出土遺物 4 (1/3・1/4)・・・82	・第85図：17SX095出土瓦 (1/4)・・・96
・第73図：近代の土坑出土遺物 5 (1/2)・・・83	・第86図：銅銭拓本 (1/1)・・・96
・第74図：近代のその他の遺構出土遺物 (1/4・1/2)・・・84	・第87図：青銅製品実測図 1 (1/2)・・・97
・第75図：17SX015出土遺物 1 (1/4)・・・86	・第88図：青銅製品実測図 2 (1/2)・・・98
・第76図：17SX015出土遺物 2 (1/4)・・・87	・第89図：鉄製品実測図 (1/3)・・・99
・第77図：黒茶色土出土遺物 1 (1/3・1/4)・・・88	・第90図：遺構時期変遷図 (1/500)・・・101
・第78図：黒茶色土出土遺物 2 (1/2)・・・89	・第91図：遺構間の遺物接合状況 (1/400)・・・103
・第79図：その他の土色出土遺物 1 (1/3・1/2)・・・90	・第92図：調査地点の空間利用推定模式図 (19世紀前後)・・・103
・第80図：その他の土色出土遺物 2 (1/3)・・・91	・第93図：「復元図」・「絵図」からみた 調査地点周辺の環境 (1/1, 500)・・・104
・第81図：その他の土色出土遺物 3 (1/8)・・・92	・第94図：17SX005出土の土製温石とその類例 (1/4)・・・105
・第82図：表土出土遺物 (1/3・1/4)・・・93	・第95図：調査地点出土の朱泥陶器とその類例 (1/3)・・・106
・第83図：17SX055出土瓦 (1/4)・・・94	・第96図：調査地点出土搬入遺物[中世～近世] (1/4)・・・107
・第84図：17SX055・095出土瓦 (1/4)・・・95	

表 目 次

・表1 府内城三ノ丸調査地一覧・・・107	・表11 遺物観察表①・・・117
・表2 遺物計測表①・・・108	・表12 遺物観察表②・・・118
・表3 遺物計測表②・・・109	・表13 遺構番号台帳①・・・119
・表4 遺物計測表③・・・110	・表14 遺構番号台帳②・・・120
・表5 遺物計測表④・・・111	・表15 出土遺物一覧表①・・・121
・表6 遺物計測表⑤・・・112	・表16 出土遺物一覧表②・・・122
・表7 遺物計測表⑥・・・113	・表17 出土遺物一覧表③・・・123
・表8 遺物計測表⑦・・・114	・表18 出土遺物一覧表④・・・124
・表9 遺物計測表⑧・・・115	・表19 出土遺物一覧表⑤・・・125
・表10 遺物計測表⑨・・・116	

写真図版目次

写真図版 1

1. 調査区と周辺環境 (南東上空より)・・・128
2. 調査区全景空中写真〔合成〕 (上が北)・・・128

写真図版 2

3. 調査区北西部遺構完掘状況 (上が北)・・・129
4. 17SE030周辺一面目完掘状況 (上が北)・・・129
5. 調査区 1 面目完掘状況 (西より)・・・129
6. 17SX055周辺完掘状況 (西より)・・・129

写真図版 3

7. 17SX005検出状況 (北より)・・・130
8. 17SX010検出状況 (東より)・・・130
9. 17SX005堆積状況 (西より)・・・130
10. 17SX010堆積状況 (南より)・・・130
11. 17SX005完掘状況 (北より)・・・130
12. 17SX010完掘状況 (東より)・・・130

写真図版 4

13. 17SE020堆積状況 (西より)・・・131
14. 17SE020完掘状況 (北より)・・・131

15. 17SE020遺物出土状況（西より）	131
16. 17SE020井戸枠？検出状況（北東より）	131
17. 17SE030周辺1面目完掘状況（東より）	131
18. 17SE030周辺2面目完掘状況（東より）	131
写真図版5	
19. 17SE030井戸枠検出状況（北より）	132
20. 17SE030掘り下げ状況（西より）	132
21. 17SX004遺物出土状況（東より）	132
22. 17SX035獣骨検出状況（南より）	132
23. 調査区南壁土層（北東より）	132
24. SX042遺物出土状況（南より）	132
25. SX050検出状況（北より）	132
26. SX050土層断面（北より）	132

写真図版6

27. 17SA045検出状況（北より）	133
28. 南壁土層（北より）	133
29. 淡灰黄色砂質土堆積状況（北東より）	133
30. トレンチ掘り下げ状況（東より）	133
31. 17SX055検出状況（東より）	133
32. 17SX055堆積状況（C-Dライン）（東より）	133
33. 17SX055堆積状況（G-Hライン）（東より）	133
34. 17SX060・065検出状況（南より）	133

写真図版7

35. 17SD040検出状況（東より）	134
36. 17SX055・SD040完掘状況（東より）	134
37. 17SD040堆積状況①（西より）	134
38. 17SD040堆積状況②（西より）	134
39. 17SX070検出状況（東より）	134
40. 17SX070掘方検出状況（東より）	134
41. 17SX070半蔵状況（東より）	134
42. 17SX070周辺作業状況（南東より）	134

写真図版8

43. 追加調査地点作業風景（西より）	135
44. 追加調査地点完掘状況（東より）	135
45. 追加調査地点遺構検出状況（東より）	135
46. 追加調査地点中央遺構検出状況（北より）	135
47. 追加調査地点南側遺構検出状況（南東より）	135

48. 17SK075遺物検出状況（西より）	135
写真図版9	
49. 17SK110検出状況（東より）	136
50. 17SK110黄灰色土除去状況（東より）	136
51. 17SK110堆積状況（北東より）	136
52. 17SX100遺物出土状況（南東より）	136
53. 17SK105堆積状況（南東より）	136
54. 17SK105完掘状況（北より）	136
55. 17SK090完掘状況（西より）	136
56. 17SK090遺物出土状況（南東より）	136

写真図版10

57. 17SX095堆積状況（西より）	137
58. 17SX120堆積状況（西より）	137
59. 17SX120掘り下げ状況（東より）	137
60. 17SX120遺物出土状況個別（北より）	137
61. 17SX120遺物出土状況全景（北より）	137
62. 17SX120完掘状況（北より）	137
63. 17SX120堆積状況（東より）	137
64. 17SX120堆積状況（東より）	137

写真図版11

65. 調査区南東壁面堆積状況（北西より）	138
66. 17SX095完掘状況（北より）	138
67. 17SX095完掘状況（南より）	138
68. 17SX125遺物出土状況（西より）	138
69. 17SX125完掘状況（西より）	138
70. 追加調査部分作業風景（東より）	138
71. 調査前祠（北より）	138
72. 荷揚町小学校生徒遺跡見学風景（西より）	138

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

大分市は平成9年度から中核市に移行したことに伴い、これまで大分県の所管であった保健所が大分市の管轄となった。これに起因して大分市長浜町で老朽化していた保健所を、大分市役所近隣の旧大分医師会館跡地に建設することとなった。そこで、新保健所の運営に際して隣接した場所での収容力のある駐車場の確保の必要性が生じたため、従来、アートプラザ駐車場（旧林業会館跡地）として利用されてきた場所に立体型の駐車場を建設する計画が行われた。

この立体駐車場建設計画の進捗にともない、平成17年度に建設予定地の埋蔵文化財の所在状況について大分市官財課庁舎係より文化財課へ照会がなされた。文化財課では、建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「府内城・城下跡」の範囲内であり、江戸時代の絵図に基づく復元図によると、府内城三ノ丸の武家屋敷敷地内に比定される場所であることから、事前に確認調査を実施し、遺構の遺存状態を調査する必要があると判断した。2005(平成17)年5月24～27日に試掘調査を実施し、近世段階の遺構を確認した。この結果をうけ、2006(平成18)年5月11日より本調査を開始した。

調査期間中も駐車場の運営を継続する必要があるため、開発範囲の東半分を先行して調査し、その後、西半分の調査を行う計画とした。東半分の調査の結果、調査区南側端の遺構の遺存状況は良好であったが、中央から北側の大部分は駐車場以前に建設されていた林業会館の基礎杭（直径0.2m強、長さ1m以上の松材を8～9本を単位として地面に打ち込み、上部をコンクリートで固めたもの）が調査区の9地点にわたって確認されており、この基礎の設置・解体にともなう掘削により浅い遺構はほぼ削平されていたことが判明した。現駐車場は林業会館の建物範囲を踏襲しているため、調査区の西半分についても同様の掘削が展開することが予想され、加えて駐車場の営業や西接するアートプラザへの搬入路の確保が日程の関係上不可能であったこともあり、反転調査の際は林業会館の基礎の推定範囲外に限定することとした。調査は平成18年8月31日に終了したが、平成19年2月に入り急遽、立体駐車場の設計変更の必要性が生じたことから、調査区南側にある府内こどもルーム（旧荷揚町保育所）敷地内の約100㎡が新たに開発範囲となったため、平成19年2月26日～3月28日まで追加調査を行った。追加範囲では近代以降の掘削は少なく、遺構の遺存状況は極めて良好であった。結果、最終的な開発対象面積は758㎡、調査面積は482㎡となった。

なお、立体駐車場は、コンベにより設計が決定され、平成19年11月14日に工事着工。平成20年4月30日完成し、『市営 荷揚町中央駐車場』として平成20年5月21日より使用されている（写真1・2）。

なお、調査地は荷揚町小学校に隣接し、児童が頻繁に遺跡を見学しにくることもあり、荷揚町小学校側の提案



写真1 完成した市営荷揚町中央駐車場（西より）



写真2 市営荷揚町駐車場と側面に映るアートプラザ（東より）



写真3 荷揚町小学校生徒への遺跡説明会風景



写真4 現場に設置した遺跡説明看板

を受けて7月12日に荷揚町小学校生4年生から6年生の計92名を対象に遺跡・遺物の説明会を行った(写真3)。また、調査地は市役所やアートプラザ、警察署に隣接することから市民の往来も多いため、道路面に遺跡説明看板を立て(写真4)、埋蔵文化財調査の理解と荷揚町周辺の歴史への関心をもって頂けるよう努めた。

2. 調査組織

平成18年度(2006年) [本調査]

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会

文化財課 課 長 佐藤 功(～平成18年9月30日)

玉永光洋(平成18年10月1日～)

参 事 玉永光洋(～平成18年9月30日)

管理係 管理係長 安東時男

主 査 幸 俊昭

指導主事 姫野公徳 植木和美

主 任 桑原 治 栗田博之 加藤キヌ 加悦真理

文化財係 文化財係長 塔鼻光司

専 門 員 坪根伸也

主任技師 池邊千太郎 塩地潤一 河野史郎 高畠豊 中西武尚

主 事 永松正大 佐藤道文 五十川雄也 古川匠

事務員 長 直信（本調査担当）
 嘱託 井口あけみ 荻 幸二 宮田 剛 稗田智美 奥村義貴
 羽田野達郎 佐藤孝則 羽田野裕之 水町裕子 山本哲也
 若松善満 山下朋紀 五十川慎也 山下 桂
 仲矢咲紀 古田 陽 姫野久恵

平成19年度（2007年）[整理作業]

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博（～平成19年4月） 足立一馬（平成19年5月～）

事務局 大分市教育委員会

文化財課 課長 玉永光洋（平成18年10月1日～）

参事 渋谷健治

管理係 管理係長 安東時男

主査 幸 俊昭

指導主事 姫野公徳 植木和美

主任 桑原 治 栗田博之 加藤キヌ 加悦真理

文化財係 文化財係長 塔鼻光司

専門員 坪根伸也

主任技師 池邊千太郎 塩地潤一 河野史郎 高畠豊 中西武尚

主任 永松正大

主事 佐藤道文 五十川雄也 古川匠 長直信（整理担当）

嘱託 井口あけみ 稗田智美 奥村義貴 羽田野達郎 佐藤孝則 三嶋桂司

羽田野裕之 山本哲也 若松善満 山下朋紀 五十川慎也 上原翔平

平成20年度（2008年）[報告書刊行]

調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

事務局 大分市教育委員会

文化財課 次長兼課長 玉永光洋

参事 岩田祐治

管理係 課長補佐兼係長 福田誠一

主査 幸 俊昭 桑原 治 筒井和信

指導主事 姫野公徳 植木和美

主任 栗田博之 加藤キヌ 竹中智美 宮崎 勲

文化財係 課長補佐兼係長 塔鼻光司

専門員 坪根伸也 池邊千太郎

主任技師 塩地潤一 河野史郎 高畠豊 中西武尚

主任 永松正大

主事 佐藤道文 五十川雄也 古川匠 長直信（整理担当）

嘱託 井口あけみ 稗田智美 奥村義貴 羽田野達郎 佐藤孝則 三嶋桂司

羽田野裕之 山本哲也 若松善満 山下朋紀 五十川慎也 上原翔平

仲町憲治 廣瀬育子

第Ⅱ章 遺跡の立地と調査方針

1. 調査区の位置と環境 (第1図)

大分平野は、九州島東部に位置し、北には瀬戸内海の西端にあたる別府湾、東には佐賀間半島から豊後水道、南には祖母・傾山系、西には九重連山が展開している。近郊においては、九六位山・霊山・障子岳・雨乞岳といった標高400～800mほどの山に取り囲まれ、大分県を代表する大野川・大分川が平野の中央部及び西部地域を蛇行しながら別府湾へ注いでいる。近代以前、大分川の河口部は多くの流路に分流していたと考えられ、これに伴い多くの微高地群が形成されている。

16世紀末から17世紀初めに府内城およびその城下町がつけられた場所は、大分川河口部左岸の標高約3～5mの微高地である。この地域は、南部にある上野台地およびその後背地の古国府地域とともに豊後国の国府がおかれ、政治的中心となり、中世においても守護大名である大友氏の本拠地として発展した。近世には豊後国が小藩分立とされて府内藩は小藩となったものの城下町は豊後随一の規模を有していた。明治以降は大分県の県庁所在地として現在に至っている。このように大分川河口付近は古代から中世、近世とそれぞれ一貫して中心的なエ



第1図 周辺遺跡地図 (1/40,000)

リアとしてあり続けたが、それぞれの時代に展開した遺跡の地理的位置が概ね南から北へ移動していることがわかっていく。このため、近世城下町が現代の中心市街地と重複している点を除き、古代から近世の遺構はさほど重複することなく、現在まで多く残されている。近世以前の歴史についての概略は他報告書に譲り、ここでは報告する遺跡の主体の時代となる近世から近代における大分市中心部の歴史的環境を述べる。

一 大友氏支配の終焉一

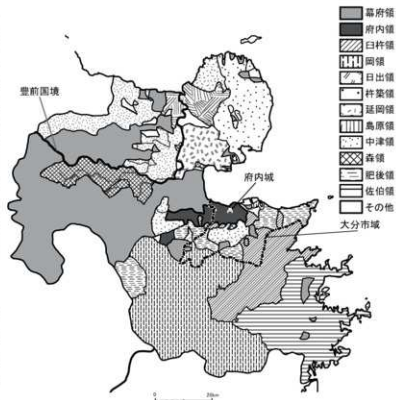
大分川河口付近に拠点を置き、鎌倉時代以降豊後を支配した大友氏は21代大友義鎮（宗麟）のころには南蛮貿易により隆盛を極めたが、天正十四年（1586）12月島津氏の侵襲により焼亡する。当時の貿易港であった沖の浜も焼け落ち、拡大する火災で府内の町は夜通し燃え続け、三寺院以外は全てが焼き尽くされたと宣教師の記録は伝える。こうした府内の町を焼き尽くした火災の痕跡は、発掘調査によりいたるところで確認されている。その後、府内の町は復興を遂げるものの、戦国末期の文禄二年（1593）、大友氏22代の吉統が朝鮮出兵での失態を理由に除国され大友氏によって創られた府内の町は終わりを迎えた。

一 蔵入地としての再出発一

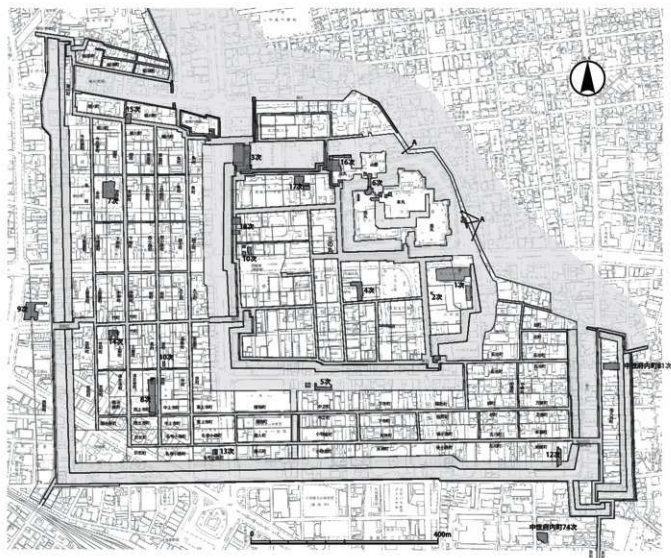
その後、豊後国は豊臣秀吉の直轄地（蔵入地）となり、翌年、府内には石田三成の妹婿である早川長敏が蔵入地預かり分を含む計六万石で入封したがこの時、長敏は旧大友館を修築して使用したといわれる。しかし、慶長元年（1596）の慶長大地震とよばれる地震が別府湾沿岸を襲い、再興した府内の町は津波により甚大な被害を被ったといわれる（註1）。

一 府内城の建設一

早川長敏の在任期間は短く、慶長二年（1597）には豊後木付（現在の杵築市）に移され、替わって豊後臼杵から福原直高が大分郡及び遠見郡計十二万石で入封した。直高は中世府内町の北方、別府湾に面する「荷落」と称されていた地を選定し、築城に着手した。天正九年（1581）～天正十四年（1586）頃の中世府内町を描いたといわれる「府内古絵図」によると、現在の長浜町から勢町あたりまでは、葦の繁る湿地帯のように描かれており、府内城建設やその後の城下町建設にあたっては、三ノ丸の北側から本丸にかけての土木作業は非常に困難な作業であったといわれる。大分郡内から巨木を高崎山や笠縫島から巨石を運ばせ、土佐国からは精木を運んだといわれる。三ノ丸南側は大友時代の寺や寺内町的な空間であったと推定されるが、大友氏建立の同徳寺・宝殿は残されたという。慶長四年（1599）には、二ノ曲輪三重櫓や三ノ曲輪家臣屋敷が完成し、地名を「荷揚」と改め、新城を「荷揚城」と称した。しかし、同年、慶長の役の際に軍監として出陣した直高は、その役務に不公平があったとして、徳川家康から改易を命じられた。その後、後任として早川長敏が再入封したが、長敏は慶長五年（1600）の関ヶ原の戦いで西軍方につき、早川氏は滅亡した。



第2図 府内藩及び他藩領 領域図



第3図 調査地点位置図1 (1/8,000)

一府内城・城下町の完成—<江戸初期>

関ヶ原合戦後の慶長六年（1601）、長敏に代わって豊後高田から竹中重利が三万五千石で入封した。竹中氏は徳川家康の許可を得て、築城事業を再開し、慶長七年（1602）には四重天守等の城郭中心部が完成した。この際、町割りを実施し、大友時代の「府内町」を移転させ、光西寺、常妙寺・善巧寺・本光寺などの宗教施設も新城下へ移っている（註2）。

慶長十年（1605）には城下町がほぼ完成し、城下町を圍繞する濠を築き、城名を「府内城」、城下町を「府内」と改めた。さらに慶長十二年（1607）、城下の東に堀九升口、西に笠和口、北に堀川口を設け、翌年には船入「京泊」が造られ、城下町は完成した。また、陸上交通の便を図るため城下南西方に堀切峠を開削、笠和口から南下する府内・日田往還を通すなど土木事業を次々に行った。これらの街路は府内あるいは鶴崎町を起点とする豊前道、伊予街道、肥後街道、日向道、臼杵・府内城路などが通り、参勤交代路、幕府の陣屋を結ぶ道として機能した。慶長十三年（1608）には、領内の検地を実施している。

※この頃の年号である慶長十年銘の付箋のついた「府内絵図」（大分大学図書館蔵・米屋町依屋旧蔵）が存在する。「慶長拾年十一月 府内絵図」の貼り紙があり、現存する府内町絵図のなかで最古の年号を持つ。天守以下、櫓・門など、城郭諸施設の間数や町の区画規模のほか、堀の幅・

深さなど詳細な数字の注記があり、府内城下を知る上で最も精緻な絵図であるが、図中の記載内容に同時代性の疑わしい点もあり、現在は寛文七年（1667）以降の府内城下を描いたものとして位置付けられている（註3）。

一相次ぐ藩主の交代ー＜江戸前期＞

寛永十一年（1634）、竹中氏二代目の重義は、長崎奉行在職中の不正を理由に江戸で切腹を命じられ、竹中氏は滅亡する。同年、下野国（栃木県）壬生城主であった日根野吉明が二万石で入封した。吉明は城下繁盛のため、浜の市の再興と援助、府内城・城下町の再整備を行ったほか、初瀬井路（慶安三年～）をはじめ用水路の開削・整備を精力的に行い、新田開発を進めるなど積極的な領国経営を行った。また、豪商守田弥之助（山弥長者）一族の処刑をおこなったのも吉明の治政下であった。ところが明暦二年（1656）、吉明には世継ぎが無く日根野氏は1代で断絶したため、府内藩は一旦幕府の管理下に置かれ、その後2年間は近隣の杵築城主松平英親・日出藩主木下俊治・臼杵藩主稲葉信通が順番で城代を勤めることとなった。このように、17世紀前半の府内藩は、藩主の交代が相次ぐ混乱の時期であった。

万治元年（1658）2月、大分高松にいた松平忠昭が新藩主として二万二千石で入封し大給松平氏の府内藩が成立した。これにより、江戸前半期の府内藩の混乱に終止符が打たれ、以後明治に至る約200年間は松平氏による支配が行われることとなる。

※日根野治世期の正徳四年（1644）、「豊後府内城之絵図」（内閣文庫）が郷帳・国絵図とともに幕府へ提出された。城下町全体が描かれており、全体に彩色され城と武家屋敷・城下町の区画の大きさが注記されている。また、城内の様子が詳細に描かれており、江戸初期の府内城の実態を知る上で貴重な資料となっている。

一繁栄から衰退へー＜江戸中頃～後半＞

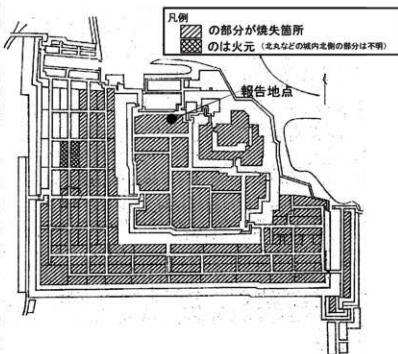
豊後府内藩の城下は江戸時代において豊後最大の都市であり、元禄七（1694）年に府内城下を訪れた貝原益軒は、「町すこぶるひろし、万の売り物備われり」などと記しており（『豊国紀行』）、その繁栄がうかがわれる。

しかしながら18世紀代に入ると、寛保三年（1743）年大火をはじめ宝永の大地震、安永の大地震などの災害が相次ぎ、寛保の大火では天守閣以下のほとんどすべての城郭施設と城下町のほぼ全城を焼き尽くす大惨事となった（第4図）。こうした相次ぐ災害からの復興は小藩にとってきわめて重い負担となった。また、周辺諸藩が専売制を敷き、自藩領の振興をはかる経済政策をとったことや、府内周辺に所在する諸藩領の在町が小都市として発展したことも加わり、次第に経済的な中枢機能も失われていった。石高の大きい諸藩の城下町が経済的中枢機能を維持・発展させ、18世紀以降農村からの人口流入に伴って城下町が次第に拡大していったことは対比的に18世紀後半からは、府内城下町は次第に衰退期に入り、人口も減少していった。江戸前期に城下商人の大部分が出店し繁盛した浜の市も、中央市場と結びついた城下での常設店舗による営業が商業活動の中心となり、城下からの出店は減少していった。天明三年（1783）に府内を訪れた古河古松軒は「昔時は大ひに繁盛せし所ゆへに城も小ならず、町わりも古しへの形残りし所も見えて、豊後にては能き処なり（中略）、いまは遠浅の湊となりて大舟は入る事ならず、二百石積の船ぐらひまではやうやうに入ると見へし、当御城主松平長門候の二万石の知行故に相応の市中にして、今にてはさしての所とは見へざりしなり」（『西遊雜記』）と記しており、衰退期を迎えた府内の状況がうかがえる。18世紀中頃以降の財政の行き詰まりから、府内藩は、宝暦三年（1753）に銀札を発行したが、文政年間（1818年から1830年）には札崩れの危機に直面。藩では財政立直しのため度々改革が試みられたが、根本的な解決にはいたらず10代松平近説襲封後の天保十三年（1843）、家老の岡本主米安展と日田豆田町の豪商、博多屋（広瀬）久兵衛による天保改革が実施された。徹底した倹約と特産品の開発をともなう専売制の強化につとめ、中でも豊後を代表する特産品であった青筍（七島蘭でつくった畳表）やロウの専売制で一定の成果を出し、藩財政は一応の安定を得た。

一府内城下から大分市の中心へー＜幕末～昭和＞

嘉永六年（1863）6月のペリーの浦賀来航から明治四年（1871）の廃藩置縣までの17年間は近世から近代へ

の過渡期として未曾有の混乱期であった。九州における尊王攘夷運動の展開では、薩摩藩の動きは飛びぬけていたが、その他の藩については、極めて低調であり、府内藩の大給松平氏、杵築の能見松平氏、延岡の内藤氏、島原の深溝松平氏といった譜代大名の諸藩領、また、外様小藩の所領、幕府領の入り込みが著しい豊後はそれらが互いに牽制しあい、尊王攘夷運動などの展開は目立ったものではなかった。とりたて府内藩は、藩主松平近説が元知元年（1864）、奏者番・寺社奉行という幕閣の要職に就任し、三年後の慶応三年（1867）に若年寄へ就任したこともあり、府内藩の尊王攘夷運動は根本的な制約をはらんでいた。しかし、その後の長州征伐・大政奉還、鳥羽・伏見の戦いのなかで、新政府側へと態度を変え、府内藩は新政府の支配下へ入ることとなった。明治二年（1869）



第4図 寛保三年（1743）の大火で焼けた府内城下の範囲
（大分市史中巻より一部改変）

の版籍奉還、同四年7月の廃藩置県により府内藩領は府内県となり、役所は城内に置かれた。同年11月大分県となり、翌、明治三年（1870）5年1月に南勢家町に仮県庁が開かれた。3月1日、仮県庁は府内藩の藩校であった遊覧館に移り、本格的な県政が始まることとなる。同8月には荷揚町・旧府内5方町、南勢家町が合併して大分町が成立した。府内城は明治五年をまけて廃城となり、城内には大分県庁がおかれることとなる。旧府内の地が県都に選ばれたのは、古代の豊後国府に始まり、中世・近世を通じて豊後の政治・経済・文化の要の地として伝統的にその役割を果たしてきたためといわれる。これにより、旧藩主は維新政府の任命した一地方官（知事）となり、藩の実体が名実ともに崩壊したことを告げた。以後、大分市中心部は中央集権化を進める近代国家に対する一地方への変容を余儀なくされた。

近代都市大分市は、近世城下町域を踏襲する形で発展を迎えるが、府内城下では17世紀に西新町と東新町が城外に設けられて以降、新町の建設は行われず、明治を迎えた際は、町の範囲は基本的に17世紀と変わらないものであり、大正三年の陸軍陸地測量部作成の地図においても大分市の市街地は依然として近世城下町の範囲を大きく出していない状況が読み取れる。なお、旧府内城下には本格的な洋風建築として、現「赤レンガ館」が大正3年（1913）に辰野金吾らの設計による株式会社二十三銀行の本店として竣工。戦災で一部外壁を残し全焼したが復興され、銀行本店の移動をへた現在も町のシンボルとして近代遺産の重厚さを伝える。

昭和二十年（1945）7月16日、30数機のB29爆撃機による焼夷弾攻撃を受け、旧府内城の西丸南西角二重櫓・東丸南西角二重櫓（人質櫓）、西丸南側宗門櫓（平櫓）を残して多くが消失、旧城下も「大分駅に立ってながめたら、浜町の海が見通せた」といわれるほど壊滅的な破壊を受けた。その後、列島規模での奇跡的な経済復興のなかで、大規模な市町村合併により新大分市が成立、新産業都市として旧城下の範囲を越えた新たな現代都市へと飛躍的に拡大することとなった。

戦災と急激な都市化により府内城（昭和36年に県指定史跡へ。石垣、水堀、櫓群、帯曲輪石垣が残り、廊下橋が復元され、現在城址公園として整備）を残して、城下町の面影を偲ぼせる景観がほぼ失われたが、旧三ノ丸エリアに残る白壁の家屋や、かろうじて空襲の被害が軽微であった千代町・大手町・長浜町付近の区画が城下町

の町割をほぼ踏襲し、一部では白壁の商家や蔵、瓦葺の伝統的な町屋が城下町であったたずまいを残している。しかし、昭和38年に施行された新地番表示により江戸初期以来城下町内で使用されていた47の町名が公式には使用されなくなり、城下の痕跡を人々の記憶として伝えていくのは非常に困難になっている。

現在、大分市では暮らしやすい都市の構築と個性（魅力）づくりの一環として市街地の施設案内板を整備するとともに、「通称名」・「旧町名」などを表示することで、地域に誇りをもてるような施策を実施中である。現在の活動の一例として、旧城下に点在する公園内に近世城下町についての説明板を、旧町名の看板を現地に設置する予定である。都市化の波で忘れ去られた近世城下町としての中心市街地の歴史的価値の周知することで、地域のアイデンティティの形成、地域活性化へと繋げていきたい。

[府内城と城下町]

府内城及び城下町は、南北約1km、東西約1.2kmの規模を有し、「七藩八領」と称される小藩分立の状態であった。府内藩は大給松平時代以降、府内藩が二万二千石に過ぎなかったにもかかわらず、小藩らしからぬ規模であることが知られる。これは福原直高の入封当初、大分郡・速見郡十二万石の城として築城され始めたらしいこと、中世府内町の移転により大友氏時代から続く豊後の経済的中枢機能を引き継いだことに起因すると考えられる。

福原直高改易後、府内城建設を引き継いだ竹中重利は、府内城の増修築に取りかかり、石垣の築造に当たっては加藤清正に数千人の石工の派遣を願い、大坂や京都伏見から大工や瓦師を招いている。慶長七年（1602）には四層の天守閣と諸櫓・門・三ノ丸堀、後に山里丸となる北西砦が完成し、府内城の中心部分の全容が完成。その後は城下町建設に移り、慶長十年（1605）に外堀を掘削、さらに慶長十二年（1607）には城下への出入口として笠和口・堀川口・堀九升口の三口御門が設けられた。また、慶長十三年（1608）には、海上交通の拠点として城下の西北に堀川を掘削し、京泊と命名した。これにより、府内城・城下町および、関連施設は完成を見た。

[三ノ丸・城下]

前述した慶長十年（1605）の竹中重利の再建のなかで、城下町の外側に外堀が掘削され、これにより府内城下には4つの堀が存在する事となった。最も内側の堀は本丸を囲むもので、現在は城址公園内に埋没している。2番目は西丸・東丸を囲むもので、明治六年（1873）に一部埋めたてを行ったものの、概ね大部分が残存している。

府内城下を描いた現存する最も精緻なものは、前述したように大分大学付属図書館所蔵の慶長十年（1605）に作成された、「府内城下絵図」（以下、慶長絵図と略す）であり、この図をもとに昭和52年に大分市史編纂会によって作図された、府内城・城下町の復元図（第3図）を下敷きに、規模や構造を見ると、路上3番目の中堀は、三ノ丸を囲むもので、南北長256間（約512m）、幅22間（約40m）、東西長269間（約538m）、最大幅21間（約42m）を測る。城下町は三ノ丸の外側の東西10町（約1,100m）、南北9町（約1,000m）の範囲を長方形に区画した町割りを行っており、町数は、門内に47町、門外に5町の合計52町を数える。町屋部分の道幅は、一部を除き表通りが約6m、裏通りが約4mを図る。それに対して、防衛上の理由から三ノ丸部分の道幅は、最大20mから最小約2mと画一性がなく、屋敷割りも町屋部分と比較して、やや複雑で不統一な地割りを呈している。

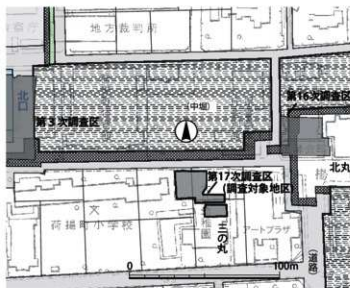
※天明五年（1785）の「豊後国府内城下町絵図」（大分県立図書館蔵）と享和二年（1802）の「清水流規矩元法分間絵図」（佐藤三兵衛撰写図（大分県立図書館蔵）は三ノ丸の武家屋敷地の居住者名が記されているほか、「清水流規矩元法分間絵図」には城下町内の建築物が立体的に描かれており、19世紀初頭の府内城下の様子を具体的に知る事ができる。

2. 調査地点周辺の環境と問題点の整理

近世の城下絵図から推定された『大分市史』付図Ⅳ「府内城下の復元図」（以下、復元図）によると（註4）、当調査区は三ノ丸の武家屋敷地に相当し、具体的には屋敷地3軒分の地割りにの位置にあたる（第6図）。調査地周辺の問題点の整理を兼ねてこれまでの調査成果をまとめる。



第5図 調査地点位置図2 (1/2,500)



第6図 府内城下における調査地周辺位置図 (1/2,500)

■考古学的にみた三ノ丸

府内城・城下町跡三ノ丸周辺の発掘調査概要について表1にまとめたが、これによると、今回の調査区を含めて現在6地点の調査が行われている。これまでの成果としては、①17世紀～19世紀にわたる都市的な遺構および、上手の陶磁器の発見や、焼継ぐ文字による屋敷居住者の比定作業が進み、家老屋敷地の確定と屋敷地割りの推定(1次)、町屋域と三ノ丸を繋ぐ北口や北ノ丸の実態と変遷の推定(3・16次)などが行われている。また、②府内藩記録に残る城下町を襲ったあいつく大火が、考古学的に実証されているのも大きな成果である。さらに、③戦国時代以前の三ノ丸北側エリアは、従来当時の海岸域と考えられていたが、調査の進展に伴って、三ノ丸南側の1・2次調査で確認される中世の遺物・遺構の範囲が北側にも展開することが判明し、11次では鎌倉期に遡る大溝が、18次では戦国期の石組井戸の他、平安期までの遡る井戸が発見されるなど、近世以前の沿岸部の土地利用の実態が徐々にではあるが明らかになってきた。また、16世紀の遺構については戦国時代の『府内古絵図』に記される住吉川から大分川河口に描かれる同慈寺と、これにとりつく町屋表現のある地域(近世城下の三ノ丸・浄安寺の周辺)の実態を解明する上でも注視される事象である。

■本調査区における課題

これらの成果を踏まえて、復元図をもとに調査地点の立地をみてみると、調査区の中央やや西より付近を南北に、調査区中央やや南側を東西に屋敷境が推定されている。このうち、南北地割は、現在その痕跡は全く確認することができないが、東西地割は調査区であるアートプラザ駐車地点と府内こどもルームの敷地境として現在みることができる(第6図および第26図参照)。発掘調査を行うにあたってこの地割りがどこまで遡り、どのような構造として考古学的に把握しうるかを検討することは近世都市府内城下の土地分割手法を知る上で重要な点であると考えられる。

以上のことから、①近世以前の土地利用状況の確認 ②城下町形成以後の武家屋敷(侍屋敷)としての空間利用と、地割の関係性 ③近世から近代にわたる土地利用形態の変遷 を目的として調査に臨んだ。(調査方法と整理方法については長直信編2007『大友府内11』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第74集の第Ⅱ章 3「調査方法」4「整理方法」を参照。)

表1 府内城三ノ丸調査地一覧

調査 地点	遺跡における比定地	調査期間	面積 (㎡)	調査 主体	調査用途	調査概要	文献
1	三ノ丸武家屋敷(木村家) および福寿院	19910401～ 19910630	2,120	黒 熊庁舎建設		「木村」の姓類文字を有する陶磁器から府内藩 主老木村家の屋敷跡であると考古学的に 証明された。寛保の大火(寛保3年(1743年)に 比定される火災記録一紙資料が出土、慶長 期に三ノ丸が造成されたことを裏証する資料 も出土。	文獻1
2	三ノ丸武家屋敷(木戸家)	19930719～ 19930803	45	黒 モニュメント 建設		「口入 旗本」の姓類文字を有する資料が 出土し、府内藩主老木村氏九郎の屋敷跡で あることが証明された。19世紀代の土器も出土 した。	文獻2
3	三ノ丸北口 堀	19941011～ 19941227	1,800	黒 警察署建設		三ノ丸北口土橋および石堀と堀、北口堀門の 礎石が出土、堀門の位置が特定された。	文獻3
4	三ノ丸武家屋敷	199304～ 199305	800	市 民間開発		17世紀初期に築る石堀も倉庫の遺構、17世紀 後半ないし18世紀後半～19世紀初期の長方 形土塼も出土。	文獻4
6	堀下橋及び周辺	19950517～ 19950828	590	市 公園整備		西ノ丸と山置丸を結ぶ堀下橋の基部と竇木門 の礎石を確認。また西ノ丸と本丸を結ぶ土橋 および西ノ丸内部の建物跡等を確認した。	文獻5
11	三ノ丸武家屋敷(森下家) および浄安寺	19960728～ 19991031	250	市 民間開発		府内城築城時の惣地層を積み上下で遺構が 検出され、下層からは戦国時代の遺構が出土 した。浄安寺の遺構の瓦片も検出。森下家 の屋敷主である森下氏を示す「森下」の姓類 文字を有する陶磁器出土。	文獻6
16	北丸および堀	20050801～ 20060311	649	市 保健所建設		「府内総図」に描かれた北の丸西側の石堀及 び堀が検出され、さらにこれより古い府内城 築城時に築る石堀跡も検出されて、築城初期 の遺構が特定された。18世紀に限定される後 継土 瓦片も出土。	文獻7
17	三ノ丸武家屋敷	20070511～ 20060328	482	市 公共駐車 場建設		近世後半期を中心とした2つの芝地面であり、 18世紀前半代の火災跡埋土等が検出され、 その下層より、松島五郎兵衛を多量に含む中 世の遺物を含む層を確認した。	本書
18	三ノ丸武家屋敷 道路	20070702～ 20070827	404	市 民間開発		第1面からは17世紀代～19世紀代の遺構が、 惣地層を除いた第2面(砂層)からは近世の 居住建物、古代の井戸等が確認されている。	文獻8

〔文獻〕

文獻1 大分県教育委員会1993「府内城三ノ丸遺跡-大分県民同庁舎(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」

文獻2 大分県教育委員会1994「府内城三ノ丸遺跡-大分県民同庁舎(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」

文獻3 大分県教育委員会1996「府内城三ノ丸北口跡-大分中央警察本部別府庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」

文獻4 大分県教育委員会1994「府内城-堀下跡跡(大分合同印刷社建設予定地)」大分市埋蔵文化財調査年報」

文獻5 大分県教育委員会1995「府内城-堀下跡跡(大分合同印刷社建設予定地)」大分市埋蔵文化財調査年報」vol.7 1995年度

文獻6 大分県教育委員会1999「府内城-堀下跡跡第11次調査」大分市埋蔵文化財調査年報」vol.10 1999年度

文獻7 大分県教育委員会2007「府内城-堀下跡跡5-第16次調査報告書-」

文獻8 大分県教育委員会2008「府内城-堀下跡跡7-第16次調査報告書-」

- 注1) 府内の町の発掘調査開始より10年以上が経過しているが、この歳月の把握をとおるような明確な記録は認識できておらず、今後関係考古学上の見点からの調査を進めていく必要がある。
- 注2) 木村幾多郎 2001「豊後府内町移転と旧府内町」『大分・大友史研究論集』
- 注3) 大分市歴史資料館 1995「第14回特別展 城のある風景 豊後府内城」『(4) 府内城下町跡について』
- 注4) 大分市史中巻村の解説によると、この府内城下町跡に当たっては、寛政10年の図説を基に作成されており、図説中に記された尺度を基本に、明治前期の地図図、都市計画局の図解図、ボーリ
ング資料・堤防線などを経て作成されている。結果、絵図の尺度は1間を約2mに換算することで、現在の都市計画と対応することが可能となっている。なお、第3期は広島商標 2008「府
内城・城下町跡5」第5章3「府内城下の堀元河との位置関係の検討」の節に市史の図説図を補正して作成された図を用いた。具体的な補正方法については上記文献を参照したい。

参考文献

大分市史編纂協議会 1955「大分市史」上巻

大分市史編纂委員会 1987「大分市史」中巻、下巻

大分市教育委員会・中世都市研究会 2001「中世大友再発見フォーラム 南蛮都市・豊後府内一部れと交易」

大分市教育委員会 2006「中世大友再発見フォーラムⅡ 府内のまち 宗廟の栄華」

大分市教育委員会 2008「府内城・城下町跡5」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第78集

大分市歴史資料館 1995「第14回特別展 城のある風景 豊後府内城」

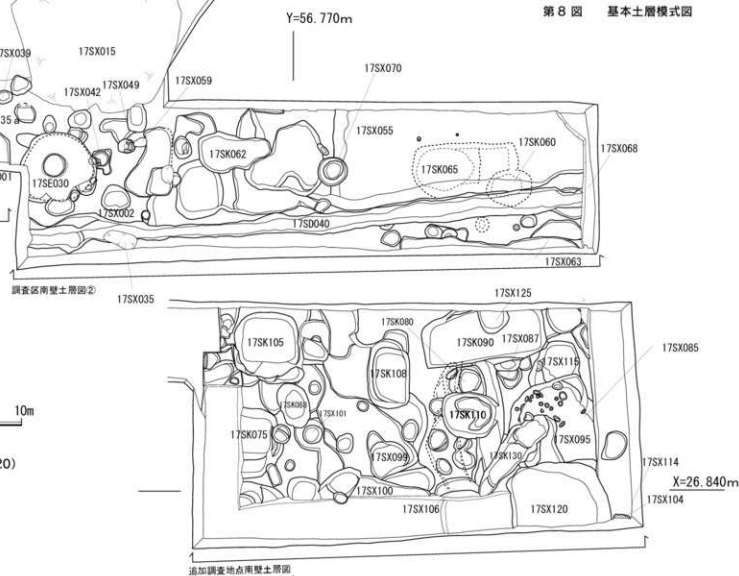
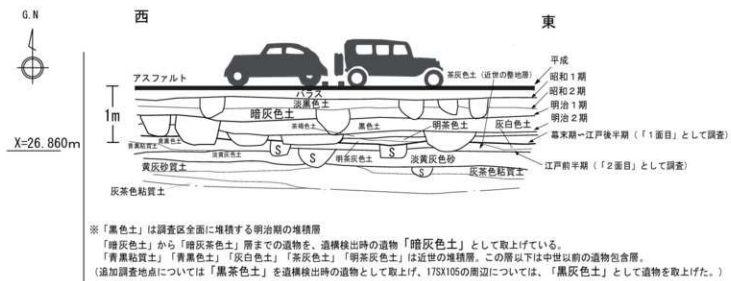
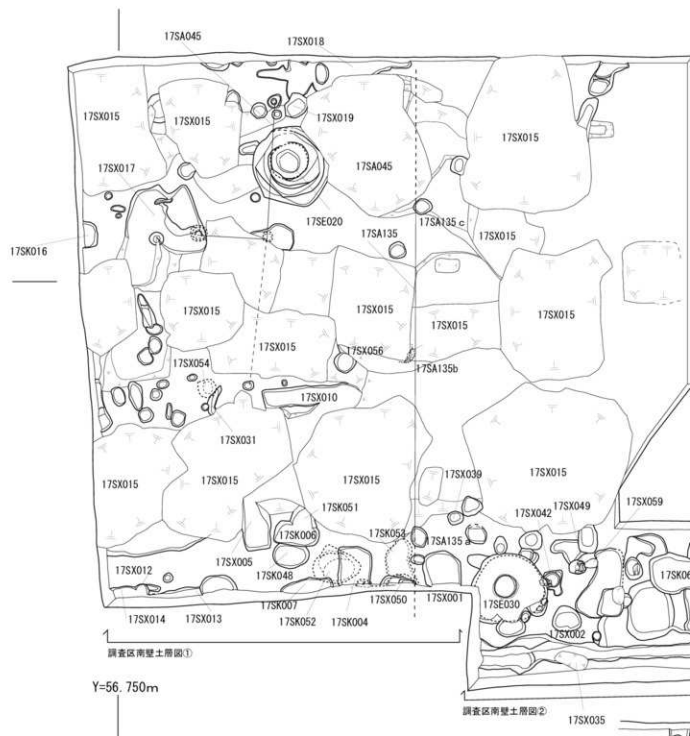
木村幾多郎 2001「豊後府内町移転と旧府内町」『大分・大友史研究論集』

平凡社 1995「日本歴史地名大系 45 大分県の地名」

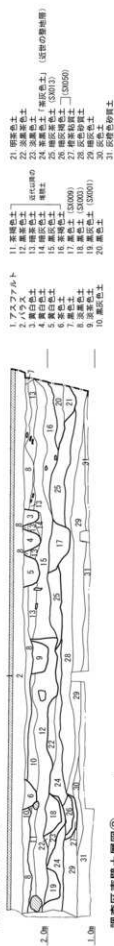
第三章 調查報告(主要遺構)

開発対象面積は758㎡、調査面積は482㎡である。調査地は、旧海岸に程近い標高2mに立地する府内城・城下町跡の三ノ丸に位置する。明治から昭和30年頃までは宅地であり、その後、林業会館が建設され、近年まではアスファルト舗装された駐車場であった。近世の城下絵図から推定された「復原図」によれば3軒の屋敷地を含む武家屋敷地にあたる位置にある。

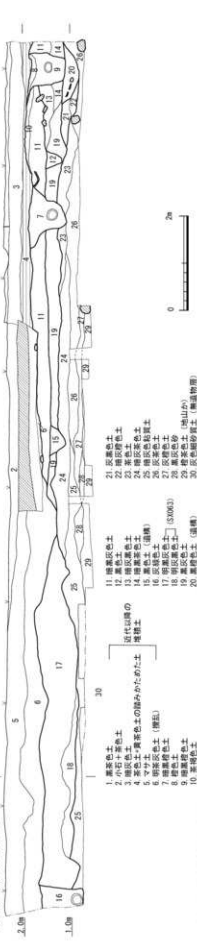
第7図 府内城・城下町跡第17次調査遺構切り合い図(1/200)



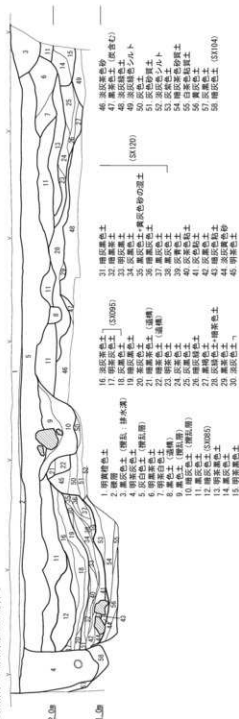
調査区南壁土層図①



調査区南壁土層図②



追加調査地点南壁土層図



第10図 調査区南壁土層図 (1/80)

図の絞り込みや、時期を違えて南側を追加調査した経緯から、ややいびつな調査区形状となっているが、調査次数の切り替えや調査区の区分け（A区・B区など）は行っていない。ただし、追加調査した箇所については「追加調査地点」との表現を用いる。

2. 基本層序（第8図）

厚さ8cmのアスファルトを除去すると10cmほどのバラスが堆積しており、これを除去すると腐土に堆積した近・現代の整地層が堆積する（これまでの城下町の調査では、1945年の大分空襲に伴う焼土層が確認されるが、当調査区では確認できない）。この面を除去すると、標高1.8m～2.0mほどで近代の包含層および現代の遺構が展開する。この包含層「黒色土」を除去すると、18世紀～19世紀代の遺構が展開する。調査はこの面を「1面目」として調査した。1面目調査後、調査区中央部でのみ確認される近世前半～中頃の可能性がある包含層「茶灰色土」を除去すると砂質の遺物包含層をベースとした近世の遺構がわずかに展開しており、これを「2面目」として調査を行った。2面目には、中世から近世の遺物包含層である「淡黄灰色砂」が厚く堆積する。調査区北西部は、前述したように大規模な攪乱による削平が行われており、南側の1面目とした遺構面との標高差が最大0.6mとなる。このため、調査区北西部の遺構検出面では、1面目がほぼ削られ、2面目の整地層と考えられる「茶灰色土」が島状に残り、中世～近世の包含層である「淡黄灰色砂」が面的に露出する状態であった。なお、遺構の完掘後、東西と南北に長さ2mほどのトレンチを入れたが、安定地盤はなく、標高1.0m以下でも砂層が堆積している状況であった（写真図版6～30）。

3. 主要遺構

調査地点を特徴づける主要な遺構について各検出面に分けて報告する。

① 1面目 主要遺構

表土除去後に検出した遺構を1面目として報告するが、攪乱による削平が著しい北西部半分については、どの面から掘り込まれたものかは判断できない。したがって、明確に2面目の遺構ととらえられないもの以外は1面目として報告した。

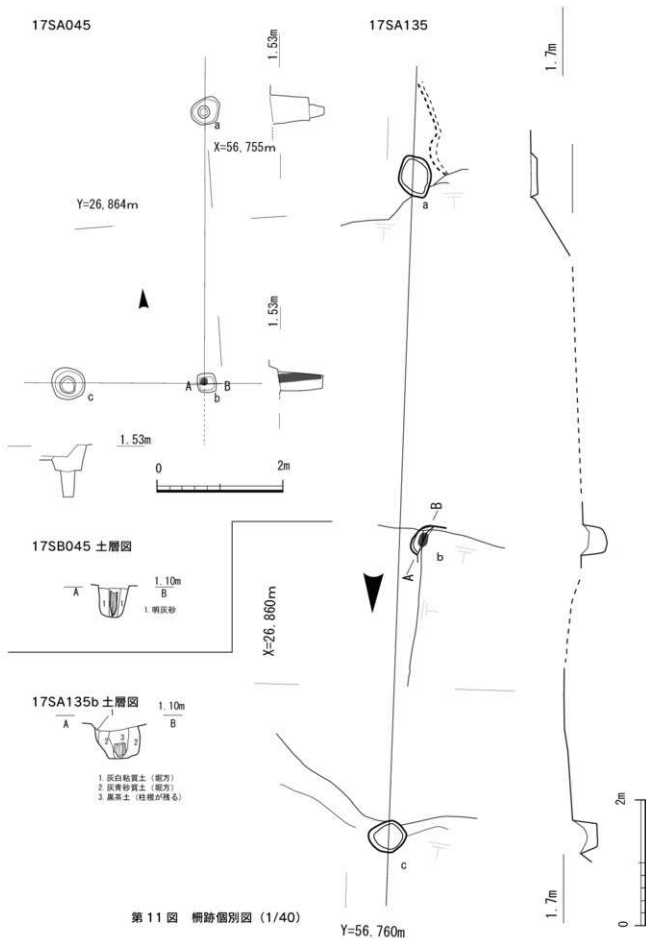
■ 欄路

17SA045（第11図）

調査区北西部で検出。SA045 bを掘り下げ時に柱痕を検出したため、四周を確認すると、北と西側にピットが並ぶことに気が付き掘立柱建物として調査した。調査区北側の攪乱部分に位置するため帰属面は不明だが、中世から近世の遺物を包含する淡黄灰色砂上面での検出であり、出土遺物も瓦器焼片一点と乏しいため中世の可能性もあるが、断定できない。主軸の振れは、N-3°8'53"-Wで、柱間は南北4.3m、東西2.2m+a。掘方のプランは17SA045aのみが方形でその他は円形、17SA045a・cは二段掘りとなる。絵図や現在の地割りを勘案すれば調査区北側より約2m北は、近世段階の東西道路が想定されるため、近世の遺構であれば北にはのびない。また、西側は調査区内では確認できなかった。こうした点から、掘立柱建物としては構造がいびつであり、杭などの区画施設の可能性が考えられる。

17SA135（第11図）

調査区中央で検出。調査段階では認識していなかったが、調査後に、復元図で南北地割が推定されている部分にピットが間隔を置いて並ぶため一連の遺構として報告する。調査区北側は攪乱が激しく、これを欄や板垣跡などのピットと捉えるまでには至らない。また詳細は第IV章でのべるが、遺構間接合遺物の検討などから、これを区画として断言してよいか躊躇するものも事実である。現在7.0mが残り、17SA135 b・cはほぼ同じ底面レベルを測る。主軸の振れはN-0°57'17"-E。17SA135aに関しては、調査時の確認ミスで完掘できていない可能性

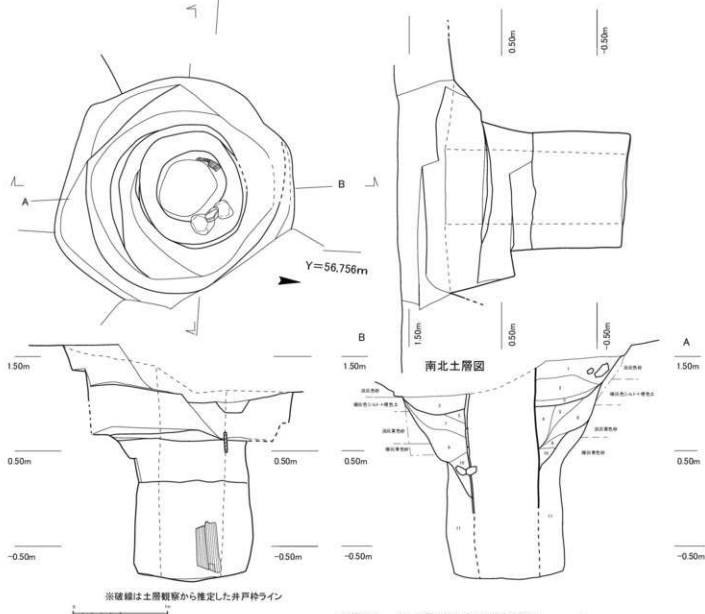


第 11 図 柵路個別図 (1/40)

17SE020

X=26,864m

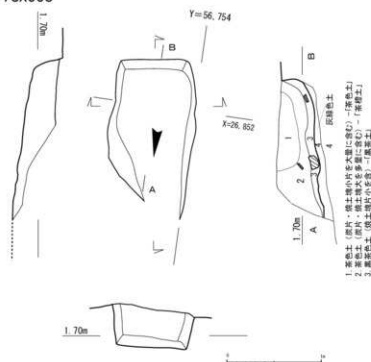
Y=56,756m



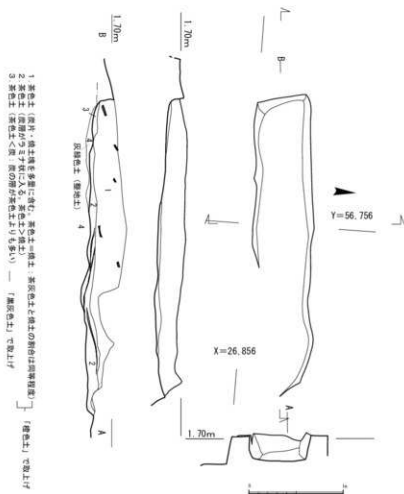
1. 茶褐色土 (1~3層は焼土ブロックを多く含む)
 2. 暗茶褐色土 (やや砂質の土が混ざる)
 3. 暗灰黒色土 (やや砂質の土が混ざる)
 4. 暗灰色土 (やや粘質)
 5. 暗茶色土 (やや粘質)
 6. 暗茶青色土 (やや砂質)
 7. 暗青灰色砂質土
 8. 灰茶色砂質土
 9. 暗青灰色砂質土 (7層より暗い、やや砂質が強い)
 10. 暗灰黄色細砂質土
 11. 灰色砂質土
- 「東方茶灰色土」で取上げ
- 「東方暗茶青色土」で取上げ
- 「東方灰色砂質土」で取上げ

第 12 図 井戸個別図 1 (1/40)

17SX005



17SX010



第14図 火災処理土坑個別図(1/40)

の瓦質製品を5段以上積み重ね、枠の接合には石灰を含んだ黄灰色の簡易セメント状接着材を使用している。枠内中にコンクリートブロックを含んだ埋土が堆積するため、埋没は近現代のものと考えられる。また井戸枠2段分を掘り下げた時点で、掘削を中断していたが、その後、周囲の遺構検出にともなって再度17SE030周辺を検出したところ、現状の掘方プランの外側に、ひとまわり大きな円形プランを確認した。当初の掘方プランと新たに検出した掘方プランには埋土に明確な違いがあることから、別遺構である可能性がある。同一のプランで同程度の深さをもつ可能性があることから、新たに検出したプランも井戸の可能性が想定され、同じ地点で井戸を掘りなおした結果、二重に検出したと考えた。旧プランの規模が直径2.1m、新プランの規模が直径2.4mである。遺物は井戸枠内、掘方ともに非常に少ないが、当初の掘方からは、第29図-1の銅板転写の染付碗が出土している点、当初の掘方を切る遺構17SX042(後述)の埋没年代が19世紀後半代と考えられることから、当初の井戸の時期は19世紀前半代頃と考えられ、掘り返し後の井戸は、19世紀後半以降に掘削されたと考えられる。

■ 火災処理土坑

火災処理土坑については、河野史郎氏の「①埋土の中に多量の焼土塊が詰まった状態であること、②2次被熱を受け変質した遺物の存在が認められること」(河野史郎編2003『府内城・城下町跡第14次発掘調査報告書』大分市教育委員会)の2つの条件を満たすものを対象に認定した。

17SX005(第14図)

調査区南西部で検出。北側を削平さ

れるが長軸 1.7 m、短軸 0.9 m、深さ 0.5 m を測る。埋土は、焼土塊・炭片・陶磁器片を多く含む茶色土が主体。焼土塊の大きさに上下で差があったため、それぞれ「茶色土」、「茶褐色土」に分けて遺物を取り上げたが、時期差はみられない。最下層には焼土片を少量含む黒茶色土が堆積する。層中には、未加工の玄武岩が数点出土したが機能・性格は不明である。遺物や堆積状況からみて掘削後、一度に埋められたと考えられる。北側の大半が欠損しているが、方形を意識して掘削されている。出土遺物の大半が 18 世紀前半代に収まり、ほぼ全ての遺物が被熱を受ける。

17SX010(第 14 図)

調査区中央付近で検出。長軸 3.2 m、短軸 0.65 m、深さ 0.4 m を測る。埋土は、17SX005 と非常に近似した、焼土塊・炭片・陶磁器片を多く含む茶色土が主体。焼土と茶色土の入りがたで 2 層に分けた(調査時は 1・2 層ともに「褐色土」として遺物を取り上げた)。最下層は炭層が部分的に入る茶色土主体の層である。堆積状況や平面プランについても 17SX005 と同様であるが、断面の立ち上がりはより直線的である。出土遺物は、近代の遺物一点出土している(第 32 図 8)が、被熱した痕跡はみられず後世の混入品と考えられ、遺物の主体は、被熱を受けた 18 世紀前半代の陶器貯蔵具や肥前系染付供膳具類である。

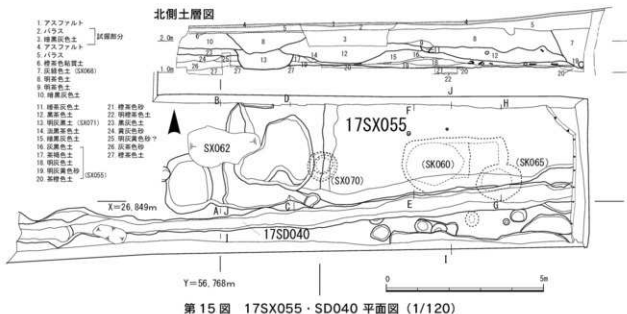
※ 17SX005 および、17SX010 は遺構の形状、堆積状況、遺物の遺構間接合の多さから両者は同時期に掘削され埋められた遺構と考えられる。よって主体をしめる遺物の時期からみて、17SX005・SX010 の埋没時期は 18 世紀前半代と考えられる。なお、図示していないが、平瓦片も一定量出土しているが、軒瓦は出土していない。

■大型廃棄土坑

17SX055(第 15・16 図)

調査区東側で検出。東西 13 m + α 、南北 3.3 m + α の大規模な土坑。北側は調査区外へ延びる。遺構検出地点周辺では、表土剥ぎの段階で多量の陶磁器類が出土していたが、当初はプランが認識できなかったため、遺構検出の為の一段下げまでは遺物包含層「暗灰色土」として取上げた。その後、調査区南側・西側にプランを確認し、東側は 17SX068 とした明治期の土管に一部削られ調査区外へ、北も調査区外へ延びる大型遺構と判断し掘り下げを行った。17SX062、17SX069、17SX071 などの近現代の擾乱に削平を受けた。堆積は大きく「暗灰色土」、「灰色土」、「灰白色土」、「黒色土」、「暗黒灰色土」、「灰茶色土(取上げでは「最下層」としている)」の順で堆積しており、「暗灰色土」、「黒色土」からは、多量の遺物が出土した。遺物は陶磁器・陶器・土師器があり、完形品となるものも多いが、出土状況に規則性はみられず破片資料も多い。また、瓦類の出土も多く中央より東側では「暗灰色土」中より「助之茶」銘のある平瓦を含む瓦類が多量に出土した。「暗灰色土」層はブロック土を含み、一気に埋め戻した可能性があるが、それ以下の層にはブロック土は含まれず、自然堆積と考えられる。よって、現状では、「滞水状況が一時みられる大型の穴が、自然に埋没していく中で、ある時期に大量の陶磁器類とともに一度に埋めた」状況と考えられる。掘削時点では、掘削標高が下がるにつれて、砂質が強くなり、遺構周囲の整地層との区別が不明瞭なため底の認識が困難であったが、明らかに異なる埋土をもつ円形プランの遺構(17SX070)、長方形プランとなる遺構(17SX065)を検出し、これらの遺構の検出面を 17SX055 の底面として認識した。土坑の底は西端付近に凹凸がみられるが、東側半分は比較的平らである。遺物は、陶磁器・陶器などの食器、貯蔵器などの他、鉄製品も多い。18 世紀後半～19 世紀前半代のものが多いことから、遺構の埋没時期は 19 世紀前半と考えられる。17SX055 に切られる土坑 17SX065 の埋没時期から、掘削は 19 世紀初頭と考えられ、掘削から埋没までの時期幅は比較的短期であったと考えられる。

なお、各層からは拳小程度の緑泥片岩がバケツ 1 杯分出土している(写真図版 21 - 160)。これらの石は現在、佐賀県半島の海岸で採集されるもので、彼地より運ばれたものと考えられる。調査地点が屋敷の裏手と想定されることから、小規模な庭などにこれらの石を用いていたかもしれない。掘削途中に腐植土が面的に堆積している箇所が見られたことから、調査当初は「池」状の遺構とも考えたが、遺構すべてを検出できていないため断定で



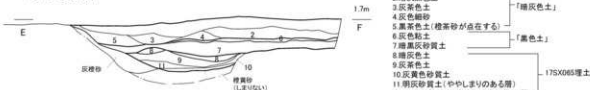
17SX055土層図 (A-Bライン)



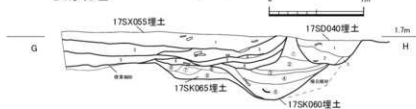
C-Dライン土



E-Fライン土層



G-Hライン土



●17SX055埋土

- 1 黒灰色土 (スミ片 焼土を含むやや砂質の層) 「暗灰色土」
2 暗黒茶色土
3 暗茶色土 (砂質がやや強い 瓦が非常に多く出土) 「黒色土」
4 暗茶色粘質土
5 灰茶色土 (スミ片含む) 「暗灰色土」
6 暗灰色土 (スミ片含む) 「最下層 (灰茶色土)」

●17SD040埋土

- ① 暗灰色土
② 暗茶色土
③ 暗灰色土
④ 暗灰色粘質土
⑤ 暗灰色粘質土

●17SX065埋土

- ① 暗灰色土・灰黄色粘質土
② 暗灰色土
③ 暗茶色粘質土

17SD040土層図 (I-Jライン)

S-40 土層図 (I-Jライン)

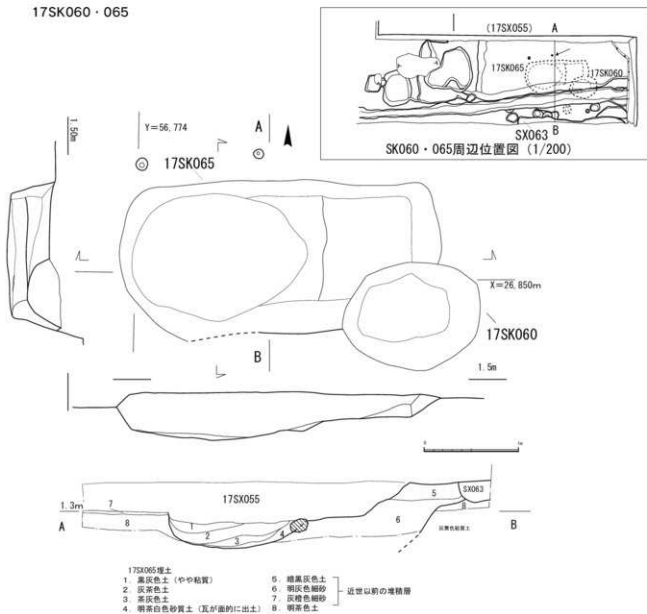


SX055土層模式図



第16図 17SX055・SD040 土層図 (1/40)

17SK060・065



第17図 土坑個別図1 (1/40)

きない。しかしながら、屋敷地の裏手に規模の大きい掘削をともしう窪地が存在していることは特筆される。なお、埋没後に掘削される遺構が昭和前期に下ることから、遺構の周囲は幕末～昭和前期までは空閑地であったと可能性はある。

■溝状遺構

17SD040 (第15・16)

調査区中央で検出。調査区で唯一の溝状遺構。断面「U」字型で幅0.7m、深さ0.25～0.3mの東西方向の溝状遺構。床面は東西の地点で大きなレベル差はみられないが、傾向としてやや東側へ傾斜をもつようである。溝底には粘質の強い土が堆積し、最上部にはブロック土の入る層が堆積することから溝には排水的な機能があり、その後人為的に埋められた可能性がある。18世紀後半に埋没したと考えられる。

■土坑

17SK004（第9図）

調査区中央東側で検出。東西 1.1 m、南北 12.6 m、深さ 0.1 m の略方形の浅い土坑。黒色系の埋土が堆積しており、瓦質土器をはじめとした雑器類がまとまって出土した。

17SK006（第9図）

調査区南西部で検出。東西 1.4 m、南北 0.8 m、深さ 0.56 m の長方形プランの土坑。竈の一部かと思われる土製品の他、関西系の土鍋などが出土した。17SK048 との切り合いより、19 世紀前半の埋没と考えられる。

17SK048（第9図）

調査区西側で検出。17SK006 に切られる。東西 1.16 m、南北 0.8 m の土坑。端反碗が出土しており、19 世紀前半に埋没したと考えられる。

17SK060（第17図）

調査区東側の 17SX055 の底面部分で検出。東西 1.45 m、南北 1.14 m の楕円形プランとなる土坑。17SX065 を切る遺構である。遺物は、18 世紀後半ごろの肥前系染付鉢（初期の蛸唐草文）の出土から 18 世紀後半ごろか。

17SK065（第17図）

調査区東側の 17SX055 の底面部分で検出。東西 3.4 m、南北 1.63 m の隅丸方形プランとなる土坑。西側へ向かって緩く傾斜するテラスをもつ。最下層からは平瓦が面的に出土しているが、底面に貼ったような状況ではなく規則性は看守されなかった。底面である標高 1.2 m 付近は調査区の湧水する標高であり、遺構の底面は常時水が沁みだす状況であった。

17SK075（第18図）

追加調査地点西端で検出。東西 1.35 m、南北 2.05 m の土坑。近代の配管による掘削で西側が削平されている。埋土は黒色系の単一層であるが、掘削途中に土師質土器の大甕底部（第 47 図 14）と、肥前系染付壺（第 47 図 6）を検出した。埋土に変化が見られなかった為、掘削を進めると、大甕には掘方ではなく、底より 16cm 浮いた状態で遺構の底面が検出されたことから、大甕は遺構掘削に伴って掘えられたものではなく、埋土中に含まれる遺物と考えられる。なお、大甕の底部には青銅製の鉤（第 88 図 9）が貼り付いた状態で出土した。

17SK080（第18図）

追加調査地点中央付近で検出。東西 1.1 m、南北 1.6 m の土坑（第 18 図は切り合う遺構を掘り下げた後の図）。近代以降のガラスを含む暗黄色土層を除去すると、両端に炭層がのる暗灰茶色土層が検出され、多くの近代遺物が出土した。堆積状況から、暗灰茶色土および炭層で一度遺構を埋めた後、再度遺構を掘りくぼめ、暗黄色土で埋めたと考えられる。明治～大正期のごみ穴と考えられる。

17SK090（第18図）

追加調査地点中央北側で検出。北西端が調査区外へ伸びるが短辺 1.7 m、長辺 3.9 m のおおよそ長方形状を呈す土坑。埋土は大きく 3 層に分かれるが、各層より近世初頭の遺物をふくむ多くの食器類が出土したことから廃棄土坑と考えられる。18 世紀後半代に埋没したと考えられる。追加調査地点の他の土坑と比較して、主軸が約 8° ほど北西に振れる点が特徴である。

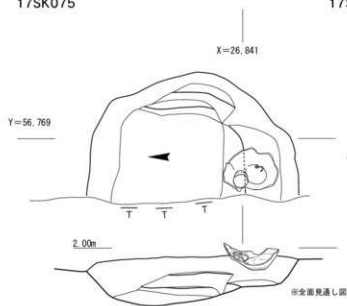
17SK105（第18図）

追加調査地点北西端で検出。東西 2.2 m、南北 2.3 m の方形の土坑。追加調査地点の北西部の遺構面を覆う包含層「黒灰色土」を除くと、方形のプランを検出。ラミナ状に炭層が堆積するが、炭の量から 3 層に分けて遺物を取り上げたが、基本的には単一層である。多くの遺物が出土しており、廃棄土坑と考えられる。18 世紀後半に埋没したと考えられる。

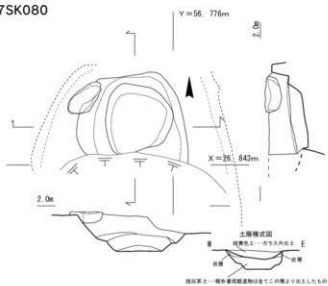
17SK108（第19図）

追加調査地点中央で検出。東西 1.32 m、南北 2.52 m の略方形の土坑。北側にテラスをもつ。遺物包含層であ

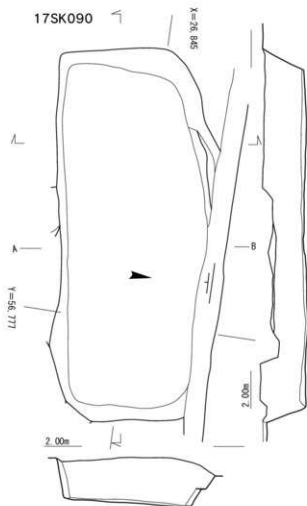
17SK075



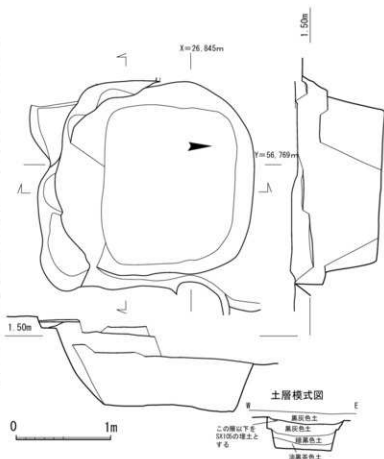
17SK080



17SK090



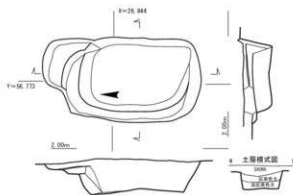
17SK105



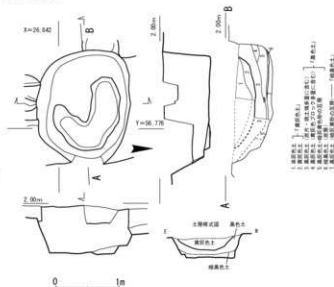
第18図 土坑個別図2 (1/40)

- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土 (砂レキを多く含む)
- 3 暗灰褐色土 (砂レキを多く含む)

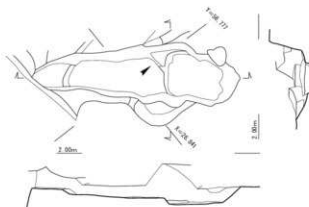
17SK108



17SK110



17SK130



第19図 土坑個別図3 (1/60)

色土」とした土で遺構を埋めた後、再度土坑の中央部分を掘りなおし、「黄灰色土」で埋めた状況であると考えられる。「黒灰色土」中には陶磁器類に加えて土師器類が比較的多く出土した他、魚骨片も多量に出土しており、「黒灰色土」で遺構を埋めた段階では廃棄土坑として機能していたと考えられる。

※これらの4つの廃棄土坑のなかで、17SK105・17SK110には共通して炭層が入ることが特徴として挙げられる。調査時には注意しなかったが、これらの土坑に含まれる炭層は遺物の廃棄にともなって、付近で可燃物を燃焼した際に発生した炭化物が廃棄土坑中に混入したものか。

17SK130 (第19図)

追加調査地点南側で検出。長軸 $3.26 \pm a$ m、短軸1.3 mの楕円形状の土坑。調査区東端に覆う遺物包含層17SK085を除去すると17SK095を切った状態で検出した。追加調査地点では、17SK090を除く他の遺構の主軸が、すべて座標北に沿って形成されるが、この遺構の主軸は大きく東に振れて掘削される。19世紀代に埋没した遺構。

■性格不明遺構

17SK042 (第20図)

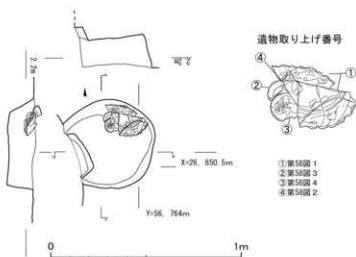
調査区中央部で検出。17SE030(掘り返し後)に切られる遺構で東西0.4 m、南北0.46 mが残る。掘削すると、二つに割れた焼継のある肥前系染付大皿が検出され、さらに掘り下げていくと小皿や猪口などがまとまって出土した。遺構検出時に認識したプランに誤りがないならば、SE030の初期の井戸が形成された後に掘削されている。出土した焼継ぎのある大皿は18世紀後半代の製品であるが、その他の共伴遺物から19世紀後半代に埋没した遺構と考えられる。

る17SK099を除去後に検出。埋土は大きく2層に分けられる。遺物は少ないが、廃棄土坑の一種か。

17SK110 (第19図)

追加調査地点中央で検出。東西1.96 m、南北1.48 mの楕円形状の土坑。東半分が、南北方向の溝に削平される。土層観察より、炭や焼土を多量に含む「黒色土」を切って、土質の全く異なる「黄灰色土」が堆積することから、遺物を多く含む「黒

17SK042



第20図 性格不明遺構個別図1 (1/20)

17SX063 (第9図)

調査区南東部で検出。東西5.8 m、南北0.4 mの遺構で、南・東側の調査区外へ延びる。検出した部分は17SD040と平行しているようにみえるが、西側が南西方向に曲がるように検出しており、両者の関連は不明である。18世紀後半の埋没か。

17SX070 (第21図)

調査区南側の17SX055の下層で検出。17SX055を完掘後、底面より直径0.3 mの円形遺構を囲うように平瓦群を検出した。当初は検出が不十分で平瓦群の外側にある掘方プランを認識できていなかったが、平瓦群を記録し除去した後に、直径0.4 m、深さ0.67 mの桶状の木組みとともに、これを埋める直径0.9 mの円形の掘方を確認した。17SX055により上部が削平されており、木組みの上部構造は不明だが、上部は平瓦で組まれた構造である可能性がある。木組は2段分が残存しており、2段目には底板の存在は確認できない。出土遺物は上部の平瓦が落下したのか、平瓦が木組の底で一点出土したのみである。17SX055との切り合いから18世紀後半以前の遺構と考えられる。トイレ状遺構の可能性があるが、自然科学分析を行っていないため断定できない。今後類似の増加をまって再検討したい。

17SX100 (第21図)

追加調査地点中央南側で検出。東西3.6 m、南北0.95 mの遺構。南側が大きく削平される。他の遺構と比較して浅い。完形の軒丸瓦や軒平瓦片が出土している。18世紀後半埋没か。

17SX085 (第22図)

追加調査地点東側で検出。17SX095・SX115・SX130の上面に位置し、17SX095と17SX115が埋没した段階のわずかな窪みに堆積した遺物包含層と考えられる。完形品の土瓶が出土した。

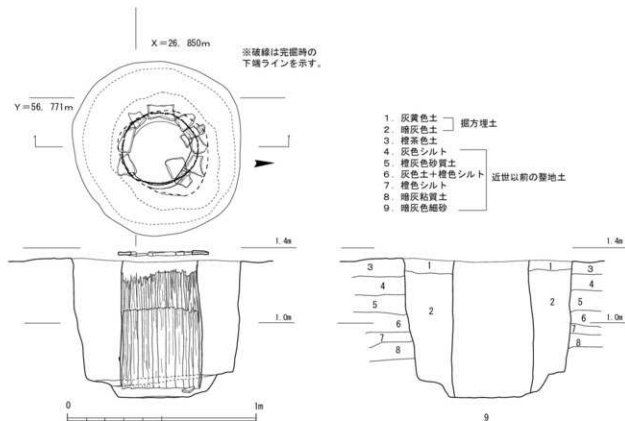
17SX095 (第22図)

17SX085除去後に検出。17SX115とわずかに接し、調査時には17SX115を切る遺構と判断している。東が攪乱に、南が17SX115及び攪乱に削平されるが現状で東西2.7 m、南北2.8 mの台形状に残る遺構。底部は起伏が激しく、粗く掘った為か小さくぼみが底部から壁面にかけて見られる。出土遺物から18世紀後半の埋没と考えられる。

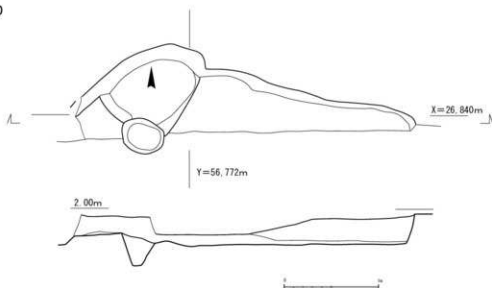
17SK115 (第22図)

17SX085除去後に検出した遺構。南側を17SX095に切られる東西1.48 m、南北1.2 mの不定形な遺構。18

17SX070

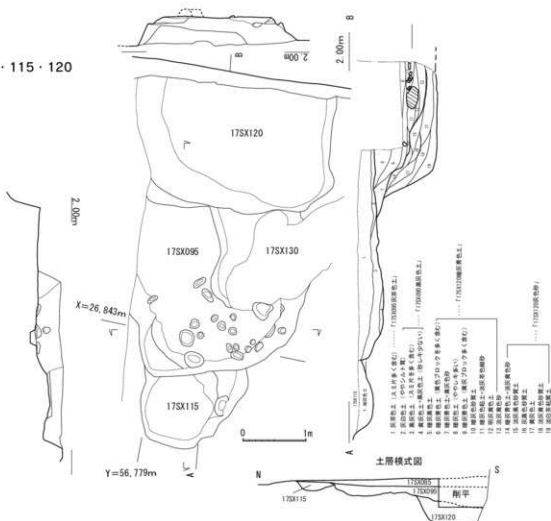


17SX100

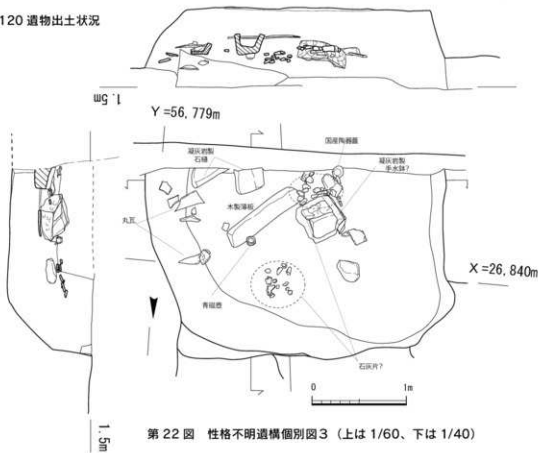


第 21 図 性格不明遺構個別図 2 (上は 1/20、下は 1/40)

17SX095 · 115 · 120

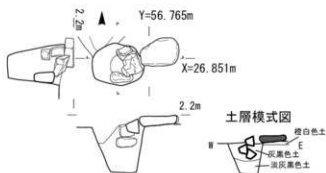


17SX120 遺物出土狀況

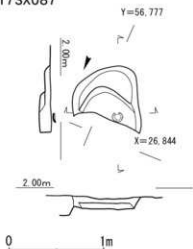


第 22 図 性格不明遺構個別図 3 (上は 1/60、下は 1/40)

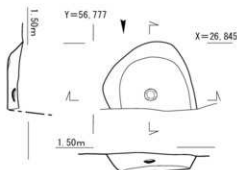
17SX049・059



17SX087



17SX125



第23図 性格不明遺構個別図4(1/40)

状の木製品や瓦、食器類の他、非常に軽い黄灰色の石灰の固まり？や凝灰岩製の樋や手水鉢状の製品が出土した(第22図)。この凝灰岩製品はすべてに欠損がみられ、出土状況からは使用状況を示すような規則性は看守されなかったが、排水にかかわる石製品がまとまって出土していることから、付近に炊事場などが想定できるかもしれない。出土遺物から18世紀後半に埋没したと考えられる。

17SX049(第23図)

調査区南側で検出。東西0.55m、南北0.43mの楕円系プランの遺構で、埋土とともに4点の石が遺構中に詰まった状態で出土した。

17SX059(第23図)

調査区南側の17SX049に隣接する扁平な石材で、掘方は確認できない。建物の礎石もしくは、飛び石となるような据わりのよい扁平石材である。これが当時の地表面上に座っていたと仮定すると、明治年間以前のある段階の地表面レベルは2.2m前後となり、第1面目の検出面の削平はほとんどないこととなる。

17SX087(第23図)

追加調査地点北側で検出。東西0.7m、南北0.6mの遺構で、北側が17SX013に削平される。皿状の鉄製品が一点出土した。

17SX125(第23図)

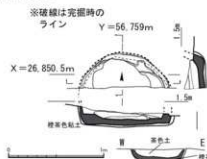
17SX090の下層で検出。東西1.0m、南北0.7mの遺構で、北側は調査区外へ延びるがおおよそ直径1.0mほどの円形の遺構となろう。遺構の中央より完形の京都系土師器皿が出土した。土器の型式から16世紀後半～末のものと考えられ、今回の調査地点の遺構としては最も古いものである。

世紀後半頃に埋没。

17SX120(第10・22図)

追加調査地点南東で検出。東西3.1m、南北2.2mを測る。南側は調査区外へ伸びる。上部を17SX115に削平される。平面では認識できなかったが、土層ラインには不整合面が存在することから、最低2回の掘り返しが想定できる。出土遺物の多くはこの掘り返し後に堆積した層「暗灰青色土」中より出土した。この層からは、板

17SK050



② 2面目 主要遺構

■ 土坑

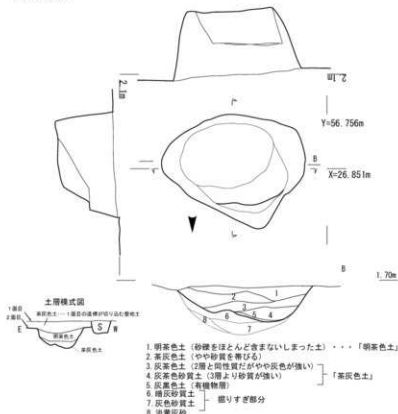
17SK052 (第24図)

調査区南側で検出。東西0.76m、南北0.6mを測る土坑。整地層「茶灰色土」除去後に検出した。堆積土は2層に分かれ、底には有機物の腐食で黒色化した層が堆積する。藁灰軸のかかる上野・高取系の壺が出土しており、17世紀前半代の埋没と考えられる。

■ 性格不明遺構

17SK050 (第24図)

17SK052



第24図 2面目の主要遺構 (上は1/40、下は1/20)

■ 土坑

17SK016 (第9図)

調査区西端で検出。南北0.86m、東西0.4m以上。西壁土層の観察より、近代の整地層上面より掘り込まれる遺構で、昭和の前半頃の廃棄土坑と考えられる。

17SK062 (第9図)

調査区南側で検出。南北1.3m、東西2.3mのゴミ捨て穴。ノリタケ製の皿をはじめ、統制陶器類、ガラス瓶、5cm×3cmほどのラグビーボール状の着火材などの昭和前半期の遺物が大量に出土した。遺構の位置は、調査直前までコンクリート舗装面に据えられていた凝灰岩製の祠の位置におおよそ重なるが、近世の面まで重機により掘削したため、祠と17SK062との層位的な関係は不明である。

■ 性格不明遺構

17SK001 (第9図)

調査区中央南側で検出。東西1.0m、南北0.35mの遺構。南側は調査区外へ延びる。円形に掘りくぼめた遺構の底部に橙茶色の粘土を貼る。粘土部分内部には「茶色土」が堆積し、この層から国産陶器碗が1点出土した。

17SK053 (第9図)

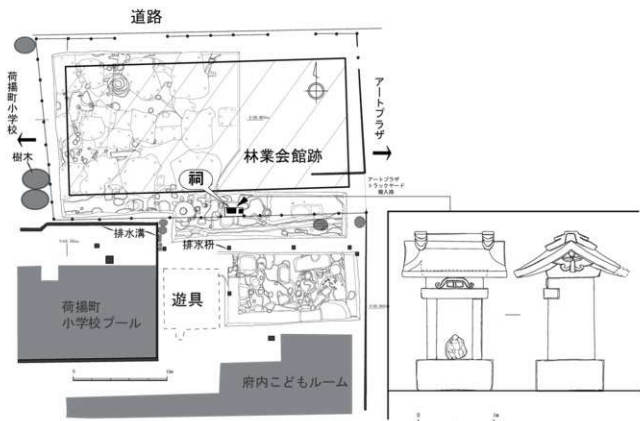
17SK050に切られる南北1.5m、東西0.8mの遺構。南側が調査区外へ延びる。

③ 近代以降の遺構

■ 埋葬遺構

17SK035 (第9図)

調査区南側の遺物包含層17SK025の上に切り込んで検出した犬埋葬遺構。頭骨の遺存状態は悪かったが、全身骨を検出。掘方は長軸0.75m、短軸0.43mで、埋土中よりビー玉やガラスが出土している。首輪や鈴などは出土していない。



第25図 調査区周辺と祠の位置 (1/400)

第26図 祠実測図 (1/5)

調査区中央で検出。東西 1.1 m、南北 1.2 + a の略方形の遺構。明治期の遺構か。

17SX002 (第9図)

調査区中央で検出。東西 0.9 m、南北 0.8 m の楕円形の遺構。昭和のゴミ穴か。

4. 調査地に残る石造物 (第25・26図)

祠

調査地点である駐車場内南側中央には、凝灰岩製の祠2基が、北面して鎮座していた。北より向かって右側の祠は完存していたが、左側の祠は崩壊していた。左側の祠は、部材の大きさからみて、右側のものより一回り小ぶりの規模と推測されるがほぼ同型式であり、本来は大・小一対の祠であったと思われる。右側の祠（第26図）は高さ 1.65 m、基礎石の幅 0.5 m・奥行 0.45 m、本体の奥行は 0.31 m を測る。本体の内部には石英系の白色の石が安置されており、一見すると衣をまとった仏のようにみえる。いつの頃より存在するのかは不明だが、大・小で対となる点や祠の型式からみて、明治以降の当地の住人が祀った屋敷神の祠ではないかと推測する。

なお、屋敷神を祀っているのであれば本来は屋敷の北西の位置が適当であるが、当資料は南に位置しており、戦後、家屋から林業開館へと土地利用が変化するにあたり移設されたのかもしれない。

5. 出土遺物(法量・色調については、巻末の遺物観察表参照)

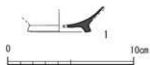
調査では近世の遺物を中心に、コンテナ 40 箱分の遺物が出土したが、これらの中から①遺構の時期の下限を示す遺物、②遺跡の存続期間を示す遺物、③類例の少ないもの、④遺存状態が良いものを選別し、原則的に各遺構単位に掲載・報告を行っている。なお、瓦類・金属製品については一部の例外を除いて、各遺構の出土遺物の後にまとめて掲載を行う。

■ 堀跡出土遺物(第 27 図)

17SB045b 出土遺物(第 27 図-1)

1 は瓦器底底部片。外に踏ん張る高台を貼り付ける。

17SA045b



■ 井戸出土遺物(第 28・29 図)

17SE020 掘方茶褐色土出土遺物(第 28 図 1~8)

1~3 は肥前系陶器である。1 は唐津系の播鉢口縁部。ロクロ成形。2 は鉢の口縁部。3 は壺の底部片。底部外面にへらの傷?痕を残す。4 は、初期伊万里の鉢×皿か。5 は中国青花皿である。6~8 は土師器皿の口縁部片。手握ね成形の製品。7・8 はいわゆる京都系土師器の系譜を引く皿である。9 は鬼瓦である。裏面には握り手を接合させ、へら状工具の粗いナデ成形が観察できる。

17SE020 掘方暗青灰砂出土遺物(第 28 図 10~15)

10 は備前産播鉢口縁部片。乗岡近世 I 期。11~12 は肥前陶器鉢。12 には内面見込みに砂目が残る。13 は、京都系土師器皿。16 世紀中頃の製品か。14・15 は和泉型瓦器境。ともに明瞭なミガキを施し、15 は退化した低い高台を粗雑に接合させる。16 は土鉢である。

17SE020 掘方灰色砂質土出土遺物(第 28 図 17)

17 は肥前系染付皿である。蛇目高台で、見込に五弁花紋がわずかに確認できる。

17SE020 黒茶色土出土遺物(第 28 図 18~20)

18 は土師質土器焙烙の口縁部片。18 世紀後半頃の製品か。19 は土鉢。20 は、軒平瓦。吉田分類の D-1 類。

17SE020 灰黒色土出土遺物(第 28 図 21~24)

21 は肥前系染付碗。内面に四方禪文が入る。22 は肥前陶器鉢。内面見込みに目痕が残る。23 は、国産陶器布袋徳利。キメの細かい胎土を用いる。備前産か。24 は肥前陶器裏の口縁部片。

17SE020 暗黒青色土出土遺物(第 28 図 25)

25 は、陶胎染付碗である。

17SE020 茶灰色土出土遺物(第 28 図 26)

26 は、唐津焼皿。内面に砂目がつく。

17SE020 淡青灰砂質土出土遺物(第 28 図 27~30)

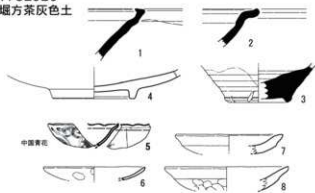
27 は中国青花。明代の盤か。呉須の発色のはやや悪い。28 は肥前系染付。27 は皿、28 は平面が方形となる鉢。口縁端部に鉄錆を付着させる。

29 は備前ないし堺・明石産の播鉢。細く浅い描り目を施す。30 は土師質土器擬鉢。『三ノ丸』分類擬鉢 a にあたる。口縁部外面付近には横方向のミガキが残る。

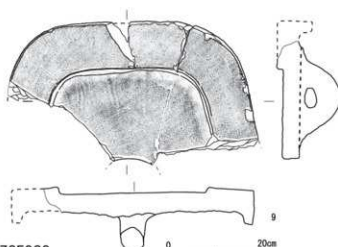
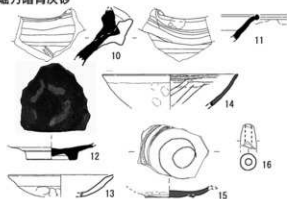
17SE030 掘方出土遺物(第 29 図 1~5)

1~3 は肥前系染付。1 は銅板転写の染付皿で輪花となる。井戸の築造時期を示す。2 は小皿で退化した五弁花を見込みに描く。呉須の発色が悪く、灰緑色となる。3 は小坏か。体部は八角形に面取りされる。4 は国産陶

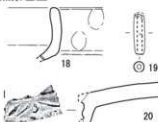
17SE020
堀方茶灰色土



17SE020
堀方暗青灰砂



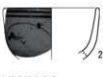
17SE020
黒茶色土



17SE020 灰黒色土



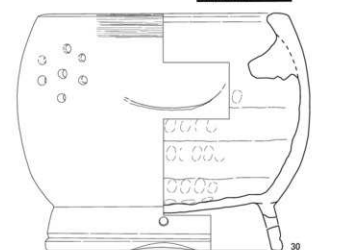
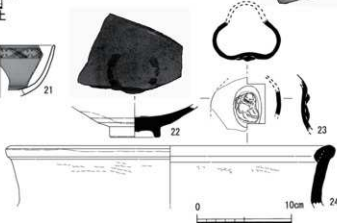
17SE020
暗黒青色土



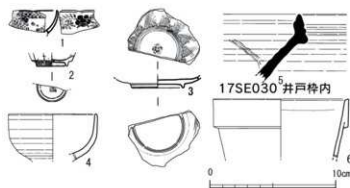
17SE020
茶灰色土



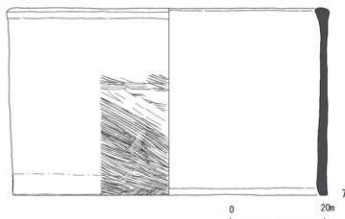
17SE020
淡青灰砂質土



第 28 図 井戸出土遺物 1 (1/4、9 は 1/8)



17SE030 井戸枠



第29図 井戸出土遺物2 (1/4、7は1/8)

る。6は染付筒型碗。被熱のため器形がやや歪む。7は染付香炉。外面に雷紋帯を配し、山水文様を描く。8は白磁の壺底部か？内面は無釉でロクロ目が明瞭に残る。9は瑠璃釉金彩香炉。板造り成形で内面に布目を残す。17世紀後半の長吉窯系の製品か？10・11は、染付灰入の蓋と身。文様構成の類似からセットと考えられる。12は、色絵の把手。水注などに接合するか。被熱のため絵付部分は黒色化している。13は染付小壺。外面に吉祥文を配する薄く精巧な製品で、底部外面に「大明」銘あり。類例に乏しい器形である。14はいわゆる「温石」形土製品である。厚さ1.5cm、幅6.5cmの方形の製品で各片は摩滅のため丸みをもつ。体部には○の中に「熊」の字をくずしたマークが押されている。下半部が欠損しているが、○の印刻の一部が確認できることから、同様の刻印を2列以上施している長方形の土製品となろう。精製された胎土を用いるが、大分市周辺の土製遺物に含まれる角閃石は含まれておらず、搬入品の可能性がある。重量は79.37g。15は京都系土師器皿である。白灰系やや薄手の製品である。16は土師質土器火鉢である。17は性格不明の土製品で、おにぎりを作るように手握ねで成型されている。18は石製品で、両面に摩滅痕が残る砥石として用いられている。片面には鋭利な金属器で削った痕跡が数条見られる。

第31図1は、肥前系染付大皿。いわゆる罍皿の型式で、薄く成形された体部の内面見込みには4区に区分けされた文様帯の内部に牡丹文様が描かれる。裏文様は連続梅花唐草文が描かれる。

17SX010出土遺物 (第32図1～17・第33図1～7)

第32図1～13は肥前系磁器。1～3・5は染付蓋である。5は外面に水仙、紗綾形文を施す型作り成形された八角形の蓋である。4は、色絵蓋である。被熱のため絵付部分が一部剥離し、色彩が飛んでいるが黄色・緑・

器碗。5は備前焼播鉢。内面に交差播目を刻むものである。乗岡近世1期。

17SE030 井戸枠内出土遺物 (第29図6)

6は土師質土器植木鉢の口縁部である。器壁は非常に薄い。

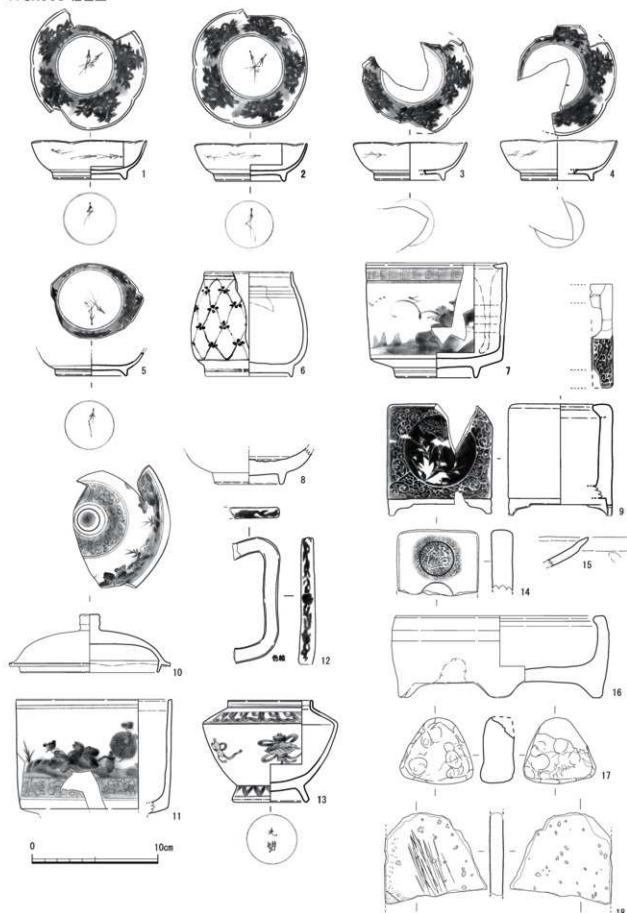
17SE030 井戸枠出土遺物 (第29図7)

7は瓦質の井戸枠。底部側は工具で面取りされ、口縁側は丸く収める。外面は斜め方向の荒いハケ目を施す。内面は、摩滅のため調整は不明。底部外目には接着用材の付着痕跡が残る。

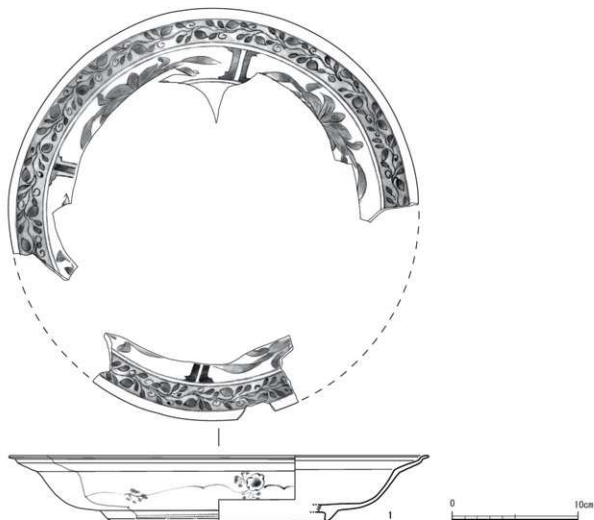
■火災処理土坑出土遺物 (第30～33図)

17SX005 褐色土出土遺物 (第30図1～18、第31図1)

第30図1～13は肥前系陶磁器。1～5は染付小皿である。内面見込みと底部・体部外面に松葉模様の、体部に内面に木葉模様のコンニャク印判で表現する。すべて大きく熱変成をうける。遺構中からは5客分が出土した。5個体以上の破片は確認できないことから、5脚セットとなる。



第 30 図 火災処理土坑出土遺物 1 (1/3)

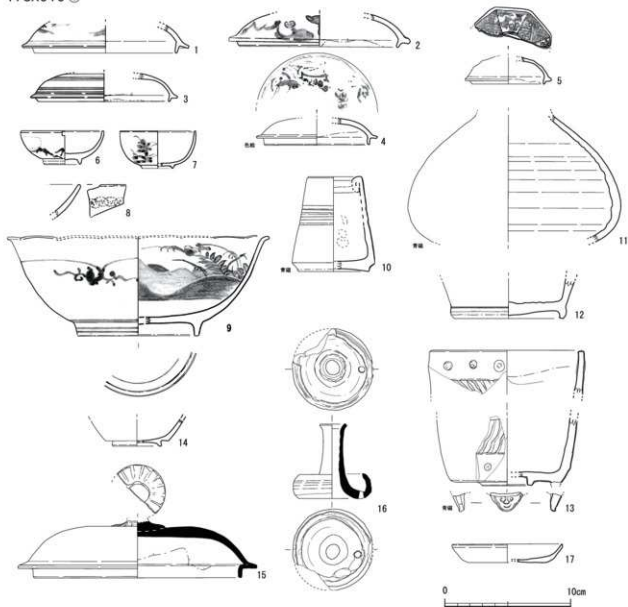


第31図 火災処理土坑出土遺物2 (1/3)

青色が確認できる。6は竹笹文を描いた紅皿、7は小坏である。8は体部外面に橙色で「オリンヒ」とプリントされた碗の体部片。「オリンピック」か。9は染付鉢で、口縁部が稜花となる。内面体部には「草花文」、外面に「唐草文」を描く。10は青磁花入か。竹の節をあしらった装飾がみられる。口縁部は内面へ玉縁上に収める。11は青磁瓶か。黄味がかった青磁釉が薄くかかる。12は染付壺の底部か。内面は施釉される。13は青磁香炉である。金属器を写したような環状の浮文や斜状の文様などが体部や足に陰刻される。14は信楽系陶器碗。15は産地不明の黒軸陶器蓋。天井部内面にも黒軸が厚めにかかる。胎土はキメの細かな淡灰色。16は国産陶器の器種不明製品。精製された胎土で暗茶赤色の色調。二次被熱のためか器表面に細かく弾けた部分がある。また、底部に穿孔があるが用途は不明である。17は土師器小皿。底部糸切り離し。器壁は薄く17世紀から19世紀代のロクロ成型の土師器か。

第33図1～7は肥前陶器壺。1は口縁部片で、口縁端部が鷺鼻状に折れる。内面は弾けたような痕跡が全面に及び調整不明である。2・3は四耳壺に復元できる。2の内面は格子目の工具痕跡が残る。口縁部は玉縁状におさまる。3の内面はロクロナデを明瞭に残す。4～7は底部片である。6の内面には、第33図1と同様の弾けた痕跡が底部全面にみられる。7は当て具のような放射状のあて具？痕が見込みにみられる。

17SX010 ①



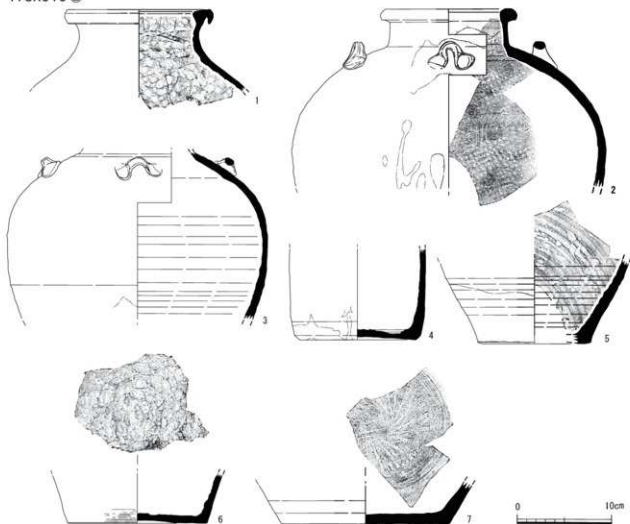
第 32 図 火災処理土坑出土遺物 3 (1/3)

■溝出土遺物 (第 34 図)

17SD040 出土遺物 (第 34 図 1～25)

1～11は肥前系磁器。1～3は染付蓋。2は二次被熱の痕跡あり。4は染付小皿。17SX005出土品と同一の製品。5・6はいわゆるくらわんか碗。7は染付皿。8は染付小鉢。口縁部は輪花となり、内面は型押しされた文様が施される。9は染付薄手の碗。蛸唐草文を描く。10は青磁鉢の口縁部片。二次被熱のため一部釉が白濁する。11は染付大皿で、内面に唐草文が緻密に描かれる。高台内には「大明」の銘がみえる。12は陶胎染付碗。13～17は国産陶器。13は小壺で被熱を受ける。14・15は関西系の鉄軸の掛かる土鍋、16は肥前系陶器の鉄軸の掛かる鉢×皿で内面見込みに円形の釉剥あり。17は肥前系陶器鉢。内面に刷毛で銅緑釉をかける。高台には透かし？を入れる。17世紀前半の製品。18は備前産播鉢で東国編年の近世1期。19は短いかえりをもつ須臾器蓋。外面上

17SX010 ②



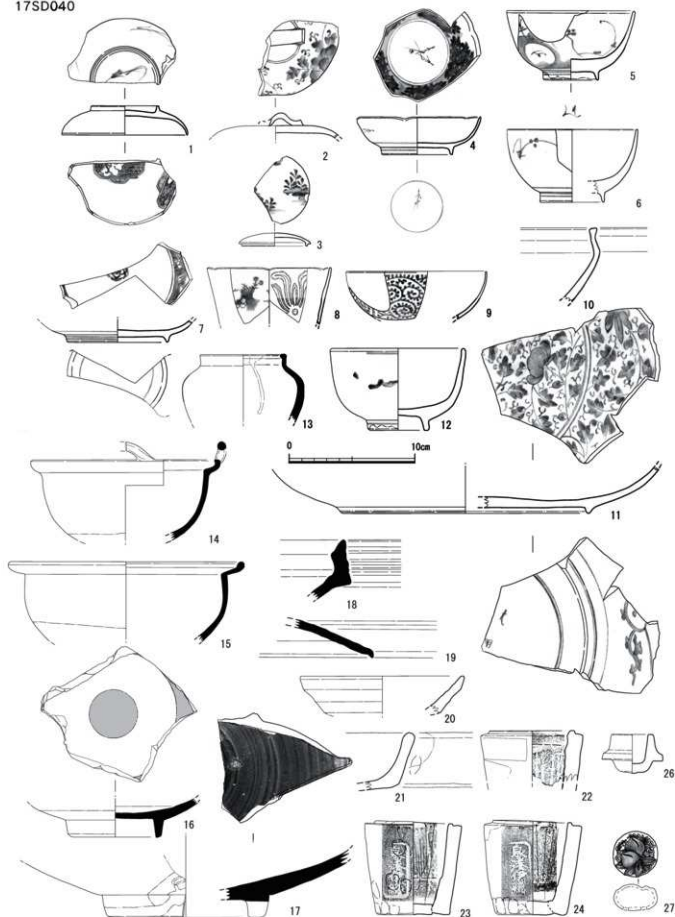
第33図 火災処理土坑出土遺物4（1/4）

部に回転ヘラ削りを施す。20は土師器環。ロクロ成型で厚く作られる。22は土師質土器焙烙。外面に煤が付着する。18世紀後半の製品。21～24は土師質土器焼塩壺である。23・24は「泉湊伊織」の刻印が押され、内面から外面にかけて煤が付着する。Ⅱ類。25は土師質土器蓋もしくは釜形土製品。図の天地は後者による。胎土に金雲母を多く含む。26は陶磁根付。底部に2箇所の穿孔が有り、上面は写実的な桃の圖像を型により表現している。

■大型廃棄土坑出土遺物（第35～45図）

17SX055 暗灰色土出土遺物①〔肥前系磁器：杯・碗類〕（第35図1～54）

1～5は紅皿。6～10は紅猪口。11は染付小杯。12は白磁小杯で、17世紀前半代の所産。13は型打成形により口縁部を花形につくる猪口で、17世紀中頃の所産。14は薄手で半球形の赤絵小杯。素地はやや灰色がかかる。15・20・23・24・25・26・27・28は薄手半球形の染付碗。18・19は、腰張の碗。17・21・22は染付くらわんか碗。31は撥高台である。18・19は染付杯。29・30・46は外面青磁の碗。29・30の見込みにはコンニャク印判の五弁花文が滲んで押される。46は外面青磁の碗。32～33は染付端反碗で遺構の埋没時期の下限示す遺物である。34は初期伊万里の碗で17世紀前半代。35・36は、見込みにこんにゃく印判の退化した五弁花を



第34図 満出土遺物 (1/3)

押しした碗で、18世紀中～後半の所産。37・38は石畳地文を描く碗および筒型碗である。18世紀末～19世紀前半の所産。39～45は広東碗で、39はやや小ぶりで体部が直立する型式、45はやや大型品である。47は内外面に緑色の軸の掛かる碗。瀬戸系か。48は白磁の碗×円で非常に薄い。型押し成形で口縁部を花形につくる。49～54は白磁で、49・50の見込みは蛇ノ目に軸刺する。54は砂目の初期伊万里の皿か。

17SX055 暗灰色土出土遺物②〔肥前系磁器：蓋・皿類〕(第36図1～24)

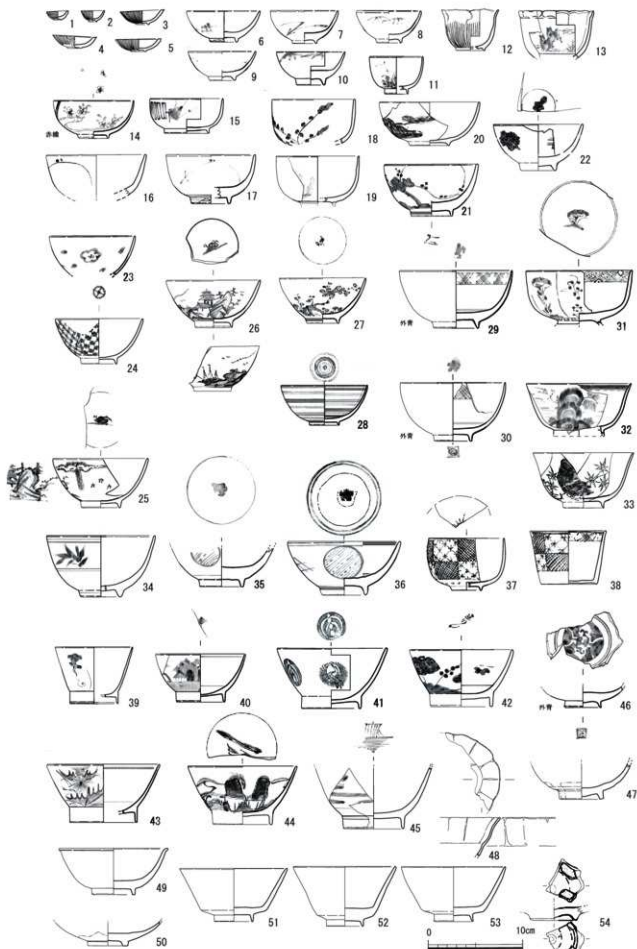
1～7は端反碗の蓋か。19世紀前半の所産。8は、染付小皿×蓋。9～11は見込に山水文を描く染付小皿で9・10は輪花となり、9の口縁端部には鉄銹を塗る。12～13はIV期の染付皿で、内面蛇の目軸刺ぎ。18世紀中頃～後半の所産。14～16、19・20は、蛇ノ目凹形高台となる染付皿。18世紀後半～19世紀前半の所産。14には退化した渦福を描く。17・18は染付皿。21は、直径22.1cmに復元できる染付大皿である。口縁部は稜花となる。22は染付皿×鉢の底部である。内面に牡丹文を描き、底部に渦福を描く。23・24は染付罍皿で、24はやや深手鉢状になる。

17SX055 暗灰色土出土遺物③〔肥前系磁器他：仏飯・灰入れ・壺・鉢類〕(第37図1～22)

1～6は仏飯器。4は体部に斜格子文を描く1780年～1860年頃の所産。7～9は灰入で、7は青磁。8・9は染付となる。9は焼継ぎあり。10～11は赤絵の瓶。11は体部に「御」の字がみえる。御神酒用瓶であろう。12は染付壺の底部。13は青磁鉢か。内外面に施軸する。蛇ノ目高台には鉄銹を塗る。14は黒褐色の軸が掛かる植木鉢。瀬戸系か。15は急須や水注につくと考えられる染付把手。草花の文様が丁寧に絵付けされている。16は青磁鉢×の口縁部片。17は青磁把手。18は青磁の器種不明製品。板造りで、内面は無軸で素地には布目が見える。淡緑白色の軸を厚く施軸している。19は鮑形の青磁皿×鉢。内面型押し成形か。深緑色の厚い軸葉を掛け、底部にはハリ痕が残る。20は口縁部内外面に乳白色がかかった青磁を厚くかける青磁染付鉢。19世紀前半の所産。21は、蛇ノ目凹形で長い高台をもつ染付鉢。口縁端部は厚くなり稜花となる。底部には暗赤灰色で焼継ぎ文字が書かれるが判読できない。19世紀代の所産か。22は中国漳州窯系青花の鉢。内外面に退化したラマ式連弁?をモチーフとする文様を描く。ややざつつきのあるキメの粗い淡灰色の素地。

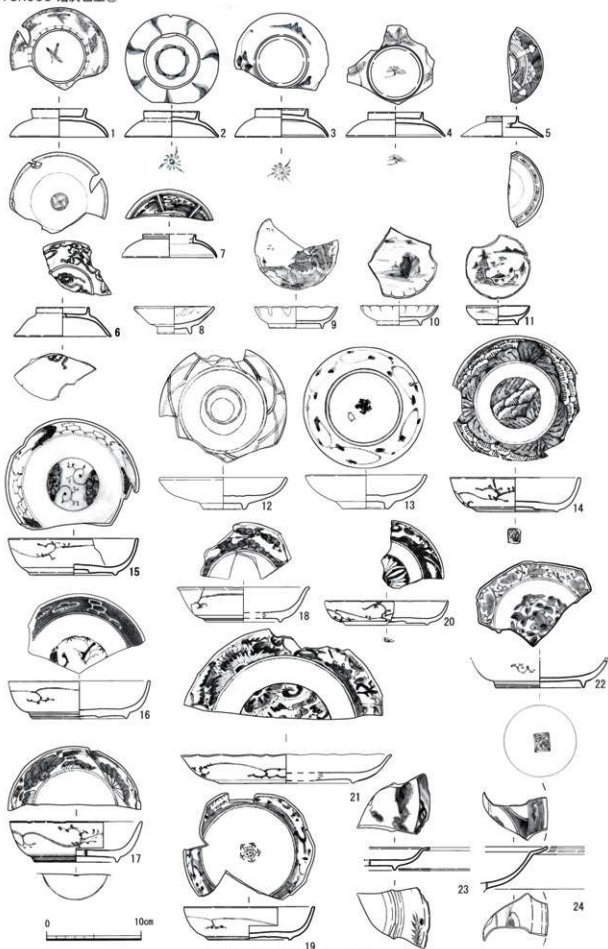
17SX055 暗灰色土出土遺物④〔国産陶器：杯・鉢・壺類〕(第38図1～49)

1は瀬戸産小皿。2～9は関西系陶器小杯。2は外面に暗赤褐色の軸を掛け、その上にイッチン掛けした文様を施す。3は白化粧した外面に「色赤」と読める銘が入る。4は外面体部から内面口縁部付近に緑軸をかける。10～20信楽系の杯で、10～18は外面に絞彩文を描く。22は口縁端部を内側へ折り曲げる火入で、肥前系か。17世紀前半の所産。23は陶器鉢×火入。内面は無軸。24・25は体部にクロロ目を明瞭に残す杯。黄白色の胎土で関西系か。26・27は、唐津系碗。17世紀前半の所産か。26は内面に黒軸をかける。27は銅緑軸が掛かり底部には砂目が付着する。28・29は京焼風菊皿。ともに貫入が著しい。28は、正円にならずやや楕円系の平面となる。29は内面に色絵で花文を描くが被熱のため色がとぶ。30は陶胎染付碗。18世紀前半の所産。31～32は、唐津系陶器の鉢で、ともに鉄軸がかかる。32は内面に白土で刷毛目文様を施す。33～35は唐津系陶器大皿×鉢。36唐津系二彩皿。白色軸の上に鉄軸で文様を描く。内面見込、高台部分に胎土目痕が残る。18世紀前半の所産。37は内外面に長石軸が厚く掛かる陶器鉢の体部。胎土に赤味が残り唐津系か。38は口縁部内外面のみ鉄軸の掛かった鉢。内面に描目は確認できない。キメの細かい暗灰色の胎土。土鍋と軸調が酷似しており関西系または瀬戸・美濃系製品か。39は陶器灰入れ。外面に細い貫入の入る白色軸が掛かる。底部外面に目痕風の円形染み状痕跡が5つ残る。関西系陶器。40は筒型の鉢?で、39と同様貫入の入った白色軸が施される。類例を知らないが関西系の陶器か。41は瀬戸焼灰釉水甕。42・43は鉄軸のかかる関西系の土鍋。44は無軸陶器鉢か。内面に火罫がみられる。備前焼か。45は無軸陶器鉢。内外にクロロ目を明瞭に残す。46は無軸陶器鉢。口縁は厚く肥厚し、端部を外反させる。底部外面には板状圧痕が残る。図示していないが、中心を外れて穿孔した痕があり、植木鉢に転用されている。47も無軸陶器の火入れないしはサヤか。底部外面に墨書文字(記号?)が書かれる。備前もし



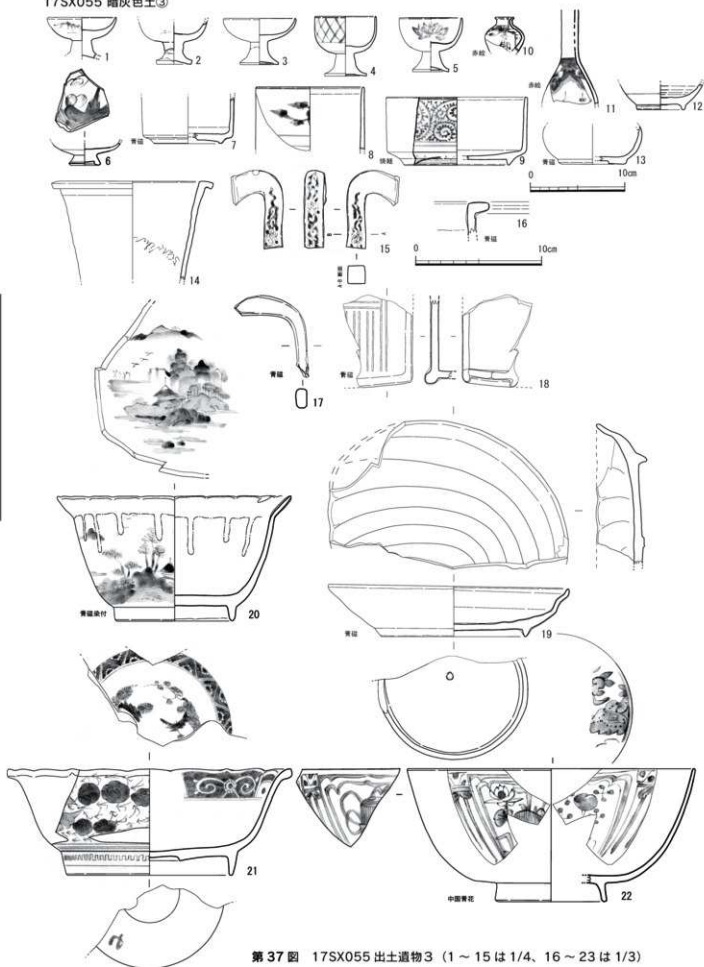
第 35 図 17SX055 出土遺物 1 (1/4)

※「外側」…外面青磁を示す。



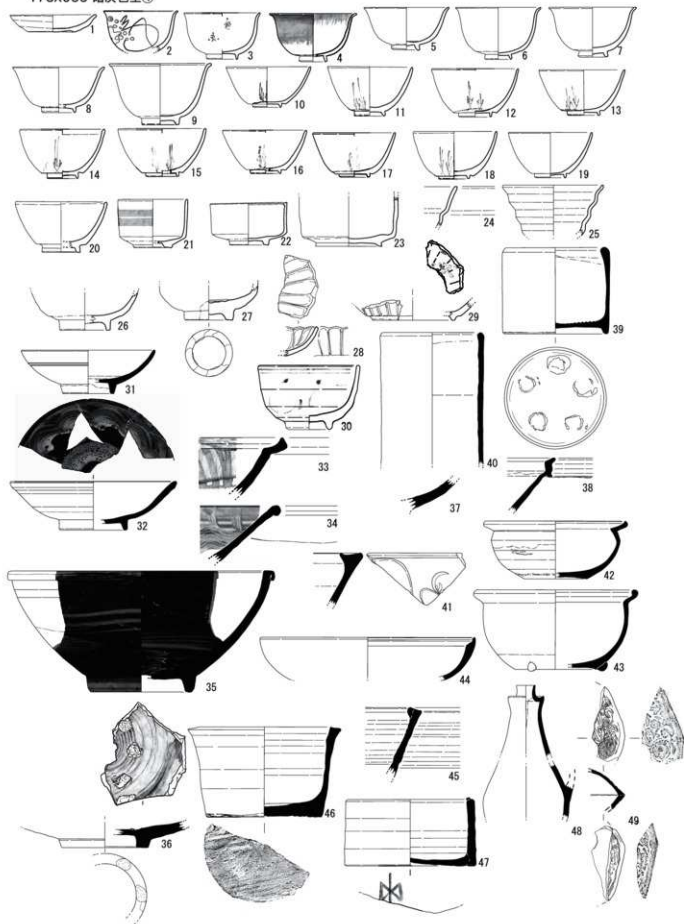
第36図 17SX055 出土遺物2 (1/4)

17SX055 暗灰色土③



第 37 図 17SX055 出土遺物 3 (1 ~ 15 は 1/4、16 ~ 23 は 1/3)

17SX055 暗灰色土④



第 38 図 17SX055 出土遺物4 (1/4)

くは丹波産だろうか。48は黒軸のかかる油徳利。49は器種不明の陶器で、内面に鉄軸が掛かり、外面は型押しした菊花文が上下に施される。

17SX055 暗灰色土出土遺物⑤【国産陶器：蓋・急須・行平・瓶類】(第39図1～30)

1～8は土瓶×行平の蓋。1・2は鉄軸がかかる。6は天井部に鉄絵文様が描かれる。8は9の土瓶とセットとなる。9は、底部に三つの足が付くがすべて欠損する。また、小振りなため注口部の穿孔は2つである。10～17は土瓶。すべて関西系か。10は外面の鉄軸を掛け分け一部を扇状に残し給付けする。11は褐釉をかけるが被熱のため白濁している。12は外面に黒釉をかける。体部ソロバン形の土瓶。13は外面に鉄軸をかける。重心が下にくる型式の土瓶。14は外面に褐釉が掛かる。底部に大量に煤が付着する。18・19は、汁次か。19にはくすんだ茶白色の鉄軸がかかる。美濃産か。20は関西系の行平体部片。体部に鋳痕が明瞭に残る。21は瓶の口縁部。内面に指頭痕が明瞭に残る。硬質に焼成され、外面には自然釉のようなものが掛かるが、土師質土器としたほうが適当か。22～29は瓶。22～25・29はともに茶褐色の褐釉が掛かる。22は内面に頸部の接合痕跡が明瞭に残る。24は底部に砂目痕がみえる。26～28は瀬戸産のいわゆる貧乏徳利。すべて灰釉が掛かる。30は徳利で体部に鉄絵で銘を施す。

17SX005 暗灰色土出土遺物⑥【国産陶器：播鉢類】(第40図1～29)

全て播鉢である。1・2は、肥前系で全面に鉄軸が施軸される。1の胎土は粗く暗灰黄色。2も粗い胎土で暗灰黄色である。3は高台部分以外に鉄軸を掛け、玉縁状口縁となる。胎土は比較的密で、赤褐色である。肥前系か。4は産地不明で、胎土に砂粒を多く含み、外面の削り調整による砂粒の移動が目立つ。灰白色の胎土で比較的に硬質に焼成されている。5は肥前系播鉢底部。全面に鉄軸が施軸され体部下半に格子目タタキが残る。やや粗い胎土で橙白色。6・7は全面に鉄軸の掛かる肥前系播鉢口縁部片。8・9・11も肥前系播鉢口縁部。10は全面に薄茶色の鉄軸が薄く施軸される。胎土は橙白色～灰白色でやや焼成は甘い。肥前産か。12～14は堺・明石産の播鉢口縁部片。12は淡紫赤色に焼成され、白色砂粒を多く含んだ胎土。口縁端部には肩に「上」の文字の入った印を押す。胎土で白色砂粒を含んだ淡赤橙色。口縁部内面と突出させる。全面無軸である。14は暗灰紫色に焼成される。15・16・18は産地不明の播鉢口縁部。15は胎土が非常に粗く白色砂粒などの砂粒も多く含む暗灰黄色。全面に胎色の釉が薄く掛かる。16は紫色に焼成され粗い胎土。18は暗灰紫色に焼成され、砂粒をほとんど含まないキメの細かい灰色の密な胎土である。口縁端部はやや玉縁状に丸くなり体部外面には細かな沈線がめぐる。これまで報告されている府内城・城下町跡では出土しておらず産地も全く不明である。17は備前産と推測される播鉢口縁部片。内外面とも淡紫白色に焼成され、胎土は黒色砂粒・白色砂粒を含む灰白色である。

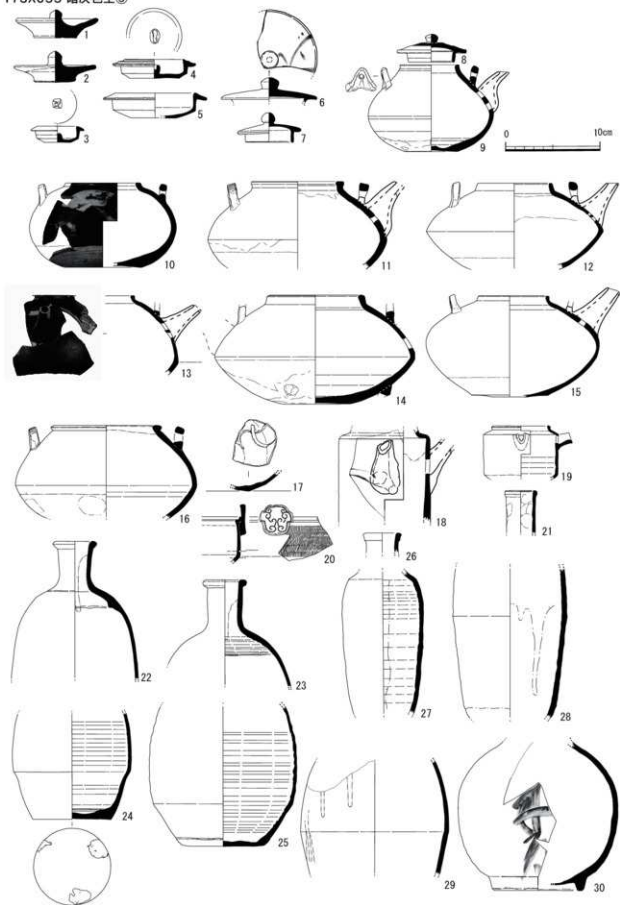
17SX055 暗灰色土出土遺物⑦【陶器：甕類】(第41図1～12)

1～6・11・12は肥前陶器甕。すべて鉄軸が掛かる。1・2は動先状の口縁部をもつ。3は「T」字形の口縁部で、外面に刷毛目文を施す。4・5はいわゆるハンズ一甕で、4は内外面に格子目タタキ痕が残る。6は大甕の底部片か。外面に竹管文が残る。7はタイ産の無軸陶器甕。口縁端部に自然釉がかかる。胎土は淡紫白色～淡茶紫色。16世紀代の所産か。8・9は肩の張る短頸の甕で灰釉が掛かる。11・12は同一個体の黒軸の甕。

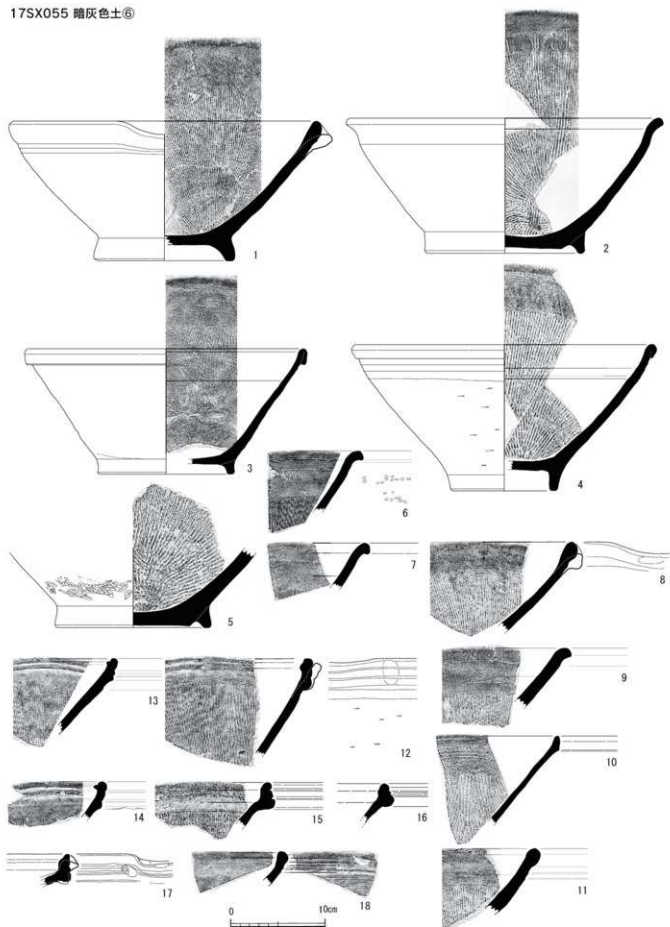
17SX055 暗灰色土出土遺物⑧【土師器・瓦質土器類】(第42図1～30)

1・2は土師器環aの口縁部片。3は非口ロ成形成の皿。4～10は京都系土師器で4～6は皿。7～10は環である。10の内外面には器面にそって色調の異なる円形の焼成痕が確認できることから、土器を直に重ねて焼成したと考えられる。11～13は底部系切りの土師器環×皿。13は底部を穿孔している。底部を穿孔する事例は『三ノ丸』(1次)SK19にもある。14は土師質土器鉢×。橙白色で外面に細かな横方向のミガキが施される。精製された胎土であるが、金雲母や赤色砂粒を含む。15～18は土師質土器焙烙。19は土師質土器焙烙の転用品か？内面に煤が大量に付着し、底部は穿孔されている。20～23は土師質土器焼塩壺。20は焼塩壺Ⅰ類。粗い胎土で、外面は粗い刷毛状工具による面取りが施される。22・23は焼塩壺Ⅱ類。23の底部には紐状のもの

17SX055 暗灰色土⑤

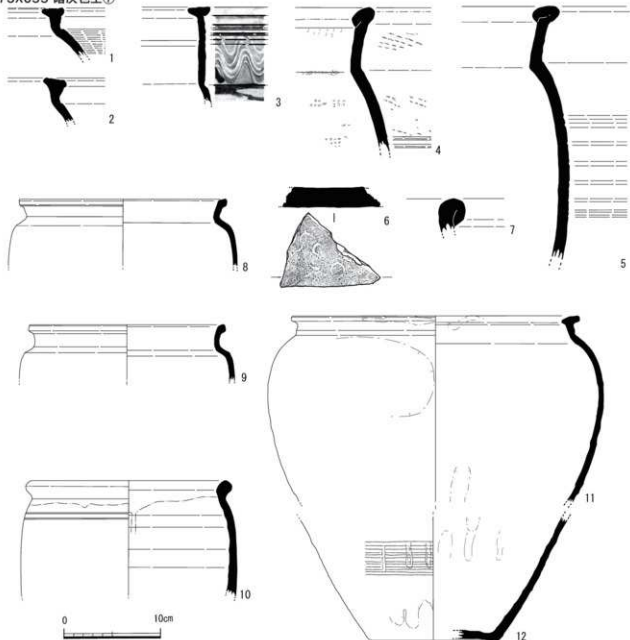


第 39 図 17SX055 出土遺物 5 (1/4)



第40図 17SX055 出土遺物6 (1/4)

17SX055 暗灰色土⑦

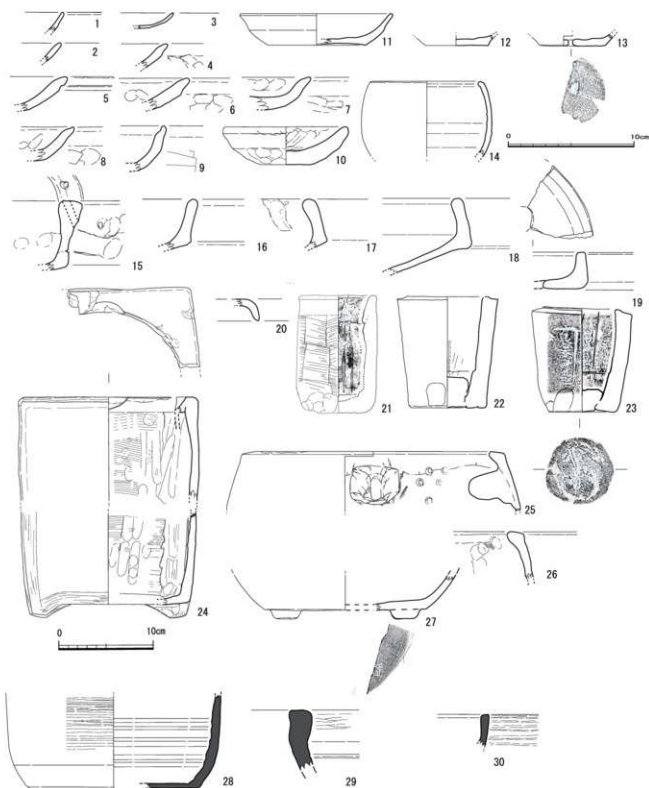


第41図 17SX055 出土遺物7 (1/4)

がスタンプ状にみえる。24～26は埴師。24は「三ノ丸分類」b類、25～26は「三ノ丸分類」a類。で24には金雲母が多量に含まれる。27は瓦質土器埴師。外面に丁寧なミガキが施される。白色系の胎土で、底部に四角の枠の中に「深草」の刻印があり京都深草焼の製品と考えられる。28～30は瓦質土器。29は鉢で外面にミガキを施す。29は裏、30は硬質に焼成され外面に横方向のミガキを施した口縁部片。器種は不明である。

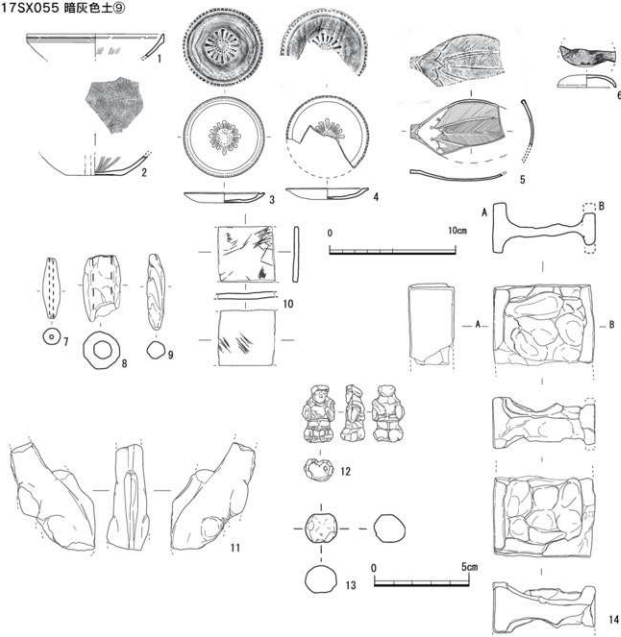
17SX055 暗灰色土出土遺物⑨ [軟質陶器・土製品・石製品類] (第43図1～14)

1・2はミニチュア陶器播鉢。1は口縁部の沈線や内面の播目が丁寧に表現され、2には内面見込みに「S」字の播目が表現される。備前産か。3～4は、常滑産の可能性のある暗褐色に焼成された無軸陶器(口縁部のみ透明釉をかける)の小皿状製品。内面は型押しにより文様を表現するが、外面は丁寧な回転ヘラ削り調整を施す。5は軟質に焼成された明褐色の匙状製品。胎土は非常にキメ細かく底部外面はハケ状の工具で朱泥をのばしたように調整されている。内面は型押しにより文様を表現していると思われる。産地・用途共に不明である。6は肥



第42図 17SX055 出土遺物8 (1/3、24～29は1/4)

17SX055 暗灰色土⑨



第43図 17SX055 出土遺物9 (1/3、11～14は1/2)

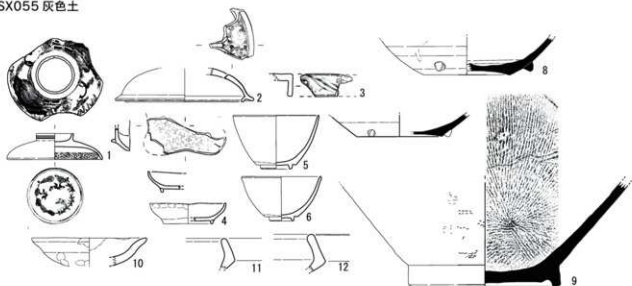
前系染付の合子の蓋。型成形である。7～8は土鍾。9は穿孔が見られないため土鍾とは断定できない性格不明土製品。10は扁平な頁岩製の石製品。両面に擦痕が残ることから砥石の一種か。11・12は土人形で、11は弧形、12はほぼ完形品の布袋人形である。底部に小さな穿孔がある。13は土玉。手捏ね成型である。14は性格不明の土製品である。内面には指頭痕を明瞭に残すが、外面は丁寧に面取りしており、人形などの台座の可能性がある。

17SX055 灰色土出土遺物 (第44図1～15)

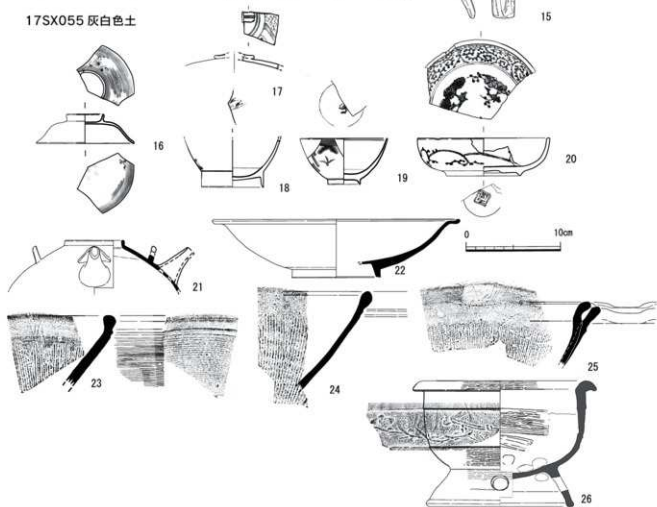
1・2は肥前磁器蓋。2は天井部に透かしをもつ。香炉の蓋か。3は国産陶器で器種不明容器。天地不明。黄色の釉を掛け、鉄軸で文様を施す。黄色系の胎土である。4は肥前磁器の方形の小皿で、いわゆる手塩皿である。見込には型紙摺りによる文様を施す。5・6は京・信楽系陶器環。7・8は国産陶器の土瓶底部。9は肥前系陶器播鉢の底部で外面には格子目タタキが残る。全面に鉄軸を施す。10は京都系土師器環。11・12は土師質土器焙烙。13は土師質土器鉢か。内外面ナデ調整で非常に薄手、硬質の白黄色に焼成される。14は瓦質土器の鉢か。内外面に手持ちの横方向のミガキが入る。15は瓦質土器の脚部×把手。

17SX055 灰白色土出土遺物 (第44図16～25)

17SX055 灰色土

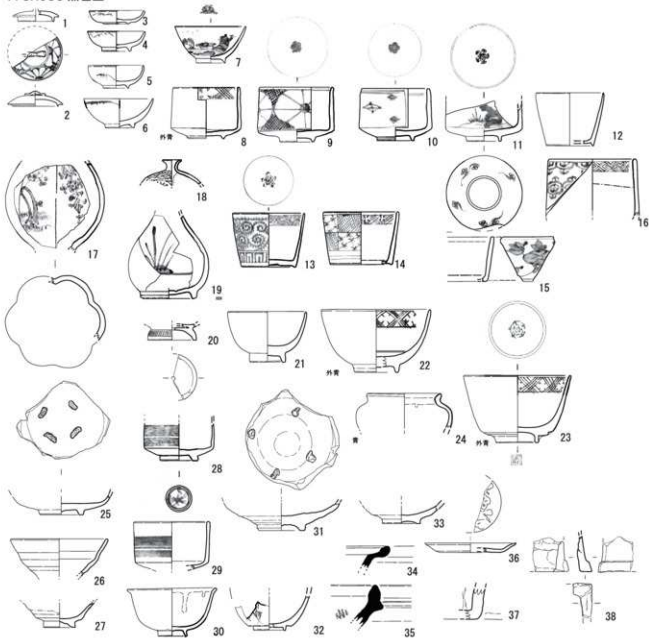


17SX055 灰白色土

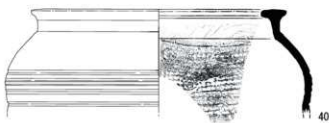


第 44 圖 17SX055 出土遺物 10 (1/4)

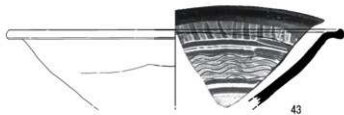
17SX055 黑色土



17SX055 暗黒灰色土



17SX055 最下層 (灰茶色土)



第 45 図 17SX055 出土遺物 11 (1/4)

16～20は肥前系磁器。16・17は染付蓋で、16は端反碗の蓋、17は鉢の蓋か。18は広東碗。19は小広東碗。20は蛇ノ目凸形高台の皿で、内面に蛸唐草文を描く。21は国産陶器の土瓶。関西系か。22は肥前系陶器の鉢。23は産地不明の描鉢。体部に沈線を描き、ややくすんだ黒色の鉄軸をかけ、光沢のある黒紫色に焼成される。第40図18と同一型式である。24・25は肥前陶器描鉢で全面に鉄軸が掛かる。26は瓦質土器鉢。体部中段に型により梅花文様を表現する。口縁部内面から外面にかけては磨きが施される。内面は刷毛状工具のナデが施される。

17SX055 黒色土出土遺物 (第45図1～40)

1～24は肥前系磁器。1・2は蓋で、1には外面に紫白色の瑠璃軸が掛かる。3～6は染付紅皿。7は小広東碗。8～11・16は染付筒形碗で、8は外青磁である。12は白磁である。13・14は染付猪口。15は染付灰入れ。17は瓜形の染付瓶。型作り成形である。18は染付油壺。19は染付瓶。20は染付碗の底部か。底部が二重になっており、中央外面に穿孔が見られる。高台外面には型による蓮弁状の文様が表現される。22・23は外面青磁の碗。24は青磁の香炉。内面は口縁部以下無軸となる。25～40は国産陶器。25は肥前系陶器皿か。内面に砂目の目痕を残す。26・27は藁灰釉の掛かる萩焼碗。27は例り込み高台となる。28～30は関西系陶器で、28・29は筒形碗で体部に鉄軸で幅の広い縞文様を2条施す。29の高台内には墨で記号?を描く。31・33はそれぞれ唐津焼の鉢・碗。31には内面に灰軸がかかり胎土目の目跡が残る。32は京・信楽系陶器環で外面に綾杉文を描く。34は肥前系陶器の鉢口縁部。35は明石・堺系の無軸陶器描鉢。36は橙白色の無軸の皿。型成形であり内面に文様が見える。37は焼塩釉の底部片。38は土師質土器で、底部が方形の平面形となる製品。人形の一部であろうか。39は明石・堺産の描鉢。40は肥前系陶器壺。全面に鉄軸が掛かる。内面は格子状の当て具痕が残る。

17SX055 暗黒灰色土出土遺物 (第45図41)

41は肥前系磁器の白磁小杯。17世紀前半代の製品で内面に型押しされた陰刻連弁が施される。

17SX055 最下層 (暗黒灰色土) 出土遺物 (第45図42・43)

42は明石・堺産の描鉢。43は肥前系陶器鉢。内面に白土をもちいた刷毛目文様を施す。

■土坑出土遺物

17SK060 出土遺物 (第46図1～10)

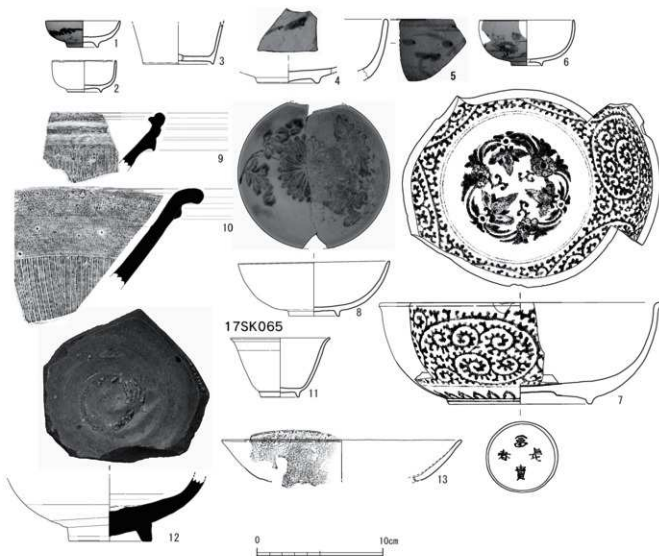
1～4・6・7は肥前系磁器。1は紅猪口。2は白磁小杯。3は白磁で筒型碗。4は皿である。5は陶胎染付碗の体部片。6は色絵の薄手碗。7は大型の染付鉢で、底部は蛇ノ目凹形高台で「富貴長春」の銘が見え、内外面に蛸唐草紋が描かれる。18世紀後半頃の製品か。8は京焼風陶器碗。見込みには菊を上絵付けする。9・10は国産陶器描鉢で、9は堺・明石産で、無軸。10は肥前系の製品で内外面に胎色の鉄軸が掛かる。

17SK065 出土遺物 (第46図11～13)

11は肥前系磁器の染付杯。12は肥前系陶器鉢。内面に灰色の軸が掛かる。胎土は橙白色で唐津産か。13は土師質土器杯。内面は摩滅が著しく調整不明であるが、外面は細かい布目?を残す。外型造りの製品か。

17SK075 出土遺物 (第47図1～14)

1～6は肥前系磁器。1は紅猪口。2は薄手で半球形の白磁碗。3は外面に童子を描く染付碗。4は広東碗。5は雄鶏の尾を模った白磁の製品。型で作成したものを接合している。6は壺。Ⅳ・2期頃の製品で17世紀末～18世紀初頭の所産か。7は瓦質土器火入れか。方形となり、脚のつく厚手で器高の低い製品である。8は関西系陶器碗。暗黒灰色の胎土で、外面に鉄絵あり。9は国産陶器火入れ。備前産か。10は国産陶器関西系の土鍋。内外面に鉄軸が掛かる関西系か。11・12は肥前系陶器描鉢。ともに鉄軸がかかる。13は肥前系陶器鉢。内外面に刷毛目が入る。14は土師質土器大甕の底部。摩滅により内外面とも調整不明瞭であるが、内面腰部には指オサエ



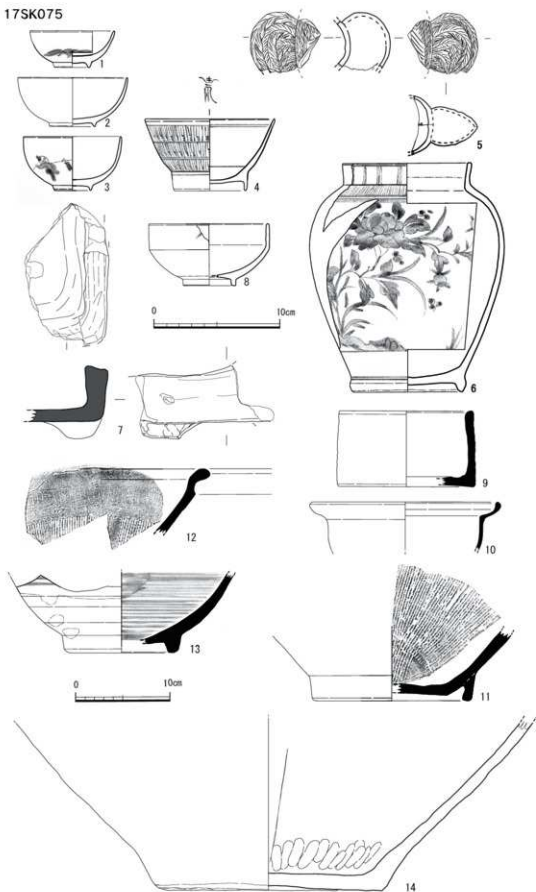
第46図 土坑出土遺物1 (1/3)

の痕跡が明瞭に残る。また、焼成前に施されたと考えられるヘラ状工具痕が底部から上部にかけて刻まれる。

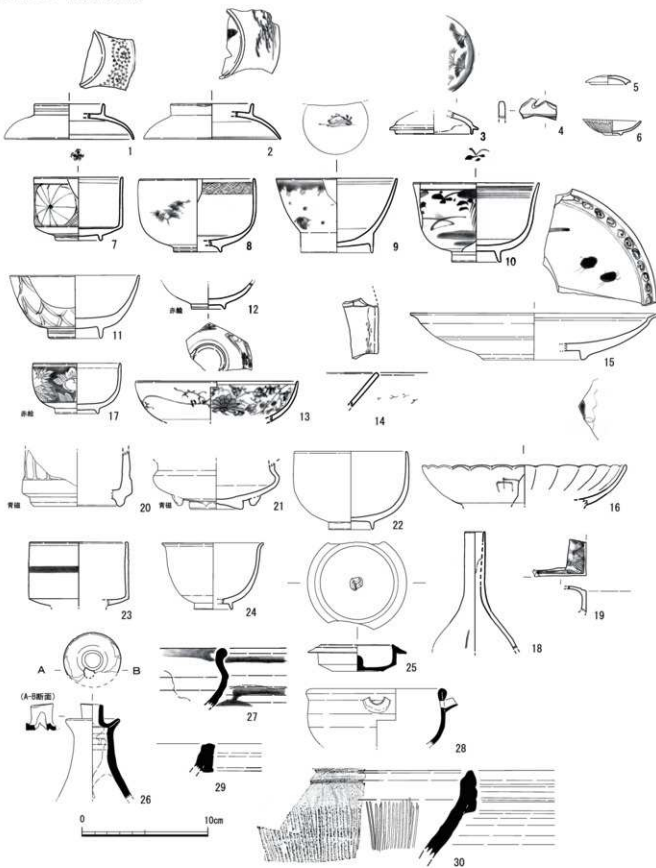
17SK090 淡灰黒色土出土遺物① (第48図1～14)

1～21は肥前系磁器。1～2は碗蓋である。4は透かし部分の破片。蓋の一部と考えられる。5は合子などの蓋か。6は紅皿。7は筒型碗。9は広東碗。10は端反碗で遺構埋没の下限を示す。11はくらわんか碗で二重網目文を描く。12・17は赤絵の碗。13は深手の染付碗。14は方形の染付鉢か。外面に松葉文様が描かれる。15は初期伊万里の皿で、口縁端部内面には渦文がめぐる。1620～1630年頃の所産。16は青磁染付菊皿。18は鶴首の壺。19は水差しの一部。20・21は青磁香炉。22～24は関西系陶器。25は土瓶蓋。26油壺で、外面に黒釉が掛かる。27は鉢で内外面に白色・褐色釉が掛かる。肥前産か。28は行平の体部。29・30は搦鉢。29は内面にわずかに搦目が確認できる。内外面に茶黒色釉が掛かり、胎土には白色砂粒が多く含まれる。産地不明陶器である。30は堺・明石産搦鉢である。

17SK075

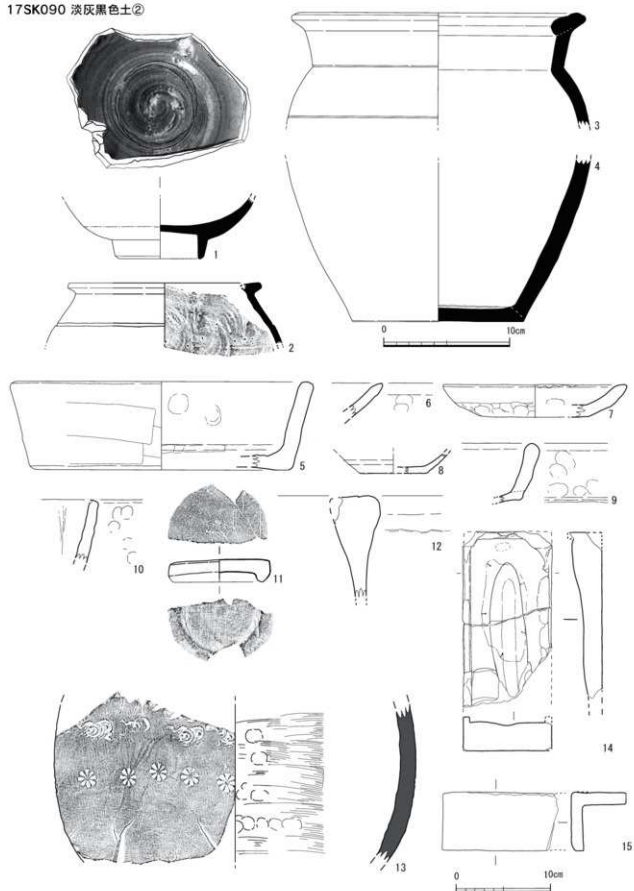


第 47 図 土坑出土遺物 2 (1/3、14 は 1/4)

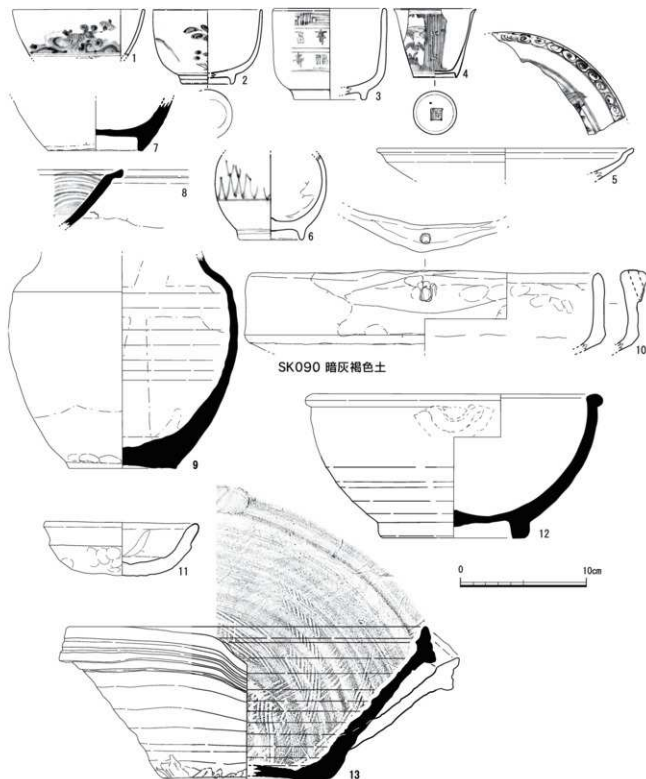


第48図 土坑出土遺物3 (1/3)

17SK090 淡灰黒色土②

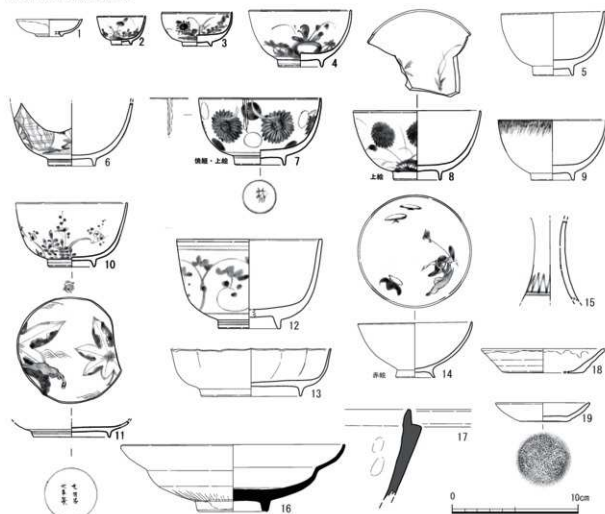


第49図 土坑出土遺物4 (1/3、15は1/4)



第 50 図 土坑出土遺物 5 (1 / 3)

17SK105 黒灰色土①



第51図 土坑出土遺物6 (1/3)

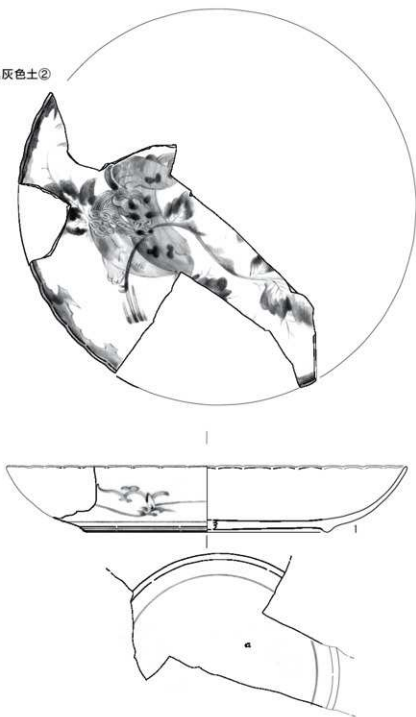
17SK090 淡灰黒色土出土遺物② (第49図1～14)

1～4は肥前系陶器。1は鉢。内面は刷毛目文様を描き、見込みには重ね焼き痕が残る。2～4は甕で、2は内面に同心円状の当て具痕がつく。3・4は大甕の口縁部および底部。全面に鉄釉が掛かる。5は土師質土器鉢。外面を工具により平滑に仕上げる。口縁端部上面には板目のような痕跡が残る。6・7は京都系土師器。7の口縁部には煤が付着する。8は土師器杯。底部糸切りである。9は土師質土器焙烙。底部には煤が付着する。10・11は土師質土器焼塩壺。10はI類の焼塩壺体部片。11は蓋で、内面に布目痕が見られる。12は土師質土器大甕の口縁部片。13は瓦質土器釜か。画面に雲紋と菊紋のスタンプを押す。14は砂岩質の硯。中央がレンズ状に窪んでおり、窪み周囲に黒痕が残る。15は切隅瓦片か。全長は不明だが、短辺は長さ6cm前後で直角に曲げられており、端部を面取りして収める。

17SK090 灰黒色土出土遺物② (第50図1～14)

1～6は肥前系陶磁染付。1・2は碗。1は墨弾き技法により山水文様を外面に施す。3は初期伊万里の碗で17世紀初頭の所産。4は薄手の猪口か。底部に渦福を描く。5は初期伊万里の皿で、口縁部内面に渦紋を描く。6は初期伊万里の小壺。外面に一重の網目紋を描く。7～9は肥前系陶器。7は壺の底部。被熱を受け釉が変質しているが、外面に刷毛目文を施している。8は内面刷毛目文を施す鉢。9は白味がかった茶色の釉が掛かる壺。

17SK105 黒灰色土②



第52図 土坑出土遺物7(1/3)

底部は糸切り痕が明瞭に残る。10は土師質土器の焙烙。18世紀前半～中頃の製品。外面には煤が多量に付着する。

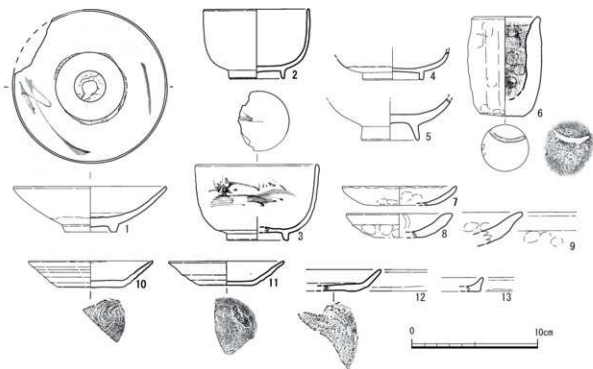
17SK090 暗灰褐色土出土遺物(第50図11～13)

11は京都系土師器坏。内面には底部調整後のナデ上げ痕が明瞭に残る。12は肥前陶器鉢。欠損しているが、片口となると思われる。内・外面にはハケ目を施す。1650～1690年代の所産。13は備前焼播鉢。乗岡近世1期の製品。

17SK105 黒灰色土出土遺物(第51図1～19・第52図1)

第51図1～15は肥前系磁器。1は紅皿。2～3は染付小坏。4～10は染付碗。7・8はコンニャク印判で向日葵文を写した染付碗。7には口縁部から体部上半にかけて焼成中に歪んだ割れを焼き継いだ痕跡が残る。溶接にともなうものか、2次焼成以後に赤絵で上絵付けした痕跡がある。9は外面に雨降紋を描いた17世紀後半の

17SK105 暗黒色土



第53図 土坑出土遺物8(1/3)

製品。11は染付皿。底部に「大明成化年製」の銘が見える。12は陶胎染付碗。13は白磁の皿。口縁部は輪花で、内面型押成型か。14は広く外反する体部に、撥形に開く径の小さな高台がつく類例の少ない型式の赤絵碗。内面に皿回し?をする童子?が描かれる。15は染付壺。16は肥前系陶器皿。全面に灰釉がかかり、見込みを蛇の目釉剥ぎする。IV期にあたる。17は瓦質土器火舎の一部。18・19は土師器皿で、18は口縁部全面に煤が付着する。19の底部は回転系切り痕が明瞭の確認できる。

第52図1は肥前系染付大皿。口縁は輪花となり内面全面に龍を描く。外面には唐草文が、底部にはハリの痕が見られる。

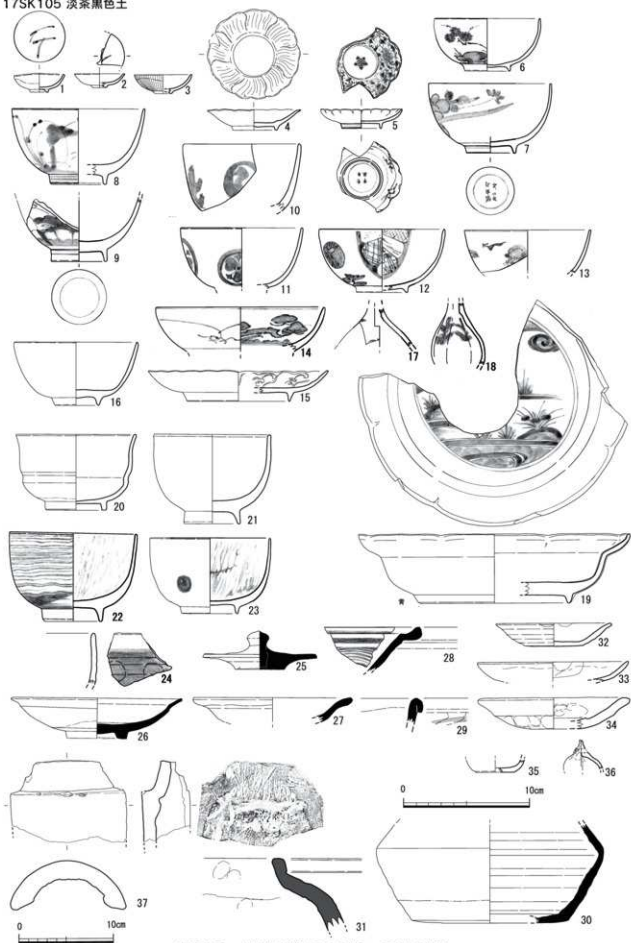
17SK105 暗黒色土出土遺物(第53図1~13)

1は肥前系磁器皿。内面に鉄絵を描く。2は肥前系陶器碗。黒釉をかける。3~5は京焼風碗。6は土師質土器焼塩壺。7~9は手捏ね土器。7は白色で口縁端部に煤が付着する皿。8・9は京都系土師器皿。10~12は糸切り底のロクロ成型の皿で、10の外面は工具によるシャープなナデが施される。13は小皿で、端部をつまみあげて体部を成型する形態。

17SK105 淡茶黒色土出土遺物(第54図1~37)

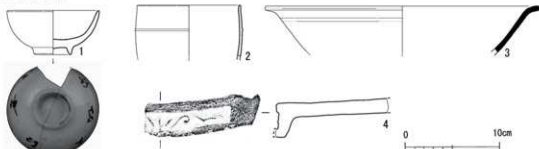
1~19は肥前系磁器。1~3は紅皿。4は内面型押し成形の白磁小皿。5は染付小皿で底部の「大明年製」の銘あり。6~13は染付碗。7の底部には「大明成化年製」の銘が見える。10・11は外面をコンニャク印判で文様を表す。12・13は染付で薄手の半球碗。14・15は染付皿。15の内面は型押しにより文様を表す。口縁端部には鉄絵を塗る。16は白磁の碗。器壁は薄い。17・18は壺。18は体部を六角形に面取りする。19は青磁染付皿。内面体部から外面にかけて淡青白色の青磁釉がかかる。口縁部は輪花となり、見込みに墨弾き技法を用いた山水文を描く。20~30は国産陶器。20は関西系陶器碗。21は京焼風碗。22・23は肥前系陶器碗。刷毛手である。24も国産陶器碗の体部片。25は国産陶器蓋。断面に宝珠形摘みを蓋本体に差し込んだラインが確認できる。26は肥前系陶器皿。27焼締陶器の皿。肥前系か。28は肥前系陶器鉢。内面に刷毛目文が入る。29は国産陶器鉢の口縁部。口縁部内外面に褐色釉が掛かる。30は陶器壺×。外面に黒灰色の薄い釉が掛かる。31は瓦質土器釜蓋。

17SK105 淡茶黑色土

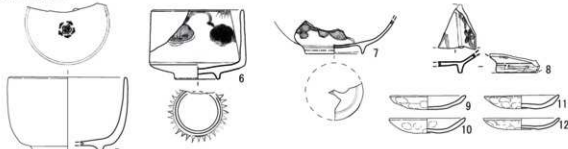


第54図 土坑出土遺物9 (1/3・37は1/4)

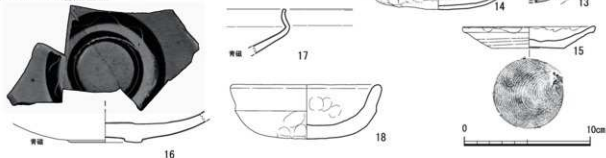
17SK110 黄灰色土



17SK110 黒色土



17SK110 暗黒色土



第55図 土坑出土遺物 10 (1/3、4は1/4)

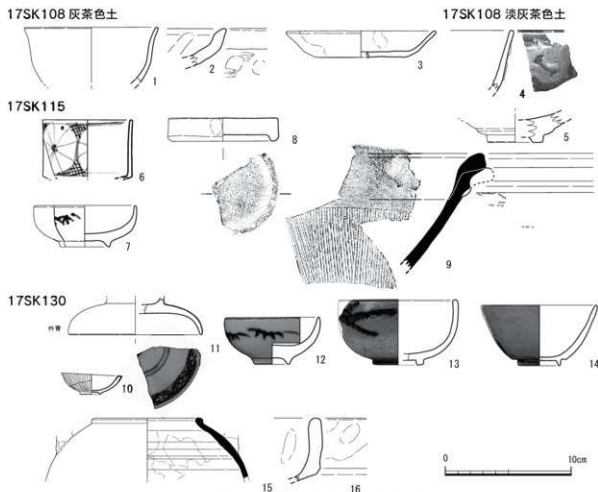
全面に摩滅が著しい。中世の所産か。32はロクロ成型の皿。口縁端部に煤が付着。33は手捏ね成形の皿。白色系で薄い。34は京都系土師器皿。35は土師質土器の小型の容器。36は土製品で鈴の上半部片。上端部に紐通し穴があげられている。37は、丸瓦。内面に布目が残る。

17SK110 黄灰色土出土遺物 (第55図1～4)

1は肥前系染付小皿。外面に「大坂新町橋本家玉笹屋」の銘が入る。見込みと高台に砂付着。2は国産磁器の白磁筒形碗。3は肥前系陶器の鉢で、内面に銅緑軸をかける。4は軒平瓦。吉田分類D-2類。

17SK110 黒色土出土遺物 (第55図5～15)

5～7は肥前系染付碗。5は外面に暗黄緑色の釉が掛かる碗で、内面には五弁花文が入る。6は筒形碗。7は外面に氷結紋を描く薄手の碗。8は染付皿で、方形の向付けとなる。9～14は白色系で外面に布目のつく手捏ね成形の皿。9～12は小皿。反転復元を含むが概ね口径6cm、器高1.1cmに収まる。赤色砂粒を含み色調は14より黄色味が強い。13・14は手捏ね成形の皿である。14はほとんど砂粒を含まない精製された白色の土器で、外面には布目？と指痕が残るが、見込み部はナデにより非常に平滑に仕上げる。内面の体部から底部の境部がわずかに窪む点特徴である。胎土、色調、形態からみて京都からの搬入品か。15はロクロ成型の土師器皿。口縁端部が面取りされ厚くなる。外面は工具によるロクロ成型ナデが入る。わずかに角閃石が入るが精製された胎土である。内面淡白橙色、橙白色。14・15は異なる製作技法であるが、ともに口縁端部に煤が付着しており、製作技



第56図 土坑出土遺物 11 (1/3)

法の違いによる最終使用形態には差がないようである。

17SK110 暗黒色土出土遺物 (第55図 16～18)

16は肥前系青磁皿×鉢。非常に低い高台をもつ。見込みの蛇ノ目軸剥部に鉄軸で着色。これを波状に掻き取り文様化している。底部に砂が付着する。古手の青磁か。17は肥前系青磁鉢。18は京都系土師器環。厚さ1.0cmと非常に厚い。内面のナデ上げ痕跡は確認できない。外面灰白色、内面灰黄色で胎土は粗い。

17SK108 灰茶色土出土遺物 (第56図 1～3)

1は関西系陶器碗。2は京都系土師器皿×杯。内面にはナデ上げ痕あり。3はロクロ形成の土師器皿。内外面に煤付着。

17SK108 淡灰茶色土出土遺物 (第56図 4～5)

4は国産陶器碗。全面に褐釉を掛け、さらに長石釉を部分的に厚くかける。5は国産陶器。天目か。

17SK115 出土遺物 (第56図 6～9)

6は肥前系染付筒型碗。7は肥前系染付紅皿。8は焼塩壺蓋。内面には布目痕が明瞭に残る。9は肥前系陶器描鉢。全面に鉄軸がかかる。

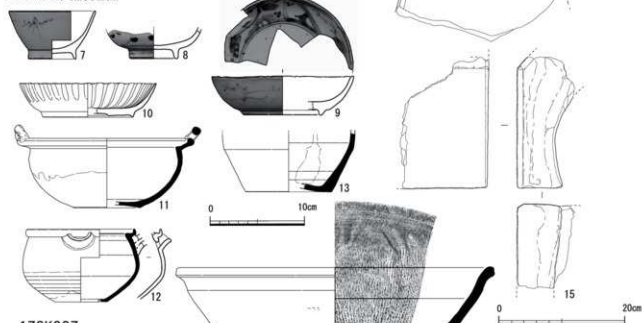
17SK130 出土遺物 (第56図 10～16)

10～13は肥前系陶磁。10・12は紅皿。11は外青磁となる染付蓋。13は染付環。被熱により釉が白濁している。

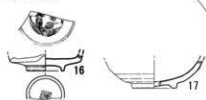
17SK004



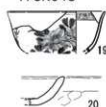
17SK006 黒灰色土



17SK007



17SK048



17SK051



第57図 その他の 土坑出土遺物 12 (1/4、15は1/6)

14は京・信楽系陶器環。外面に小杉文を描く。15は国産陶器土瓶。外面に鉄軸が掛かる。16は土師質土器焙烙で、外面に煤が付着する。

17SK004 出土遺物 (第57図10～16)

1は肥前系染付碗。底部に焼継ぎ文字?が朱色で書かれるが判読できない。2は肥前系染付小皿。3は国産陶器壺で外面に鉄絵を描く。4は国産陶器播鉢。肥前産か。5は瓦質土器火消し壺。6は瓦質土器で器種は不明。底部が台形上になりやや鈍角に立ち上がる。

17SK006 黒灰土出土遺物 (第57図10～16)

7・8は肥前系染付碗。7は広東碗。9・10は肥前系磁器皿で9は染付。10は蛇ノ目凹形高台となる白磁の菊皿。11は関西系陶器土鍋。12は関西系陶器の行平。把手部を欠く。13は国産陶器壺の底部。外面に茶色の軸が掛かる。14は肥前系陶器播鉢。外面に格子目タタキ痕を残す。15は土製品で甕の一部と思われる。硬質に焼かれ、上面と前面に煤が付着している。

17SK007 出土遺物 (第57図16～18)

16は肥前系染付筒型碗。17は国産陶器碗。白色砂粒を多量に含む内面黒軸の掛かる製品。福岡系か。18は瓦質土器の火鉢。底部に縄を写した二条の突帯が接合する。

17SK048 出土遺物 (第57図19～20)

19は肥前系染付端反碗。20は京都系土師器環。

17SK051 出土遺物 (第57図21)

21は国産陶器蓋。深緑色の軸が掛かる

■性格不明遺構出土遺物

17SX042 出土遺物 (第58図1～4)

1は肥前系染付大皿。体部に焼継痕を残す。底部外面にはハリ痕を残す。18世紀後半代の所産。2・3は瀬戸・美濃系?磁器の小杯。3は内面に「結納物古手類・・・」の銘がみえる。4は肥前系染付小皿。

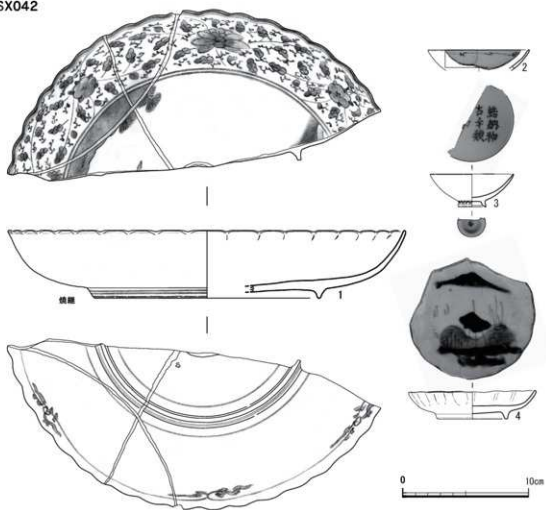
17SX063 出土遺物 (第58図5～12)

5～8は肥前系磁器。5・6は碗。7は筒型碗で外面青磁となる。8は染付大皿。鐙皿型式で輸入向けの大型製品。9は類例に乏しい高台の高い白色磁器。10は植木鉢の口縁部片。瀬戸産か。11は土師質土器焙烙。12はロクロ成型の土師器環。底部は厚みがあり口縁を内湾させる。外面底部に内面まで貫通しないが中央に穴を開ける。

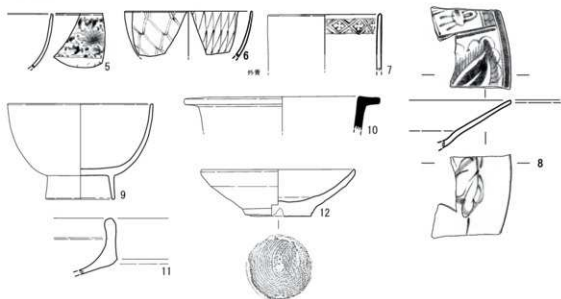
17SX095 灰茶色土出土遺物① (第59図1～33)

1～24は肥前系磁器。1～5は紅皿。6・7は小杯。9は染付仏飯器の環部。10・11は染付蓋。12・13は環。14・15は筒型碗。16～18は広東碗。で17・18は端反となる。19・20は染付蛇ノ目凸型高台皿。21は染付灰入れ。22は染付鉢。23は青磁の鉢×。厚く軸が掛かる。24は陶胎染付碗。25は京・信楽系の陶器碗。26・27は京焼風陶器碗。26の外面は赤・灰・緑色で文様を上絵付けする。28は萩焼碗。高台まで藁灰釉が厚く施釉される。29は国産陶器で急須の蓋。30は無軸陶器の皿×。31は肥前系陶器鉢。17SX055 灰白色出土の製品(第

17SX042



17SX063

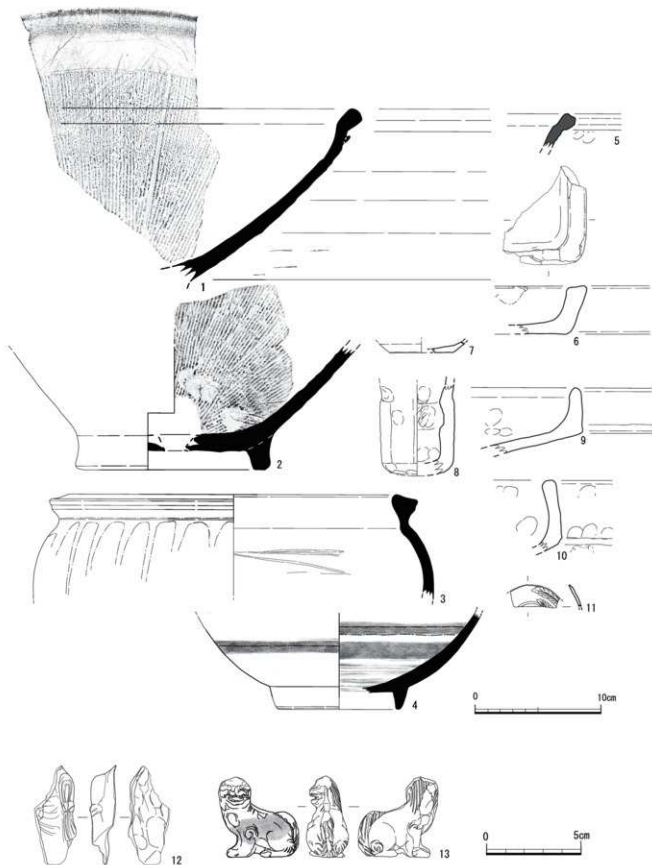


第 58 圖 性格不明遺構出土遺物 1 (1/3)

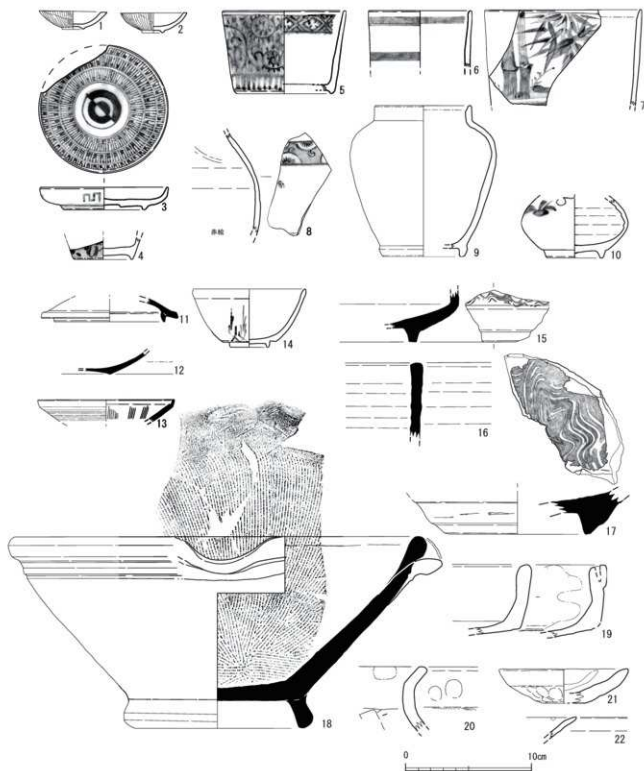


第 59 図 性格不明遺構出土遺物 2 (1/3)

17SX095 灰茶色土②

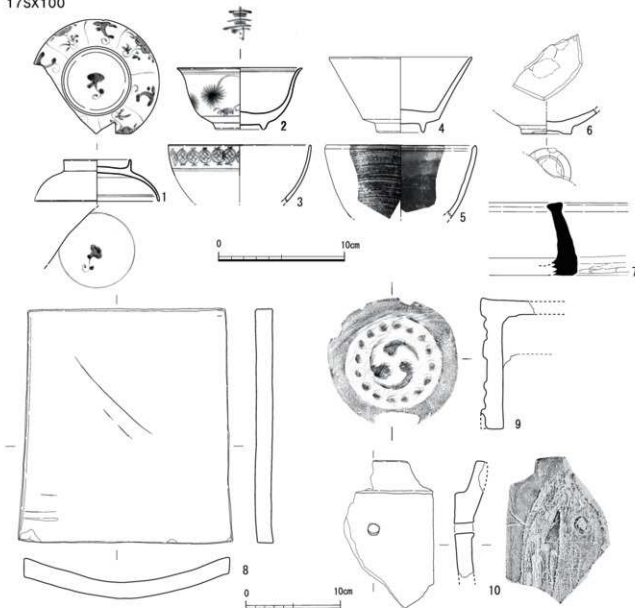


第 60 図 性格不明遺構出土遺物 3 (1/3、12・13 は 1/2)



第 61 図 性格不明遺構出土遺物 4 (1/3)

17SX100



第62図 性格不明遺構出土遺物 5 (1～7は1/3、8～10は1/4)

44図22)と同一製品か。33は関西系陶器行平鍋。把手には雀?の図像が型押しされている。

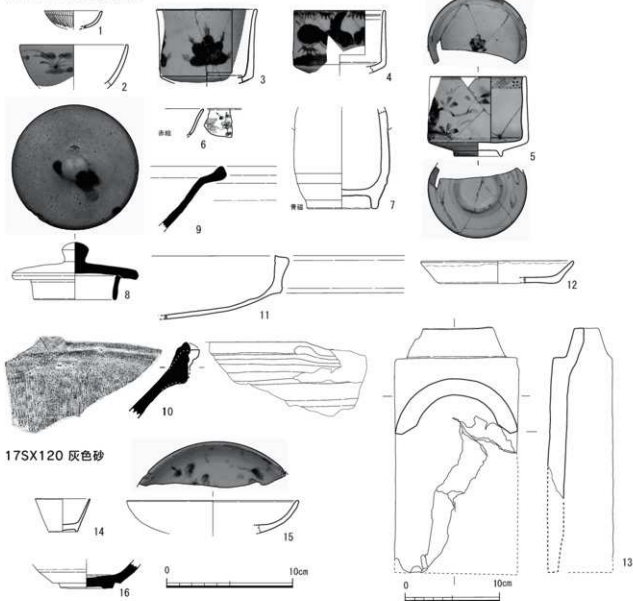
17SX095 灰茶色土出土遺物② (第60図1～13)

1～4は肥前系陶器。1・2は播鉢で1には口縁部外面に重ね焼による軸着物が見られる。2は焼成後遺構に底部に粗雑に穿たれた孔があり、植木鉢に転用されたと考えられる。3は甕。全面に褐釉を掛けた後に肩部に黒釉を流し掛けする。4は鉢で内外面は刷毛目文様を入れる。5は瓦質土器で鉢の口縁部か。6は土師質土器で方形の鉢。金雲母を多量に含む。7はロクロ成型の土師器環。8は焼塩壺。内面に布目痕が残る。9・10は土師質土器焙烙。11は常滑産の可能性のある暗橙色に焼成された無軸陶器の小皿状製品。口縁部のみ透明釉をかける。内面は型押しにより文様を表現する匙状製品。12・13は土製人形。12は女性人形の袖部分。13は狼犬。全面に胎色の釉を掛けた後、体部のみに緑釉をかける。

17SK095 黒灰色土出土遺物 (第61図1～22)

1～10は肥前系磁器。1～2は紅皿。3は染付皿。4～6は筒型碗。8は赤絵の壺の体部。9は白磁の壺。

17SX120 暗灰青色土①



17SX120 灰色砂

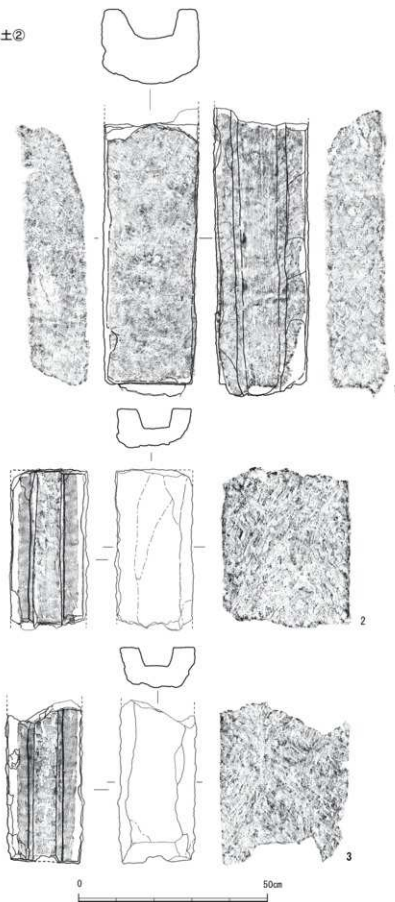
第 63 図 性格不明遺構出土遺物 6 (1/3)

10は染付壺。11は国産陶器蓋。12は国産陶器土瓶。13は国産陶器のミニチュア描鉢。外面に細かい横方向の磨ぎが施される。14は信楽系陶器鉢。15は肥前系陶器鉢。16は焼締陶器鉢× 17は肥前系陶器鉢。高台は断面三角形である。18は肥前系陶器描鉢。茶色の鉄軸が全面に掛かる。19は土師質土器焙烙。20は土師器裏。内面へラ削り、外面ハケ目調整。古墳時代後期の所産か。21・22は京都系土師器皿。22は埴地1期頃の薄手の製品。

17SX100 出土遺物 (第 62 図 1 ~ 10)

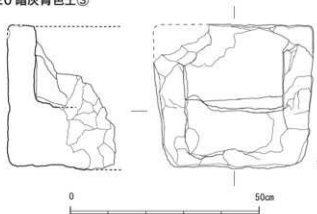
1 ~ 4は肥前系磁器。1は蓋。2は初期伊万の碗。内面に「寿」の銘がある。3は薄手の碗。4は白磁の杯。5 ~ 6は国産陶器。5は褐釉を刷毛状のものでかける碗。美濃産か。6は唐津産の陶器碗。内面に黒釉が掛かる。砂目積。7は国産陶器か。色調は淡黄白色で硬質に焼成されている。浅手の鉢の一種か。8は完存する平瓦。9は軒丸瓦。10は丸瓦で釘が空けられる。内面には板状工具による内叩き痕が確認できる。

17SX120 暗灰青色土②

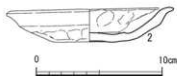


第64図 性格不明遺構出土遺物 7 (1/10)

17SX120 暗灰青色土③



17SX125



第65図 性格不明遺構出土遺物 8 (1は1/10、2は1/3)

17SX120 暗灰青色土出土遺物① (第63図1～13)

1～7は肥前系磁器。1は紅皿。2は染付小碗。3～5は筒型碗。6は赤絵の小坏か。7は青磁の壺×。被熱のため軸が大きく変質している。体部外面に把手のような付属物が欠損する箇所があり、把手付か。8は胎軸の掛かった蓋。関西系。9は唐津産の鉢で内面は刷毛手である。10は堺・明石系の播鉢。11は土師質土器焙烙。薄くなった底部は外面が被熱のため弾け薄くなっている。12は土師器環。口縁部には煤が付着する。13は一部が欠損するが全長25.8cmの丸瓦。焼成がやや甘い。内面には布目が残る。

17SX120 灰色砂出土遺物 (第63図14～16)

1は肥前系磁器の小坏。2は染付皿。3は天目茶碗の底部。

17SX120 暗灰青色土出土遺物② (第64図1～3)

1～3は凝灰岩製の石樋か。ノミ状工具によって全面を調整している。1は別個体との接合のための受け部を作り出す。2・3は同一形式の製品。2の背面は煤が付着している。

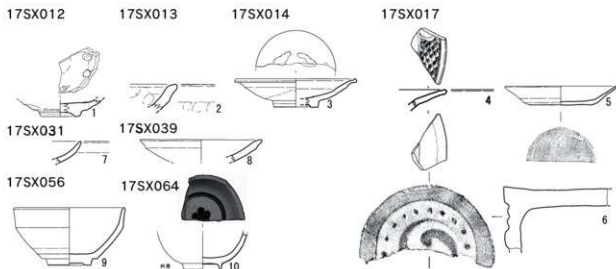
17SX120 暗灰青色土出土遺物③ (第65図1)

1は手水鉢の可能性のある凝灰岩製品で、第64図のものと同様、石材にノミ状工具による調整がなされている。底部は非常に厚い。

※野田雅之氏の肉眼観察によると、これらの凝灰岩製品は府内城下町に程近い南大分の永興付近で採取できるいわゆる「永興石」ではなく白杵の下ノ江で採取できる石に類似するという。近年、愛媛県宇和島城本丸跡の発掘調査において、類似した石材を用いた石樋状の製品が出土している。

17SX125 出土遺物 (第65図2)

2は京都系土師器皿。口縁部をやや外反気味になるやや厚手の製品で、内面には粘土接合痕が確認できる。



第 66 図 性格不明遺構出土遺物 9 (1/4)

17SX012・SX013・SX014・SX017 出土遺物 (第 66 図 1～6)

1 は唐津焼陶器環。見込みに灰軸を掛け、胎土目痕が残る。2 は京都系土師器皿×環。内面に煤が付着する。3 は唐津焼皿。灰軸が掛かり見込みに砂目を残す。4 は肥前系染付大皿の口縁部。5 はロクロ成型の土師器環。6 は軒丸瓦。

17SX031・SX039・SX056・SX064 出土遺物 (第 66 図 7～10)

7 は土師器皿口縁部片。8 は京都系土師器皿。口縁端部外面が沈線状に窪む。9 は瀬戸美濃系天目茶碗で茶白色の釉が掛かる。10 は発色の悪い肥前系染付碗。外面青磁で見込みにコンニャク印判で五弁花を押す。

17SX084 出土遺物 (第 67 図 1・2)

1 は性格不明のガラス製品。2 は肥前系染付紅皿。

17SX085 出土遺物 (第 67 図 3・4)

3 は国産陶器土瓶。外面上半部に黒釉が掛かる。4 は軒平瓦で唐草を細線彫りする。未分類か。

17SX088 出土遺物 (第 67 図 5～13)

5～10 肥前系磁器。5 は染付蓋。6 は薄手の染付碗。7 は肥前系碗。8 は猪口。9・10 は筒型碗。11 は国産陶器鉢。明橙色の胎土で、外面から内面上半部にかけて乳白色釉をかける。八角形に面取りされ各面に八卦文が型押しされる。12 は肥前系陶器播鉢。13 は関西系陶器土鍋。

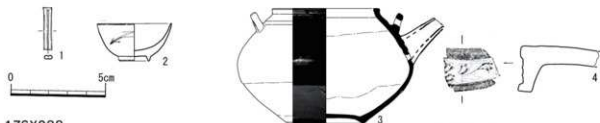
17SX099・SX101・SX106・SX114 出土遺物 (第 67 図 14～17)

14 は肥前系染付合子の身。体部に幾何学文様が陰刻される。15 は肥前系染付蓋で「御神前」銘が体部に描かれる。16 は肥前系染付鉢。17 は国産陶器鉢。内面見込みに 7 箇所の目痕が残る。明治以降の製品か。

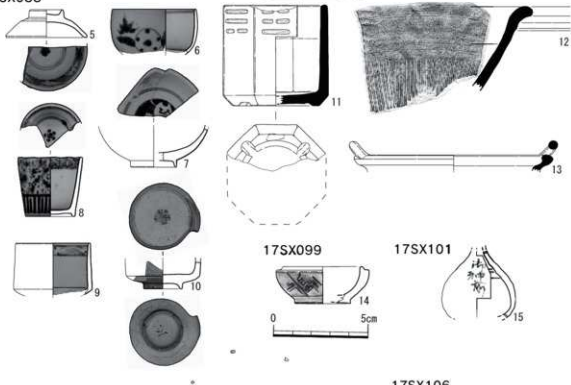
[2 面目の遺構]

17SX084

17SX085



17SX088

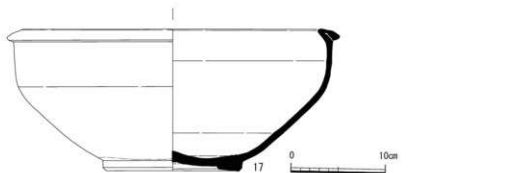


17SX099

17SX101

17SX114

17SX106

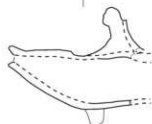
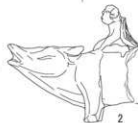
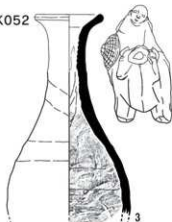


第 67 図 性格不明遺構出土遺物 10 (1/4、14 は 1/2)

17SK050



17SK052



17SK053



第 68 図 2 面目の遺構出土遺物 (1/3、2 は 1/2)

■性格不明遺構出土遺物

17SK050 出土遺物 (第 68 図 1)

1 は国産陶器の碗。灰釉がかかる。京・信楽系か。

■土坑出土遺物

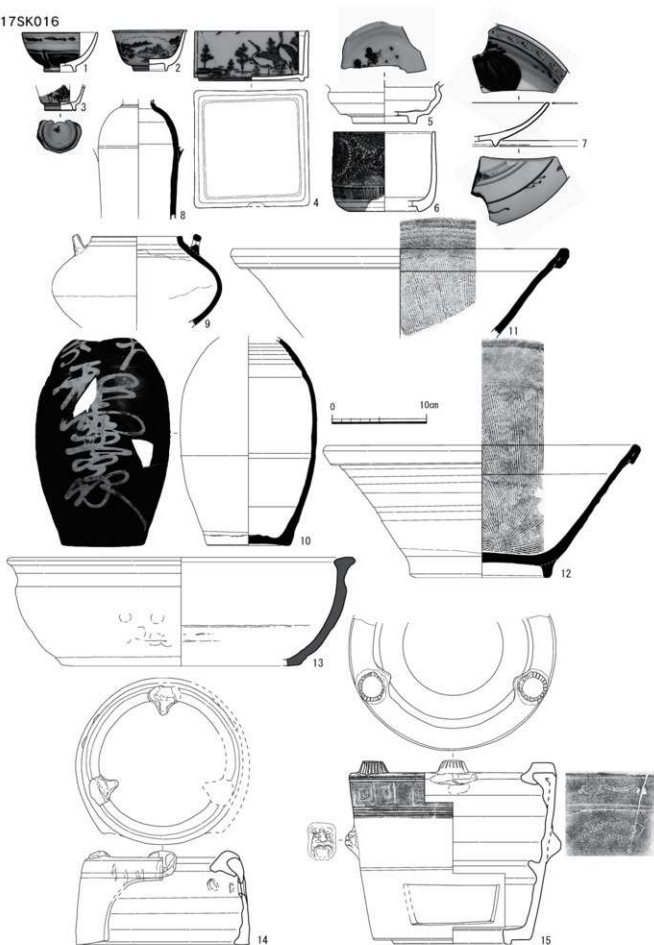
17SK052 出土遺物 (第 68 図 2～4)

2 は肥前系磁器の人形型の水滴。猪?にまたがる僧を表現する。中央に型の合わせ目が明瞭に確認できる。本来は彩色されていたようで、蓑傘の暗黄色と、僧の頭部に灰色が残るのみである。体部の半部が欠損しているが、猪の口に穴があることから水滴か。3 は上野・高取系陶器の壺。外面に黒釉と藁灰釉がかかる。17 世紀前半の所産。4 はやや厚手の京都系土師器皿で内面にナデ上げ痕が残る。

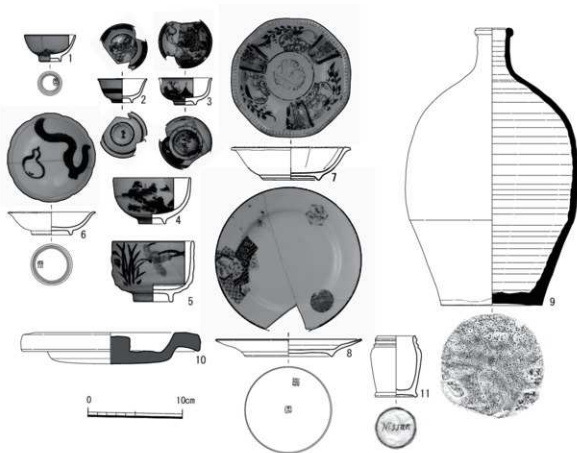
17SK053 出土遺物 (第 68 図 5)

5 は和泉型瓦器碗。口縁端部外面を強くナデる。内面には横方向のミガキを施す。

17SK016



第69図 近代の土坑出土遺物1 (1/4)



第70図 近代の土坑出土遺物2 (1/4)

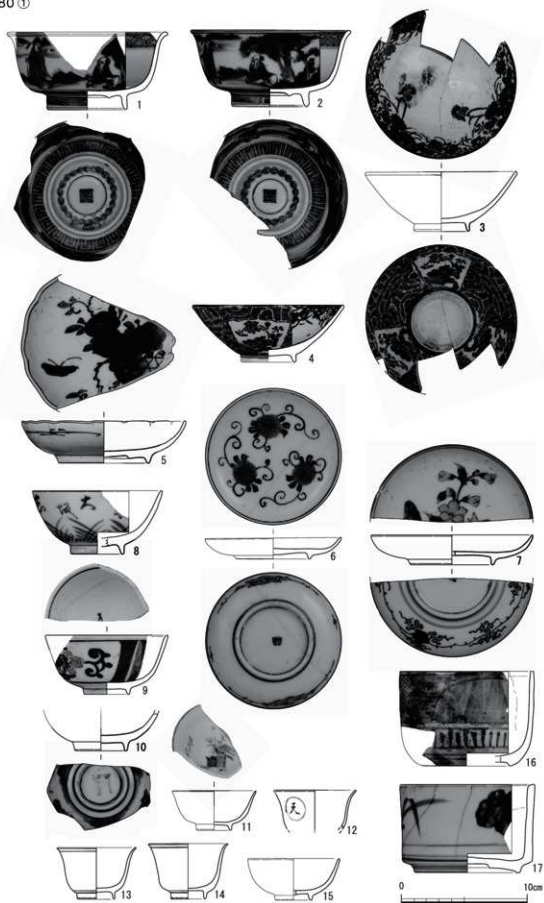
[近代以降の遺構]

17SK016 (第69図1～15)

1～4・6・7は国産磁器。全て科学呉須により絵付けされる。1～3は小坏。4は方形の鉢。四方に湖畔より飛び立つ鶴を描く。6は底部甚筒底の灰入れ。7は皿。5は国産磁器で淡い青磁釉が掛かる鉢。8～12は国産陶器。8は瀬戸美濃系陶器の瓶。体部に把手?が着くようである。褐釉がかかる。9は外面にくすんだ銅緑釉のかかる土瓶。10は白土で「大分 和霊家」銘を描く薄く鉄釉の掛かった徳利。11・12は描鉢である。全面に鉄釉が掛かる。肥前系か。13は瓦質土器の火鉢。14は土師質土器甕。3つの支脚を乗せ、2箇所に一對の穿孔をあける。火口部外面には煤が付着する。15は土師質土器七輪。外面は赤色顔料を塗布し丁寧に磨かれ橙色の色調である。体部上端に雷紋を彫り、退化した竜紋のスタンプを押す。体部中段正面には「勸業課 御試験済」「筑前博多産物」を記した扇形のスタンプが押される。博多産。

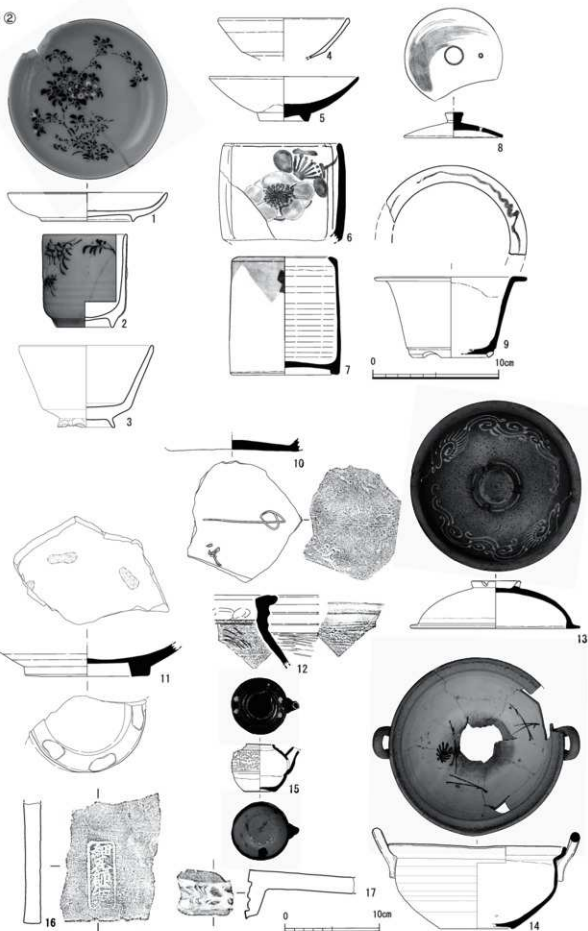
17SK062 (第70図1～11)

1～8は国産磁器。1～3は小坏。2・3は色絵金彩の磁器。底部には「九谷」の銘が見える。3の見込みに「瓢箪から駒」の図象が描かれる。4・5は国産磁器碗であり4の底部には「春仙」の銘がみえる。6～8は国産磁器皿。6は統制陶器で底部に「岐 232」の印が押される。美濃産。8は底部外面隅に「岐 1162」の印が押され、中央には「櫻陶」と読める赤色のくずし文字が押印される。美濃産。9は国産陶器徳利で全面に鉄釉がかかる。10は瓦質土器

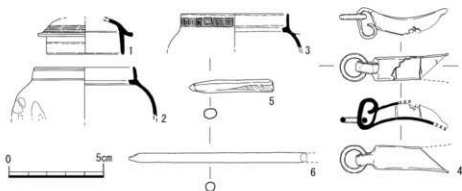


第71図 近代の土坑出土遺物 3 (1/3)

17SK080 ②



第72図 近代の土坑出土遺物4 (1/3、17は1/4)



第73図 近代の土坑出土遺物 5 (1/2)

火酒壺の蓋。11は底部に「Nissan」銘のある化粧瓶。

17SK080 出土遺物①<磁器類> (第71図1～17)

1・2はプリント染付碗。3・4は銅板転写の碗。5～7は国産磁器の皿で、5は蛇ノ目凸型高台となる。6・7はコバルト釉により絵付けされる。8は肥前系染付小皿。外面に「大坂新町橋本家玉笹屋」の銘が入る。9・10は染付碗で、9は赤・青の顔料で上絵つけされる染付碗。11～15は小杯。16・17は国産磁器の灰入れである。

17SK080 出土遺物②<磁器陶器類> (第72図1～17)

1・2は瀬戸焼の皿と湯のみ。それぞれ外面・内面に黄味がかった青磁釉を掛ける。3は肥前系磁器環。4・5は肥前系陶器皿。6～9は国産陶器で、6は京焼風の方形の火入れ。7は硬質に焼かれた筒型の鉢。関西系か。8は蓋で天井部に穿孔がある。9は瀬戸産の植木鉢。灰釉が掛かり、口縁部上面には鉄絵で波線が描かれる。10は国産陶器裏か壺の底部でヘラ記号が施される。11は肥前系陶器の鉢で見込みや高台部に砂目が付着する。12は肥前系陶器の裏で内面に同心円状の当て具痕、外面に叩き痕がみられる。13は国産陶器の土鍋蓋。外面は紫白色。14は底部が欠損した鍋の身で一對の把手がつく。15は国産陶器小型土瓶。把手が欠損するがほぼ完形。体部外面には鉄製急須を模倣した浮紋を型押しで表現する。底部には墨書銘があるが判読できない。16は平瓦で「細瓦師安太」銘の印がおされる。19世紀中頃の製品。17は軒平瓦で、吉田分類G類の新段階のもの。

17SK080 出土遺物③ (第73図1～6)

1～4は精成された胎土を用いて硬質に焼かれた国産陶器。1はミニチュアの鍋の蓋もしくは釜の身か。2・3は共通した器形であるが器種は不明。2は体部に白土を象嵌し文様を表現する。3は1・2以上に硬質に焼かれた製品で口縁部外面に雷文のスタンプを押す。4は環状の陶製品を咬ませた性格不明の陶器。暗茶黒色に焼成され、側面に細かな穿孔をいれる。5は蠟石で作成されたチョーク状の石棒。6はガラス製の簪である。不透明な白色の色調。

17SX001 出土遺物 (第74図1～4)

1～5は国産磁器。1・2はセットとなる碗と蓋で、科学興須により絵付けされる。3は色絵の小杯。4は土師質土器焙烙。

17SX002 出土遺物 (第74図5～9)

5は高台の高い小杯。6は外面に蝙蝠を描いた碗である。7は国産陶器の小杯で、例り込み高台から萩焼か。薄く赤味のある釉が掛かり、貫入が入る。持ち易さを考えてか手の形に合わせて歪ませているようである。8は



第74図 近代のその他の遺構出土遺物 (1/4、24・29は1/2)

国産陶器植木鉢。外面は白土を象嵌し花紋や斜線紋を表現する。内面に重ね焼き痕が残る。9は土師質土器の植木鉢。10は軒平瓦で吉田分類のA類。

17SX018 出土遺物 (第74図11～17)

11～13は肥前系磁器。11は色絵合子の蓋。12は染付仏飯器の坏部。13は外面青磁となる染付碗。14は国産磁器皿。朱色のプリント文様を入れる。15は関西系陶器の蓋。16は肥前系陶器描鉢。内面に褐釉がかかる。17は国産陶器の茶入れなどの蓋。外面には褐釉がかかる。

17SX019 出土遺物 (第74図18～22)

18は銅板転写の国産磁器碗。19は第71図1・2と同一様式の瀬戸産皿である。20は唐津焼碗の底部か。21は国産陶器描鉢の口縁部。22は内面に柿釉のかかる土師質土器の小皿。ロクロ整形により薄く仕上げる。

17SX025 出土遺物 (第74図23～29)

23は肥前系染付薄手の染付碗。24は国産磁器ミニチュアの白磁碗。型成形で外面には連弁が表現される。25は明石・堺産の描鉢。26は唐津焼皿。見込みと高台に砂目痕が残る。27は土師質土器焙烙。28は縄文土器深鉢の口縁部。29は土製の人形。橙白色の土師質焼成で、鞠で遊ぶ猫を表現する。底部には穿孔あり。

17SX044 出土遺物 (第74図30～31)

30は絵唐津の浅鉢。31は京都系土師器皿。

17SX068 出土遺物 (第74図32～36)

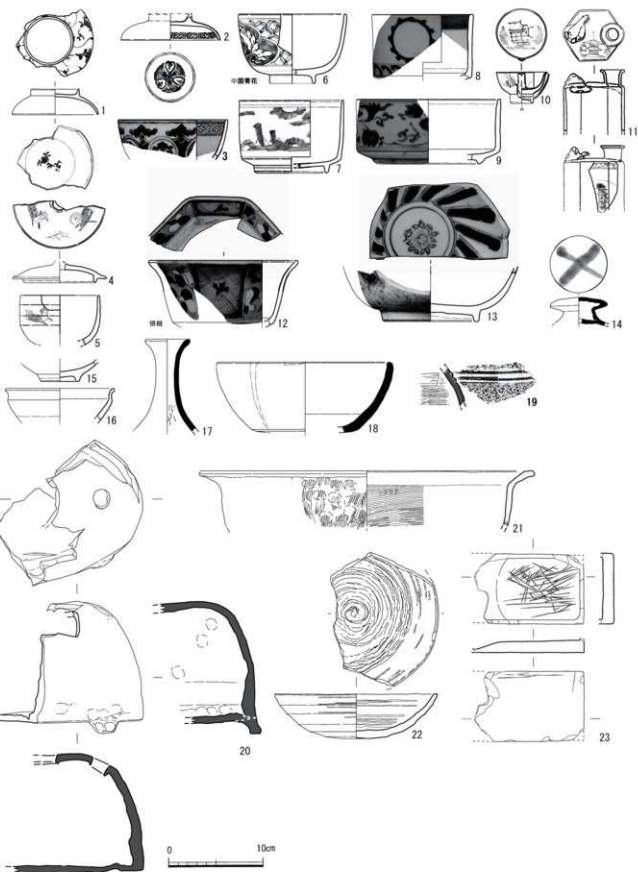
32は土師質土器焙烙で、口縁部の穿孔は貫通していない。33は薄手のロクロ成形の土師器坏。34は京都系土師器皿。35は美濃産の陶器碗で、外面に鉄絵で柳の文様を描くいわゆる「柳茶碗」。36は明石・堺産の描鉢。外面淡紫白色で無釉。

17SX069 (第74図37～39)

37は関西系陶器碗で、底部に墨書の記号あり。38・39は国産磁器の染付皿。見込みに瓢箪を抱えた雲に乗る仙人の図像が描かれる。39は見込みに竜らしき生き物が描かれる。

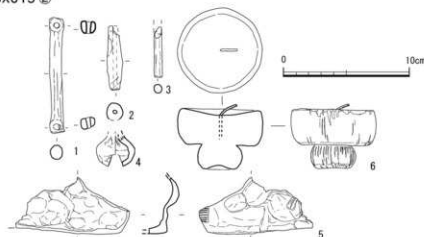
17SX015 ① (第75図1～23)

1～2は肥前系磁器の染付蓋。3は肥前系磁器の染付碗。4・5は近代磁器で、4は天井部外面には傘をかぶったキャラクターが空を飛ぶような絵柄が描かれる。5は4の蓋と同様のキャラクターが体部外面に描かれるで、おり、セットと考えられる。6は中国製陶磁器碗。灰色系のザラツキのある灰色の胎土で、陶器質である。外面には七宝文と蓮華文を描く。漳州窯系か。7～9は肥前系磁器の染付灰入れ。10・11は、近代陶器で、10は外面が二重構造になる仕掛けものの盃。いわゆる「十分杯」などと称される盃か。内外面とも乳白色系の薄緑色で、樓閣の絵柄が内外面に描かれる。11も同様の胎土・色調で同種の絵付けを描く。天井部内面に接合された笛により、注ぎ口より液体を注ぐと、天井部にある鳥型の部分より音がなる仕組みとなる。10・11はセットであったと思われる。12は肥前系磁器染付の八角鉢で、外面に焼き継ぎ痕がみられる。13は蛇ノ目凹型高台の国産磁器鉢。科学呉須を用いる。14は陶器の蓋で、天井部に「×」字を鉄釉で描き焼成されている。15は内外面に黒釉のかかる唐津焼碗。16は瀬戸美濃系天目。17は唐津系陶器の壺で被熱を受ける。18は無釉陶器鉢。外面に火罨がみえる。備前産か。19は瓦質土器の釜の肩部片。外面には菊花文のスタンプを押す。20は瓦質土器行火。21は土



第 75 圖 17SX015 出土遺物 1 (1/4)

17SX015 ②



第76図 17SX015 出土遺物 2 (1/3)

師質土器の銅。12世紀代の所産か。22は土師器環d。口縁端部が沈線状の段をもち内外面には螺旋状にミガキが施される。8世紀後半の所産。23はチャート製の灰緑色の硯。海部は欠損するが、不定方向の鋭利な傷跡がみられる。

17SX015 ② (第76図1～5)

1・2は棒状土鍾。3は棒状の滑石製品。石版に字を描くチョークか。4は土鈴。5は土製人形の一部。大黒人形か。6はコマ型の木製品。赤色の顔料が塗られている部分がある。建築部材の一部か。

■各土色出土遺物

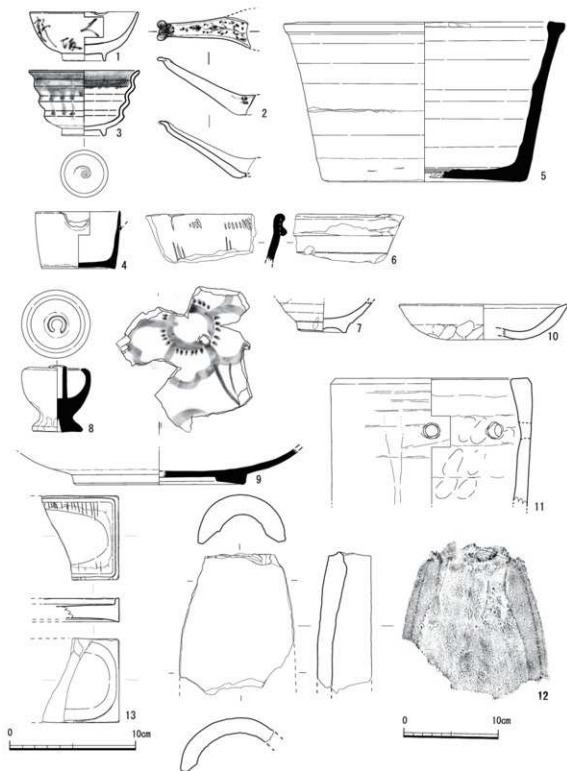
黒茶色土① (第77図1～13)

1は肥前系磁器染付くわんか碗。外面に「大坂新町・」の字を描く。2は国産磁器の蓮華。3は関西系陶器の環で、内外面に銅緑軸をかける。4は国産陶器環。灰釉がかかる。片口となるか。5は無軸陶器の鉢。口縁端部を肥厚させる。底部中央は焼成後に穿孔されており、植木鉢に転用している可能性が高い。体部外面の中央と口縁部内面には重ね焼きの痕跡がみられ、内面下半には火押も確認できる。備前産か。6は褐色の釉が薄くかかる国産陶器鉢。焼成不良のためか胎土は黄白色で、軟質に焼成されている。7は内面に黒釉がかかる碗。唐津産か。8は黒釉がかかる国産陶器のたんころ。瀬戸・美濃産か。9は瀬戸・美濃産の鉢。暗黄白色の胎土で、見込みに胎土目？痕が残る。10は京都系土師器皿。反転復元のため口徑に若干の誤差をもつが、やや深手の皿になると想定される。11は性格不明の土師質土器。2箇所に穿孔がみられ内面には粘土紐接合痕と指押さえ調整が、外面には横方向のミガミを施す。外面に煤が一筋付着する。胎土には金雲母が多量に含まれる。12は丸瓦。行基葺きとなる。内面に細かな布目痕が観察できる。13は泥岩製の黒灰色の硯。内面には立方向の鋭利な傷跡が見られる。

黒茶色土② (第78図1～9)

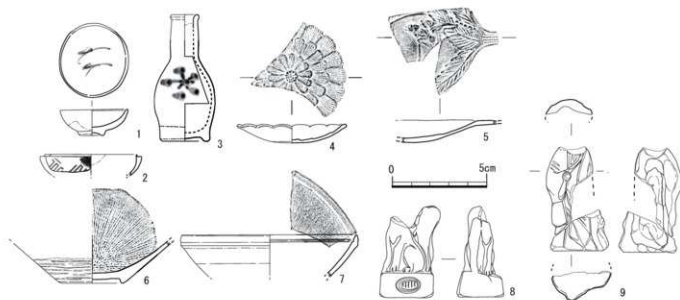
1～3は肥前系磁器。1は染付紅皿か。内面に松葉文様を描く。2は染付合子。紗綾形文を用いた型成形である。3は小型の壺。4・5は常滑産の可能性のある暗褐色に焼成された無軸陶器。4は口縁部のみ透明釉をかける菊花をあしらった皿状製品。内面は型押しにより文様を表現するが、外面は丁寧な回転ヘラ削り調整を施す。5は17SX095 灰茶色土出土遺物(第61図11)と同一の製品で、匙状となる。内面は型押しにより大きな葉とその上に天女？が表現される。暗赤茶色の無軸陶器。6・7はミニチュアの鉢である。口縁部の細かな形状、繊細な摺目の表現など精巧に製作される。6は土師質で、外面には磨きがみられる。7は陶器質で口縁部に鉄釉が薄くかかる。8は土製の弧形人形、9は軟質施釉陶器の女性人形で、型合せた背面を欠損し、内面の指オサエ痕が

黒茶色土①



第 77 図 黒茶色土出土遺物 1 (1/3、12 は 1/4)

黒茶色土②



第78図 黒茶色土出土遺物 2 (1/2)

観察できる。被熱のため釉調が変質し色調は不明。

暗灰色土 (第79図1～4)

1は国産磁器の灰入れ。2は国産陶器壺か。体部には把手がつく。3は肥前系陶器の挿鉢。4は大型の土鉢。扁平なラグビーボール状で4つの穿孔がみられる。

黒灰色土 (第79図5～28)

5は染付のミニチュアの環。6は白磁環。7・8は肥前系磁器で外面に雨降文を描く碗。9は外面にコンニャク印判で鶴を表現する肥前系磁器碗。10は赤絵の碗で、外面に獅子？を描く、11は薄手の染付碗。12は染付碗。13～15は中国製の青花。13は深手の碗。E群か。14はやや呉須の発色の悪い鉢×皿形状となる製品で、文様構成からみていわゆる「モンスターマスク」と呼ばれる製品の一部分の可能性がある。15は皿。B群か。16は国産陶器の蓋。外面に褐色釉がかかる。17は唐津焼の皿。18は陶胎染付。19は肥前系陶器の陶器碗。20は唐津産挿鉢の口縁部。21は堺・明石産の挿鉢。22は瓦質土器の焔炉。23は碗の縁の一部。24～28は土師器の皿。24・25は手づくね成形の白色で薄手の皿。25は内面に面的に煤が付着する。26は京都系土師器の皿。27・28は回転台成形の環で28は底部に焼成後の穿孔が見られる。

明茶色土 (第79図29～30)

29・30は東播磨の捏鉢の口縁部。ともに萩野編年のⅡ-2段階(12世紀末～13世紀初頭)の製品。

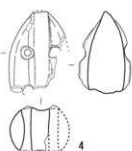
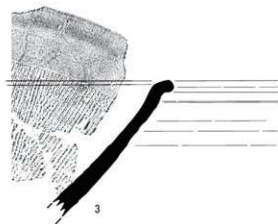
灰白色土 (第80図1・2)

1・2は肥前系磁器。1は型打ち成形の染付皿で同型式の皿が複数個体出土した。18世紀前半頃の製品か。2は染付碗で高台形状に特徴をもつ。いわゆる小広東碗。

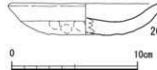
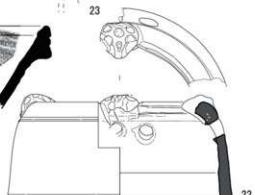
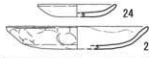
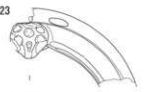
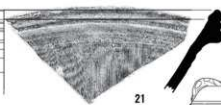
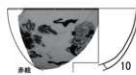
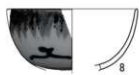
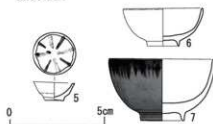
茶灰色土 (第80図3・4)

3は瑠璃釉碗。底部には「天明化成年製」の銘が見える。17世紀前半の所産。4は京都系土師器皿。厚手だが、器高を低く皿形状を維持している。煤が付着しており、灯明皿として使用されている。

暗灰色土



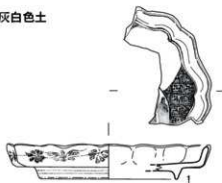
黒灰色土



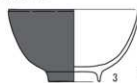
明茶色土

第 79 図 その他の土色出土遺物 1 (1/3、5は 1/2)

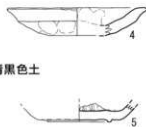
灰白色土



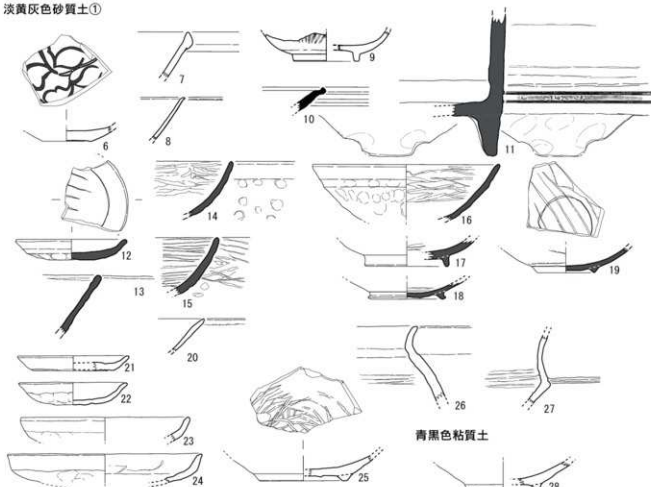
茶灰色土



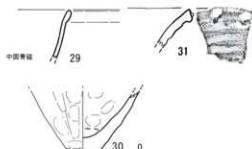
青黑色土



淡黄灰色砂質土①



黄灰色砂質土



淡黄灰色土



灰茶色粘質土

淡茶赤色土



第 80 図 その他の土色出土遺物 2 (1/3)

淡黄灰色砂質土②



第 81 図 その他の土色出土遺物 3 (1/8)

青黒色土 (第 80 図 5)

5 は瀬戸焼の折縁ソギ皿。

淡黄灰色砂質土① (第 80 図 6 ~ 25)

6 ~ 8 は中国陶磁。6 は中国製白磁の小皿Ⅷ-1b 類。7・8 は中国製白磁碗でそれぞれⅣ・Ⅴ類である。9 は京焼陶器の碗。混入品か。10 は唐津焼清緑皿。11 は瓦質土器の樽型の火鉢。突帯に区画され双頭獣手竜雲文のスタンプが押される。12 ~ 19 は瓦器。12 は小皿。13 は径が大きく深手になりそうであり鉢形になるか。内面はミガキのためか平滑になっているが、ミガキの単位は確認できない。瓦質に焼成されているが、瓦器にしては類例のない器種であり、須恵質土器の可能性も視野にいれるべきか。14 ~ 16・18・19 は和泉型瓦器碗。14 は内面に幅広のミガキを施し外面に指オサエ痕を残すのみで、ミガキは施さない。15 は、外面にもミガキが施されている。16 は口縁端部を強くナデる。外面にはミガキは施さない。18 はやや踏ん張る高台形状で、内面底部にはミガキを施す。19 は三角形の低い高台を貼り付け、内面には円系のミガキとヨコ方向の磨きを施す。17 はやや高い高台がつく九州系?の瓦器。20 は土師器環の口縁部片。口縁部片。21 は土師器小皿。底部糸切り離し。22 は手捏ね成形の小皿。底部には指頭痕が明瞭に残る。胎土には角閃石を含み、色調は淡茶褐色である。在地で製作された京都系土師器を模した製品か。23・24 も手捏ね成形の皿。回転台を使用していないことから在地の系統には属さない製品。23 はやや直立気味の口縁端部形状で、24 は口縁端部に外反気味のナデがはいる。また内面に横方向のナデが観察できる。12 世紀頃の京都系土師器であろう。25 は白色の土師器碗。内面に円を意識したミガキをめぐる。12 世紀後半の所産か。26 は土師器甕。内面に横方向のハケを施す。古墳時代後期の所産か。27 は縄文土器の浅鉢。

淡黄灰色砂質土② (第 81 図 1)

1 は凝灰岩製の空輪軸。空輪部分は風化が激しく断面が扁平になる。風輪部は下部を窪ませ火輪との接合面をつくり出す。四石五輪塔の一部か。

青黒色粘質土 (第 80 図 28)

28 は土師器の碗。10 世紀前後の所産か。

黄灰色砂質土 (第 80 図 29 ~ 31)

29 は竜泉窯系青磁の碗。14 ~ 15 世紀代の所産。30 は弥生土器甕の底部。31 は縄文土器の深鉢。

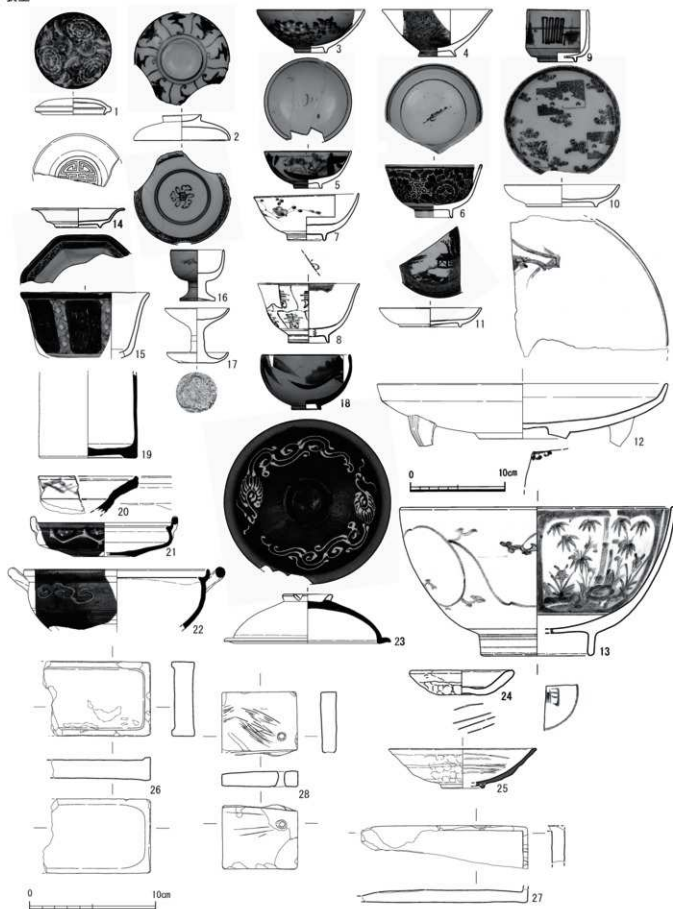
淡黄灰色土 (第 80 図 32)

32 は中須恵器ないし土師質土器の壺。埋没環境のためか色調が変化している。外面の体部下半にタタキ目が施される。

灰茶色粘質土 (第 80 図 33)

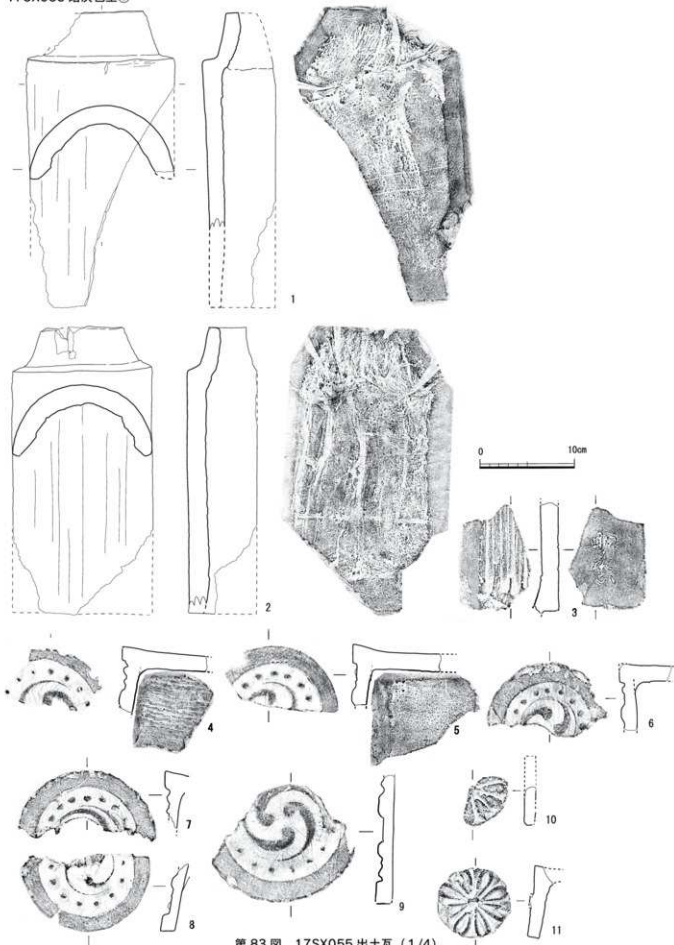
33 は縄文土器深鉢。

淡茶赤色土 (第 80 図 34)



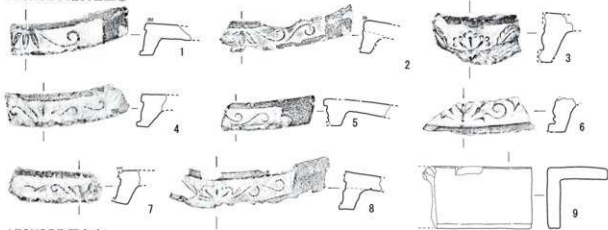
第 82 図 表土出土遺物 (1/4、26～28 は 1/3)

17SX055 暗灰色土①

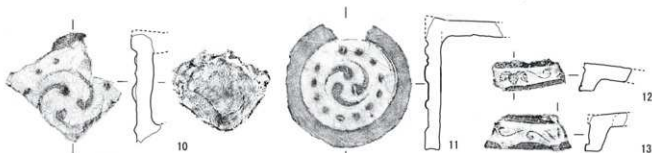


第 83 圖 17SX055 出土瓦 (1/4)

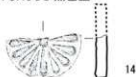
17SX055 暗灰色土②



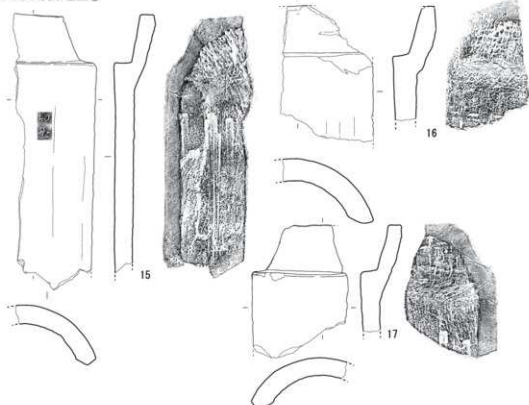
17SX055 灰色土



17SX055 黑色土

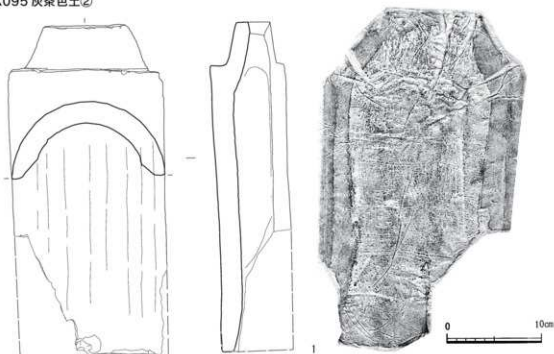


17SX095 灰茶色土①



第 84 圖 17SX055・095 出土瓦 (1/4)

17SX095 灰茶色土②



第85図 17SX095 出土瓦

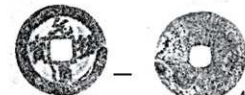
17SX055 暗灰色土



17SX098



黒灰色土



暗灰色土



第86図 銅銭拓本 (1/1)

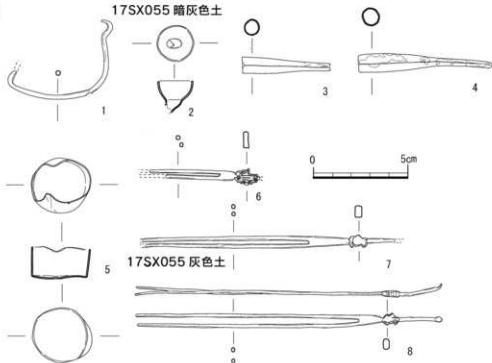
34は弥生土器の壺底部。

■表土出土遺物 (第82図6～25)

1は国産磁器の蓋。銅版転写。2は肥前系陶磁の蓋。3～6は近代以降の国産磁器の碗。3は瀬戸焼の茶碗。外面・内面に黄味がかった青磁軸を掛ける。7・8は肥前系磁器で、7はくらわんか碗。8は端反碗。9は筒型の染付碗。

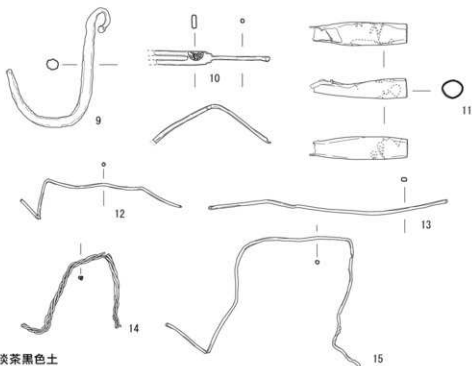
17SD040

17SX055 暗灰色土

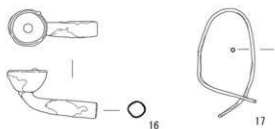


17SK075

17SK090 淡灰黑色土

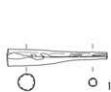


17SK105 淡茶黑色土

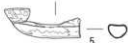


第 87 図 青銅製品実測図 1 (1/2)

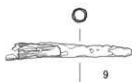
17SK115



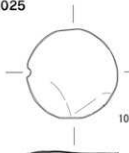
17SX095 灰茶色土



17SX100



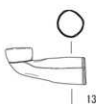
17SX025



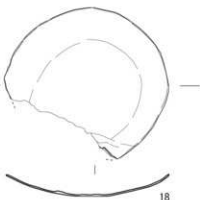
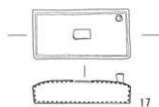
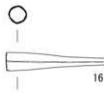
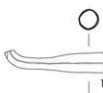
17SX080



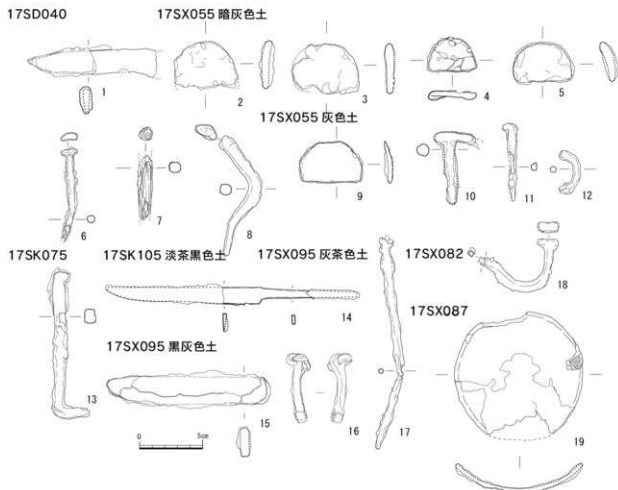
黒茶色土



黒灰色土



第88図 青銅製品実測図2 (1/2)



第 89 図 鉄製品実測図（1/3）

10 は銅版転写の皿。11 は銅板転写の染付皿。12 は初期伊万里の染付三足皿。内面に鉄絵あり。13 は肥前系磁器の染付大鉢。14 は瀬戸美濃系の白磁皿。15 は国産磁器の八角鉢。16 は肥前系磁器で仏飯器。17 は白磁のひょうそく。18 は京焼風陶器碗。19 は国産陶器の灰入れ。20 は絵唐津の大皿口縁部片。内面に格子文を鉄絵で描く。21・22 は国産陶器土鍋。21 は外面に明緑色の釉を、22 は淡紫白色の釉薬をかける。23 は国産陶器の土鍋蓋で深緑色の釉をかける。24 は京都系土師器皿。厚手で口縁部は丸みをもつ。黒色に焼成される。25 は和泉型瓦器碗。内面見込みには並行のミガキがはいる。高台は退化した台形状である。26 はいわゆる赤間石をつかった硯。内面には墨が部分的に残る。28 は携帯用の砥石もしくは温石。切れ目を入れて折り取った痕跡がある。27 は頁岩製の硯の一部。

■瓦類（第 83 図～85 図）

コンテナおよそ 10 箱分の大量の瓦が出土しているが、主要な遺構から出土した、軒瓦や路のあるもののみを選択的に取上げた。詳細は表 11 を参照。

■金属製品（第 86 ～ 89）

詳細は表 12 参照。

第IV章 調査結果と課題

今回の調査では、調査区の半分以上が大規模な擾乱を受けていたことから明確な建物は検出できなかったが、①近世以前の遺物包含層を確認した点、②近世の2つの遺構面を確認した点、③近世後半の生活遺構及び屋敷地割りに関連する遺構が確認できた点が大きな成果である。なかでも、当初の目的であった近世後半期における三ノ丸武家屋敷地の空間利用の情報がえられた点は重要であった。以下では、調査結果をまとめる意味から、1. 遺跡全体の時期変遷、2. 屋敷地割と空間利用、3. 特殊遺物 の3点について述べる。

1. 時期別の概要 (第90図)

遺構検出面と出土遺物から推測される遺構変遷を述べる。

【0期：中世～16世紀末】「淡灰黄色砂質土」とした堆積層が形成される。16世紀後半代まで下る遺物も見られるが、主体は12世紀末～13世紀前半を中心とした搬入品を含む遺物がまとまって出土する。16世紀以前の明確な遺構はなく、しまりのない砂質層が一面に広がっている状況である。なお、追加調査地点の17SX125は、19世紀に埋没した17SK090に削平されて検出したが、16世紀末頃の器壁の厚い完形の京都系土師器が1点出土しており、本調査区の中で最初期に形成された遺構と考えられる。遺構の性格は断定できないが、三ノ丸形成直前または直後の遺構として注目される。

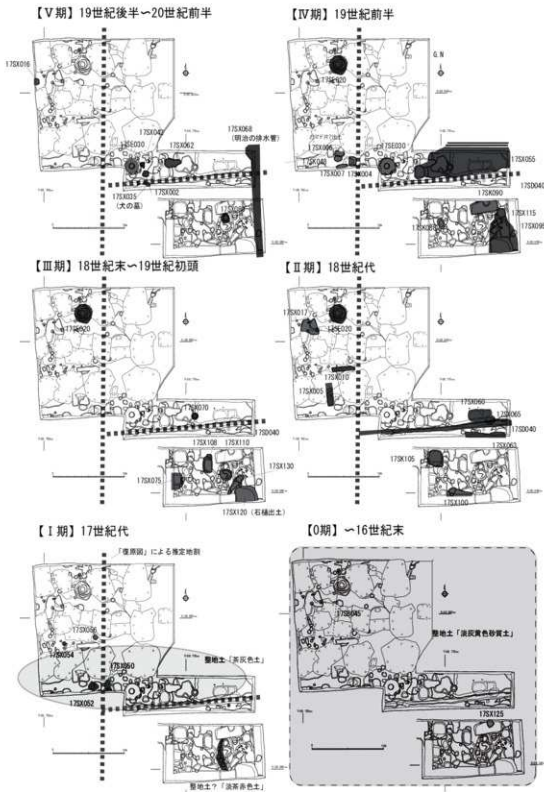
【1期：17世紀代】調査時に第2面目として調査した遺構群が該当する。17SK052からは、上野・高取系の瓶や厚手の京都系土師器が出土しており、17世紀代の遺構と考えられる。1期は、Ⅱ期以降の大型遺構が高密度で形成され、昭和の林業会館にともなう擾乱のため、この時期の遺構は極めて少なく、武家屋敷地としての構造を窺えるものは皆無に等しい。1期の遺構埋没後には、整地土とした17世紀代の遺物を含む「茶灰色土」が調中央付近で検出される。なお、伝慶長絵図には屋敷地割が明確に記載されており武家地の東西・南北の区割りは行われているとみてよいが、地割を示す遺構は不明である。

【Ⅱ期：18世紀代】廃棄土坑や火災処理土坑・東西溝が形成され、屋敷地としての様相がおぼろげながら把握できる。火災処理土坑と考えられる17SX005・010は、出土遺物の様相から寛政三年（1738）の大火後の片付け跡の可能性が高い。なお、この時期には井戸17SE020が形成されているが、掘方からは披発を受けた鬼瓦が出土しており、その他の出土遺物の時期からみて寛政三年の大火以後に形成されたものである。また、次項で述べる府内城復元図との対比から、屋敷地割りと考えられる東西溝17SD040は18世紀後半代の遺物を含む土により埋められており、18世紀代に屋敷の背割り溝として機能していたと考えられる。

【Ⅲ期：18世紀末～19世紀初頭】追加調査地点を中心に廃棄土坑が形成される他は、遺構の形成・埋没は顕著ではない。調査区北西部の井戸17SE020は継続して使用されてるようである。

【Ⅳ期：19世紀前半】17SX055や17SK090など、埋め土に多量の遺物を含む遺構が多く形成される。また、新たに井戸17SE030が形成されている可能性がある他、17SE020もこの時期までは使用されており、居住者の生活痕跡をよく残す時期といえる。幕末における大量消費・大量廃棄の実態を反映するかのように出土遺物のなかで、この時期の遺物の量が卓越している。なお、17SD040がⅡ期に埋没して以後、屋敷の東西地割がどのような構造であったかはⅣ期以降把握できないが、17SD040の東西軸に並行する形で17SK090が形成されている状況を考えれば、17SD040の軸を踏襲した何らかの区画・遮蔽施設が付近に想定できる。

【Ⅴ期：19世紀後半～20世紀前半】明治期以後は、廃棄土坑の数は極端に少なくなり、かわって配水管や排水溝の整備などが行われ近代都市として変容していく様相が窺える。また、17SX042ではこの頃の遺物にともなって焼磁器のある18世紀末頃の大皿が出土しており、伝世していた遺物の一端を知る事が出来る。また、17SX062からは統制陶器が出土しており、太平洋戦争中の生活用具の廃棄遺構と考えられる。この頃17SE030は再掘削され、Ⅳ期以降も井戸として利用されていることから、林業会館建設直前までは宅地として機能していたと考えら



第90図 遺構時期変遷図 (1/500)

れる。

出土遺物の様相から以上のような変遷案を提示した。遺物が少なく時期不明の遺構も複数ある他、報告者の遺物の時期認定に精粗があり、細かな時期変遷は示せなかったが、遺跡の遷り変わりは説明できると考える。なお、18世紀以前及び18世紀末以後の屋敷地割の構造と南北方向の柵 17SA045 や 17SA135 の位置付けについては課題として残った。

2. 屋敷地の空間利用と三ノ丸の地割について - 江戸後期を中心に -

上記の時期変遷案を受けて、遺構の遺存状態が比較的良好なⅡ期～Ⅳ期(江戸後半期)の遺構をもとに、考古学的にみた屋敷地の構成について考えてみる。以下では、『大分市史』付図Ⅳ「府内城下の復原図」(以下、復原図)を元に、調査区の西側に推定される屋敷地を「屋敷地A」、南側を「屋敷地B」、東側を「屋敷地C」と仮称する。

①遺物の接合関係からみる宅地割りの推定(第91図)

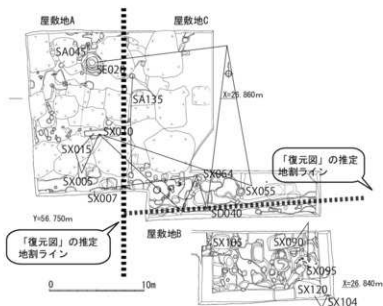
空間配置を考えるにあたり、重要な要素となる「地割」ないしはこれに関連する遺構として東西溝 17SD040、区画杭 17SA045・SA135 が存在する。これらが屋敷地区画としての機能を果たしていたかを検討するため、主要な遺構を選び遺構間の遺物接合関係を「復原図」推定地割とともに示したものが第91図である。結果より窺えることは、東西地割の可能性のあるSD040の南北(屋敷地B・屋敷地C)間では遺物の接合は見られない点、南北の地割想定ラインに関しては、これを飛び越えて接合するものがある点である。これらのことから、「復原図」推定地割ラインに重なるSA135が遮蔽をとまなう区画施設である可能性は低く見ざるをえないが、火災時などに屋敷地区画が焼亡した時点で一時的に遺物が広範囲に廃棄された可能性も否定できない。いずれにせよ遺構としては東西溝 17SD040のような明確な区画意識は南北方向では顕著ではないことは指摘できる。このような東西方向に対する意識は強いが、南北について希薄な例は府内城・城下町跡第1次調査でも知られており、木村家屋敷と福寿院との境は深い溝などでは画さず簡易な遮蔽施設が想定されている(吉田1993)。

②絵図との対比(第93図)

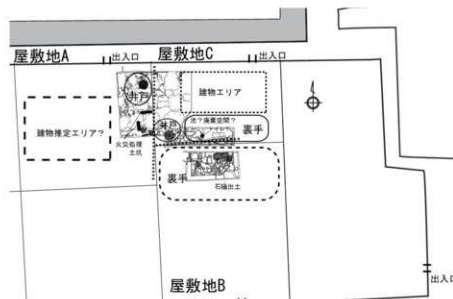
第Ⅱ章1でも述べたが、江戸後半期の府内城を描いた代表的な絵図として天明五年(1785)の「豊後府内城下町絵図」と享和二年(1802)の「清水流規矩元法分間絵図」が知られている。両者には三ノ丸武家屋敷地の居住者名が記されており(註1)、これに寛文七年(1667)以降の府内城下を描いたとされる慶長十年路の付箋のついた「府内絵図」(「伝慶長絵図」)に記された三ノ丸内部の寸法等を「復原図」に加えて再構成したものが第93図である。これにより屋敷地A～Cに居住した家臣や屋敷地出入口の位置など具体的な周辺の環境が浮かび上がる(詳細は第93図解説参照)。

③まとめ(第92図)

以上、地割の検討や絵図との対比などから屋敷地の構成についてごく簡単に概観してみた。東西方向の屋敷の背割りとなる溝の検出は、絵図ひいては「復原図」の正確さを考古学的に検証した結果となったが、南北の地割については、遺構、遺物の遺構間接合状況からその存在を確認することができなかった。このことは2、①で示した説明とは別に、府内城・城下町第3次調査(北口跡)で検出した石垣と道路が「復原図」推定北口地点より約12～13m西にずれて検出されている(第93図参照)ことからわかるように、復原図作成の際に東西(西?)方向の誤差が生じている可能性を視野にいれる必要がある(註2)。よって今回作成した屋敷地A・Cのエリア分けに関しては、根本的な見直しを迫られることになってしまいますが、城下南東端に位置する塩九升町の土居が「復原図」の推定地点で検出されている例(中世大友府内町跡第81次調査)もあることから、結論をいそぐず地割関連施設の調査事例の増加をまって「復原図」の再検討を行うべきであろう。また、こうした検討を行う上で根拠とした遺構間接合遺物の評価については、火災の処理を理由とした推論が果たして成り立つのか検討事例を増やす必要があろう。このように、屋敷地割については多くの課題が残されたが、現状の案をもとに屋敷地内の推定空間配置を模式化すると第92図のようになる。



第91図 遺構間の遺物接合状況 (1/400)



第92図 調査地点の空間利用推定模式図 [19世紀前後]

い。方形のものは類例が少ないようであるが、このいわゆる「丸熊マーク」を押された製品は、江戸出土の焙烙に同じ印を押したものが存在することから、江戸産であることが確認されている。この「丸熊マーク土製温石」は全国的にも類例は少ないといわれ、これまで調査してきた地点の偏りはあるものの、江戸においても大名屋敷や旗本屋敷で少数確認されるのみであり（註4）、使用者が限定されている可能性が指摘されている。また、共存する遺物からみて製作年代は17世紀後半から18世紀前半が主体とされ、17SX005を寛政三年（1738）の大火の後の片付け跡とする解釈と矛盾しない。こうしたきわめて狭い範囲でのみ分布する「丸熊マーク」の土製温石は、およそ「商品」とはみなしがたい性格をもつ。何故、当地で出土するのか？資料限界を無視してその歴史的背景を考えると、当資料は屋敷地A（もしくはCの可能性もあり）の住人が、参勤交代に従事して江戸在中期間になんらかの経緯で入手したとするのが自然な解釈であろうか。当資料を歴史的に意義づける力量はないが、府内城三ノ丸内における江戸からの流通資料として重要である点はもちろん、屋敷地居住者の性格の一端を垣間見ることのできる資料として興味深い。

3. 出土遺物の様相

① 17SX005 出土土製温石について（第94図）

17SX005からは、見慣れない方形土製品が出土した。江戸を中心に少数出土しているこの製品は、これまでの研究（註3）から、土製温石とよばれるものである。温石とは、懐炉と同様懐に入れるなどして、暖を取ったり空腹を抑えたり、患部にあて痛みを和らげるなどの治療を行う採暖具および治療具の一つである。元来滑石、軽石、蛭石などの石が利用されており、当調査区表土出土遺物に石製品の事例があるが（第82図-28）が、石に限らず土製品や瓦、塩

を焼き固めたもの、塩を混ぜて炒った糠なども用いられた。江戸や名古屋で出土している土製品の例には円形のものが一定量あり、これに刻印が捺されていることから、「有印土製円盤」という名称で呼ばれることもある。当資料は長方形に復元されるもので、表面全体に摩滅痕が観察できるが○のなかに「熊」の文字はいった刻印を現状で2連入れる点特徴的である（第94-6のような雰囲気）に復元されるが上面には穿孔は見られない

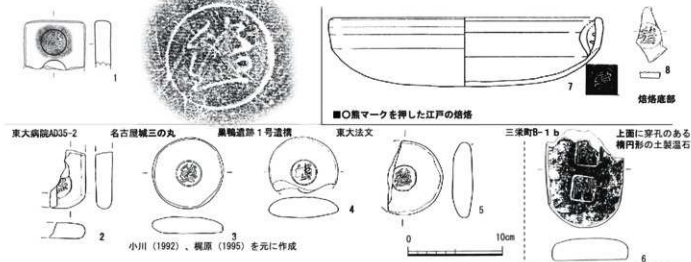


府17SX005褐色土

右図刻印部分拡大(実大)

東大塚学部6号地下式土坑

黒輪遺跡1号遺構



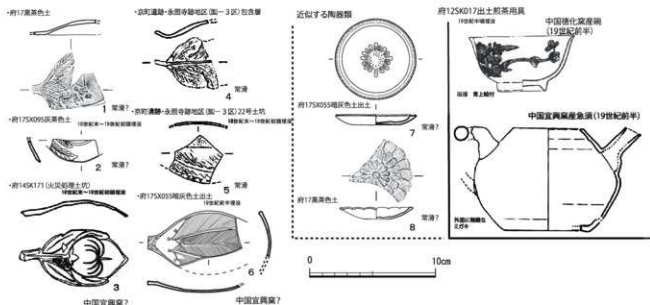
第94図 17SX005出土の土製温石とその類例(1/4)

②用途不明の朱泥陶器類について(第95図)

今回出土した近世から近代の出土遺物のなかで、性格の判明していない用途不明遺物が多数存在する。事聞少見にしてほとんど類例を知らない遺物の一つに17SX055 暗灰色土や黒茶色土で出土した朱泥陶器「匙状」の製品がある。この遺物に類するものは北九州市に所在する京町遺跡で2点ほど確認できるが(第95図4・5)、報告ではその性格を「茶匙」ないし「茶匙か」としている。また、府内城・城下町跡第14次(竹町・笠和町付近。以下、府14)では、「皿」と記述された完形品が出土しており、産地については京町遺跡出土例は「常滑」産、府14例は「宜興窯か?」と記述されている。近世の常滑焼が中国の朱泥製品を模倣していった歴史からみて、両者の指摘はその近似性を示すものといえる。当遺跡出土の第95図1~2は硬質に焼成された製品であるが、第95図6はやや軟質に焼成され府内城・城下町跡第12次(府12)SK017で出土した宜興窯製の急須(第95-10)を思わせる風合いをもつ。両者を識別できる力量はもちあわせていないが、ここでこの遺物を取り上げた理由として、京町遺跡で記載されたように茶匙であれば18世紀以降に流行する煎茶道具の一種と考えることもでき、府12SK017では宜興窯製の急須とともに、煎茶用茶碗と目される清朝の徳化窯製の製品が出土する事実を考えると、府内城下における喫茶の実態(作法としての煎茶がいつごろ、どの階層にどこまで浸透していたか)を追求するうえで重要なものではないかと考えるためである。もっとも、今回問題とした遺物の位置付けは容易ではなく、一般的に知られる煎茶道具の茶匙は竹製の簡素なものが一般的であり、煎茶用具にこのような茶匙が存在するのかわかる確認できていない。朱泥陶器であることから、茶に関わる器物であると推測されるが、どのような用途であるかはやはり不明といわざるをえない。ただし、この遺物の性格を考えるうえでヒントとなりそうな遺物として、同様の遺構から出土した小皿状の製品(第95-7・8)がある。この遺物は第95図1・2と全く同一の胎土、調整技法をもつことから「匙」状製品との有機的な関連が想定され、匙状・皿状その他複数の形式からなる朱泥陶器のセットが存在する可能性があり、やはり喫茶に関わる器物の一つではなかろうか。出土した遺構のほとんどが18世紀末~19世紀初頭に偏る点からみて18世紀末頃には出現していた器物である点を加味しつつ、類例の追求とともに府内城下における急須や土瓶の導入時期の検討などを含めた近世の「点でない」茶をめぐる基礎的な研究を行う中で再検討していきたい。

③搬入土器類について(第96図)

中世遺物を多く包含する淡灰黄色砂質土からは中国磁器や在地産の土師器などと共に、非在地産の土器が散見された。注目される資料として、京都系土師器と和泉型瓦器境があげられる。これらの資料は、東播磨系鉢とともに、中世の海岸部であった荷揚町周辺の性格付けを行うにあたって重要である。第96図1~10は和泉型瓦

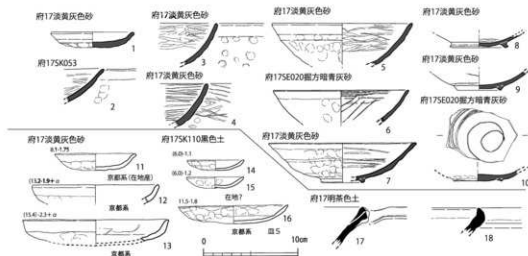


第95図 調査地点出土の朱泥陶器とその類別 (1/3)

器である。当地を含む笠和郷内での和泉型瓦器出土事例の多さについては、堀地調一氏が既に指摘されている(堀地 1999)。府17SE020出土資料を加えるとその型式幅からみて12世紀後半～13世紀前半にかけて継続して搬入されたことを示す。また、図示していないが、回転台成形の瓦器碗も少数ながら存在し、底部糸切り底もみられる。豊後産か否かの検討は必要であるが、九州島内での関わりも想定される地域といえる。第96図11～13は、手捏ねで作成されたいわゆる京都系土師器皿で、11は胎土や色調からみて在地産の製品と考えられるが、12・13は事例報告で述べたように、胎土・色調は在地産の土器には見られないものであり(註5)、他地域で作成された搬入品である可能性が高い。器形からみて12世紀後半代の製品と想定するが、九州島内では希少な事例ではなからうか。これらの事例は、笠和郷(特に住吉川と大分川に挟まれた河口付近)が海上交通の要地であったことを具体的に裏付ける資料として注目される。第96図14～16は、18世紀末～19世紀初頭に埋没した17SK110黒色土より出土した土師器皿である。14・15は色調からみて在地で製作された可能性があるが、16は胎土・色調からみて他地域産の可能性が高い。この京都系土師器とは異なるこの手捏ね成形土師器は吉田寛氏が以前「手捏ねb類」(吉田 1993)、女狐近世墓地で田中祐介氏が「A類」(田中 1996)とした薄手で白色の土師器皿に似るが、全体のプロポーションや内面底部に沈線状の窪みを設ける点で別型式と考えられる。これに類する資料として京都周辺で出土する18世紀～19世紀代の京都系土師器皿Sがある(小森 2005)。資料を直接対比したわけではないので、時期の対比はできないが、府内周辺の土師器の系統とは異なる九州島外からの搬入品ではないかと考えている。浅学のため多くを語れないが、他地域から「商品」として一定量搬入される陶磁器類とは異なる、本例のような搬入の可能性のある少数のかわかけ類(吉田「手捏ねb類」田中「A類」を含めた)の出土意義については別の経緯が想定される。今後、近世土師器を検討するなかで考えていきたい。

4. 今後の課題

三ノ丸の屋敷地の具体相は考古学的には十分明らかになっていない中、屋敷3軒分の道路側から奥に至る範囲が調査対象であった本調査に課せられた意義は少なくないものであったが、大きな擾乱や調査範囲の絞込みの問題などから、その真を十分に果たす事が出来なかった。ただし、区割り溝の存在や井戸の配置などから、僅かながらではあるが屋敷地の実態に迫ったつもりではある。地割に関する課題については既に述べたが、今後は当調査区では判明していない街路と屋敷地との関係、屋敷地内の排水経路の問題など、三ノ丸の都市構造についての解明はこれからといえる。今後、周辺調査を進めるなかで、課題を解決しつつ近世都市府内城下の実態や特質に迫っていきたい。最後に、整理期間中には果たせなかったが、絵図に記された居住者名と府内藩記録に記された人物名との比較対象作業が残されている。文献史料・絵画資料を含めた上で再度遺構遺物を検討すれば、また深



第96図 調査地点出土掘り出し物 [中世～近世] (1/4)

みのある報告が可能であったかもしれない。今後の課題として。

註1：絵図中の人名の判読については、大分市歴史資料館武富雅宣氏・大分市文化財課植木和美氏にご教示いただいた。

註2：紙面の都合上多くを語れないが、「復原図」と検出遺構がずれる理由として①遺構の認定時期の誤りから生じる絵図製作年との誤差、②絵図（ここでは17世紀後半以降作成の「伝説絵図」）の記載内容が事実と異なる。③「復原図」作成時に寸法を測る上で起点とした地点に誤りがあり同心円状に誤差が広がった などが考えられる。

註3：小川望 1992『有印土製陶器と有孔板状土製品』『東京考古』10。板原喜世子 1995『丸熊マークのいわゆる「温石」について』『東京考古』13

註4：小川望氏のご教示によれば、近年の調査では、丸熊マークの焙烙の出土例は増えているが土製温石の出土事例は依然として少なく、このような状況から想定される案として、丸熊マーク印を使う焙烙屋がノベルティグッズ的なものとして極めて限定的に土製の温石を生産したのではないかと案が出ていいるとのことである。なお、17SX005出土資料に関しては、写真上ではあるが同氏より、江戸で出土するものと同一の製品でよいとのコメントを頂いた。

註5：京都府埋蔵文化財センターの伊野近富氏、森島康雄氏に実現していただいた所、京都「産」ではないが京都系土師器であるとのこと指図を受けている。

引用・参考文献

江戸道跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房／河野史郎編 2003『府内城・城下町跡 第14次発掘調査報告書』大分市教育委員会財団法人北九州教育文化財事業団埋蔵文化財調査室 1994『京町道跡4』北九州市埋蔵文化財調査報告書第148集／財団法人愛知埋蔵文化財センター 1993『名古屋城三の丸道跡（IV）』愛知埋蔵文化財センター調査報告書第44集／小森俊寛監修 2005『京から出土する土器の編年研究』京都編集工房／佐藤晃洋 1993『（5）近世における府内城下町と府内家臣団』『府内城三ノ丸道跡』大分県教育委員会／堀地潤一・小野貴史編 1999『東田室道跡』大分市教育委員会／高島豊編 2003『府内城・城下町跡 第12次調査報告書』大分市教育委員会／高島豊編 2008『府内城・城下町跡6・第16次調査報告書』大分市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第78集／田中裕介『6土師質小皿』『九州横断道路自動車関係調査報告書5 女孤近世墓地』1996 大分県教育委員会／橋本久和 1997『畿内産瓦器と九州北部の交易形態』『中世土器の基礎研究XII』日本中世土器研究会／吉田寛編 1993『府内城三ノ丸道跡』大分県教育委員会／吉田寛編 1996『府内城三ノ丸北口跡』大分県教育委員会

脱稿後、小川望氏を介して堀内秀樹氏より当資料に類似する朱泥陶器に備前焼のものがあるとの御教示を頂いた。備前では、紀年銘をもつ備前焼土型が寛政年間より存在しており、産地の推定として常滑や中国製以外に備前焼も視野にいれる必要が生じてきた。なお、当資料のような底状のものではないが、皿状の製品の類例として、江戸でも19世紀前半以降に散見されるとのことである。

表3 遺物計測表②

(*) 内の数値は反転複元での数値

[illegible]

表4 遺物計測表③

(*) 内の数値は反転複元での数値

[illegible]

表5 遺物計測表④

()内の数値は反転複元での数値

[illegible]

表6 遺物計測表⑤

(「/」内の数値は反転考案での数値)

遺物番号	遺物名称	種類	形状	位置	寸法	重量	備考
94-0001-1	1759-0001	銅貨	銭貨	銅貨系	(17.0)	4.7	2.0
94-0002-2	1759-0002	銅貨	銭貨	銅貨系	—	3.0g	6.5
94-0003-1	1759-0003	銅貨	銭貨	銅貨系	(14.0)	2.5	2.5
94-0004-1	1759-0004	銅貨	銭貨	銅貨系	8.8	2.5	2.5
94-0005-1	1759-0005	銅貨	銭貨	銅貨系	(1.0)	4.3	2.8
94-0006-1	1759-0006	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.2)	5.7	6.6
94-0007-1	1759-0007	銅貨	銭貨	銅貨系	最大径5.5	4.1g	最大径4.7
94-0008-1	1759-0008	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.3)	—	—
94-0009-1	1759-0009	銅貨	銭貨	銅貨系	—	2.4g	—
94-0010-1	1759-0010	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.4)	4.8	(1.0)
94-0011-1	1759-0011	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.3)	6.0	(1.0)
94-0012-1	1759-0012	銅貨	銭貨	銅貨系	(14.3)	3.8g	—
94-0013-1	1759-0013	銅貨	銭貨	銅貨系	—	4.4g	(1.0)
94-0014-1	1759-0014	銅貨	銭貨	銅貨系	—	4.1g	—
94-0015-1	1759-0015	銅貨	銭貨	銅貨系	—	8.4g	(11.0)
94-0016-1	1759-0016	銅貨	銭貨	銅貨系	—	1.2g	—
94-0017-1	1759-0017	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.2)	2.8	ツマミ径(1.4)
94-0018-1	1759-0018	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.8)	2.8	ツマミ径(1.4)
94-0019-1	1759-0019	銅貨	銭貨	銅貨系	(5.1)	1.4g	ツマミ径(1.1)
94-0020-1	1759-0020	銅貨	銭貨	銅貨系	—	—	—
94-0021-1	1759-0021	銅貨	銭貨	銅貨系	2.8	0.7	ツマミ径(1.0)
94-0022-1	1759-0022	銅貨	銭貨	銅貨系	4.8	1.2	—
94-0023-1	1759-0023	銅貨	銭貨	銅貨系	(17.0)	5.0	(3.4)
94-0024-1	1759-0024	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.0)	5.8	(3.0)
94-0025-1	1759-0025	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.1)	5.9	(3.0)
94-0026-1	1759-0026	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.8)	4.5	(3.0)
94-0027-1	1759-0027	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.2)	5.0	(4.0)
94-0028-1	1759-0028	銅貨	銭貨	銅貨系	2.8g	—	(2.0)
94-0029-1	1759-0029	銅貨	銭貨	銅貨系	(17.8)	3.7g	—
94-0030-1	1759-0030	銅貨	銭貨	銅貨系	—	2.2g	—
94-0031-1	1759-0031	銅貨	銭貨	銅貨系	(19.6)	3.7	(7.0)
94-0032-1	1759-0032	銅貨	銭貨	銅貨系	1.0g	3.8g	—
94-0033-1	1759-0033	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.0)	4.0	3.3
94-0034-1	1759-0034	銅貨	銭貨	銅貨系	1.5	3.3g	—
94-0035-1	1759-0035	銅貨	銭貨	銅貨系	—	2.1g	—
94-0036-1	1759-0036	銅貨	銭貨	銅貨系	—	4.4g	(1.0)
94-0037-1	1759-0037	銅貨	銭貨	銅貨系	—	3.7g	4.0
94-0038-1	1759-0038	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.4)	—	(1.4)
94-0039-1	1759-0039	銅貨	銭貨	銅貨系	(17.0)	5.1g	—
94-0040-1	1759-0040	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.0)	5.3	(2.0)
94-0041-1	1759-0041	銅貨	銭貨	銅貨系	3.8	2.1	—
94-0042-1	1759-0042	銅貨	銭貨	銅貨系	—	7.6g	—
94-0043-1	1759-0043	銅貨	銭貨	銅貨系	—	4.0g	—
94-0044-1	1759-0044	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.2)	4.4g	—
94-0045-1	1759-0045	銅貨	銭貨	銅貨系	—	2.2g	—
94-0046-1	1759-0046	銅貨	銭貨	銅貨系	—	4.1g	—
94-0047-1	1759-0047	銅貨	銭貨	銅貨系	—	4.3g	6.4
94-0048-1	1759-0048	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.0)	4.4g	—
94-0049-1	1759-0049	銅貨	銭貨	銅貨系	(17.0)	6.1g	—
94-0050-1	1759-0050	銅貨	銭貨	銅貨系	—	1.8g	13.4
94-0051-1	1759-0051	銅貨	銭貨	銅貨系	—	6.7g	(20.1)
94-0052-1	1759-0052	銅貨	銭貨	銅貨系	—	3.2g	—
94-0053-1	1759-0053	銅貨	銭貨	銅貨系	(14.4)	2.6	—
94-0054-1	1759-0054	銅貨	銭貨	銅貨系	—	1.8g	(1.0)
94-0055-1	1759-0055	銅貨	銭貨	銅貨系	—	4.1g	—
94-0056-1	1759-0056	銅貨	銭貨	銅貨系	—	5.0g	—
94-0057-1	1759-0057	銅貨	銭貨	銅貨系	1.0	1.5	—
94-0058-1	1759-0058	銅貨	銭貨	銅貨系	—	8.0g	—
94-0059-1	1759-0059	銅貨	銭貨	銅貨系	—	12.6g	—
94-0060-1	1759-0060	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.2)	4.2g	—
94-0061-1	1759-0061	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.5)	5.0	(4.0)
94-0062-1	1759-0062	銅貨	銭貨	銅貨系	(14.4)	2.5	(1.0)
94-0063-1	1759-0063	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.0)	3.3g	—
94-0064-1	1759-0064	銅貨	銭貨	銅貨系	—	6.4g	(1.0)
94-0065-1	1759-0065	銅貨	銭貨	銅貨系	—	4.2g	7.2
94-0066-1	1759-0066	銅貨	銭貨	銅貨系	—	4.5g	—
94-0067-1	1759-0067	銅貨	銭貨	銅貨系	—	18.0g	8.4
94-0068-1	1759-0068	銅貨	銭貨	銅貨系	(27.4)	6.4g	—
94-0069-1	1759-0069	銅貨	銭貨	銅貨系	1.8	4.8	—
94-0070-1	1759-0070	銅貨	銭貨	銅貨系	(22.8)	11.4	(11.2)
94-0071-1	1759-0071	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.2)	12.1	(13.1)
94-0072-1	1759-0072	銅貨	銭貨	銅貨系	(13.2)	1.4	(1.0)
94-0073-1	1759-0073	銅貨	銭貨	銅貨系	1.8	2.3	—
94-0074-1	1759-0074	銅貨	銭貨	銅貨系	(5.5)	2.7	(2.2)
94-0075-1	1759-0075	銅貨	銭貨	銅貨系	1.0	4.8	—
94-0076-1	1759-0076	銅貨	銭貨	銅貨系	8.1	3.1	3.0
94-0077-1	1759-0077	銅貨	銭貨	銅貨系	—	5.6g	(3.0)
94-0078-1	1759-0078	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.0)	5.5	3.8
94-0079-1	1759-0079	銅貨	銭貨	銅貨系	8.5	4.8	3.3
94-0080-1	1759-0080	銅貨	銭貨	銅貨系	1.8	3.1	4.0
94-0081-1	1759-0081	銅貨	銭貨	銅貨系	—	1.3g	—
94-0082-1	1759-0082	銅貨	銭貨	銅貨系	(11.4)	—	(1.0)
94-0083-1	1759-0083	銅貨	銭貨	銅貨系	12.6	3.0	6.0
94-0084-1	1759-0084	銅貨	銭貨	銅貨系	10.0	4.3	3.0
94-0085-1	1759-0085	銅貨	銭貨	銅貨系	—	6.4g	—
94-0086-1	1759-0086	銅貨	銭貨	銅貨系	17.8	5.3	8.4
94-0087-1	1759-0087	銅貨	銭貨	銅貨系	—	7.2g	—
94-0088-1	1759-0088	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.2)	1.5	(1.0)
94-0089-1	1759-0089	銅貨	銭貨	銅貨系	(1.4)	1.5	3.8
94-0090-1	1759-0090	銅貨	銭貨	銅貨系	11.9	3.0	10.0
94-0091-1	1759-0091	銅貨	銭貨	銅貨系	8.2	3.5	4.2
94-0092-1	1759-0092	銅貨	銭貨	銅貨系	—	6.0	—
94-0093-1	1759-0093	銅貨	銭貨	銅貨系	—	2.2g	4.8
94-0094-1	1759-0094	銅貨	銭貨	銅貨系	—	3.3g	4.4
94-0095-1	1759-0095	銅貨	銭貨	銅貨系	(1.6)	7.8	—
94-0096-1	1759-0096	銅貨	銭貨	銅貨系	(1.0)	1.5	—
94-0097-1	1759-0097	銅貨	銭貨	銅貨系	(2.2)	1.9	—
94-0098-1	1759-0098	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.0)	2.1	(1.4)
94-0099-1	1759-0099	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.1)	1.9	(4.2)
94-0100-1	1759-0100	銅貨	銭貨	銅貨系	(1.0)	3.5	—
94-0101-1	1759-0101	銅貨	銭貨	銅貨系	(10.4)	6.0	(4.2)
94-0102-1	1759-0102	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.1)	3.1g	4.0
94-0103-1	1759-0103	銅貨	銭貨	銅貨系	(8.4)	4.8g	—

表7 遺物計測表⑥

() 内の数値は反転複元での数値

[illegible]

表8 遺物計測表⑦

(*) 内の数値は反転複元での数値

[illegible]

表9 遺物計測表⑧

(*) 内の数値は反転複元での数値

[illegible]

(*) 内の数値は反転複元での数値

[illegible]

表11 遺物觀察表①

新瓦の分譲は、吉岡寛2003「近世府内城・近世府内城下町跡出土瓦の編年研究」『山崎大学考古学雑誌』、近藤義一先生追記生誕文庫集による。

材料番号	品名等	単位	備考	質量・質量割合 (g)	製作手順
製40001	175401007水色模写粘土	瓦丸		長さ3倍2.5-厚2.0	
製40002	175401008水色模写粘土	瓦丸	表面0-1層	幅0.5	17型製粘土
製40010	1754090 浅灰色瓦丸	瓦丸		長さ12.5+0-幅0.5-厚2.1-1.4	
製40011	175401005 浅灰色瓦丸	瓦丸		長さ2.5+0-幅0.2-厚2.0	
製40012	1754110 浅灰色瓦丸	砂瓦丸	表面0-2層	幅0.5	17型製粘土
製40013	1754100 浅灰色瓦丸	砂瓦丸	表面	長さ2.4+0-厚2.0-重0.17	
製40100	1754150 瓦丸	砂瓦丸		幅0.4	
製40101	1754100 瓦丸	内装内装全層		長さ10.5+0-幅0.5+0-厚2.1+0	17型製粘土→17型製粘土
製40102	1754120浅灰色瓦丸	瓦丸	内装全層	長さ2.7+0-幅0.3-厚2.1+0	
製40103	1754100 瓦丸	表面0-7層		幅0.5	
製40104	1754005 砂瓦丸	表面1層、縦筋面		4.0	
製40105	1754040 砂瓦丸	1層(縦筋面)+縦筋		長さ13.5+0-幅0.5+0-厚2.1+0	17型製粘土
製40106	1754040 砂瓦丸	表面0-7層の1層か		幅0.2	17型製粘土
製40107	1754040 砂瓦丸	表面		4.0	17型製粘土→重
製40108	1754005 砂瓦丸	表面		幅0.1長さ15+0-厚	
製40109	1754005 砂瓦丸	内装全層		幅0.5+0-幅0.2+0-厚2.0+0	
製40110	1754005 砂瓦丸	内装全層		長さ11.0+0-幅0.4+0-厚2.1+0	17型製粘土→17型製粘土
製40111	1754005 砂瓦丸	瓦丸		幅0.5+0	
製40112	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40113	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40114	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40115	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40116	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40117	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40118	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40119	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40120	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40121	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40122	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40123	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40124	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40125	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40126	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40127	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40128	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40129	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40130	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40131	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40132	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40133	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40134	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40135	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40136	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40137	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40138	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40139	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40140	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40141	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40142	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40143	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40144	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40145	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40146	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40147	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40148	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40149	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40150	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40151	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40152	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40153	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40154	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40155	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40156	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40157	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40158	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40159	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40160	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40161	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40162	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40163	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40164	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40165	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40166	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40167	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40168	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40169	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40170	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40171	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40172	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40173	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40174	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40175	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40176	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40177	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40178	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40179	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40180	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40181	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40182	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40183	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40184	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40185	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40186	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40187	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40188	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40189	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40190	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40191	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40192	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40193	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40194	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40195	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40196	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40197	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40198	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40199	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40200	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40201	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40202	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40203	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40204	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40205	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40206	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40207	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40208	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40209	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40210	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40211	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40212	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40213	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40214	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40215	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40216	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40217	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40218	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40219	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40220	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40221	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40222	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40223	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40224	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40225	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40226	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40227	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40228	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40229	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40230	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40231	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40232	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40233	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40234	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40235	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40236	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40237	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40238	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40239	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40240	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40241	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40242	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40243	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40244	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40245	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40246	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40247	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40248	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40249	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40250	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40251	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40252	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40253	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40254	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40255	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40256	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40257	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40258	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40259	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40260	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40261	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40262	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40263	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40264	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40265	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40266	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40267	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40268	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40269	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40270	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40271	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40272	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40273	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40274	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40275	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40276	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40277	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40278	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40279	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40280	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40281	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40282	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40283	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40284	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40285	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40286	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40287	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40288	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40289	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40290	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40291	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40292	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40293	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40294	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40295	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40296	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40297	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40298	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40299	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40300	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40301	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40302	1754005 砂瓦丸	砂瓦丸		幅0.5+0	
製40303					

表12 遺物観察表②

探出番号	遺物番号	種類	種類	機能	口徑 (mm)	重量 (g)	備考
第0001	175X003 褐色土	銅製品	銅板	寛永通宝	2.3	2.6	裏面「光」部
第0002	175X008	銅製品	銅板	寛永通宝	2.4	3.1	
第0003	175X010 褐色土	銅製品	銅板	寛永通宝	2.4	3.49	裏面「光」部
第0004	175X012 褐色土	銅製品	銅板	寛永通宝	2.4	2.72	裏面「光」部
第0005	175X013 褐色土	銅製品	銅板	寛永通宝	2.2	3.51	
探出番号	遺物番号	種類	種類	機能	口徑 (mm)	重量 (g)	
第0006	175G040	銅製品	銅板	駒子か?	φ6.3	厚30.2	1.54
第0007	175X003 褐色土	銅製品	銅板	寛永通宝	口徑1.8	厚1.64±α	3.00
第0008	175X003 褐色土	銅製品	銅口		口徑0.9	厚34.6	2.41
第0009	175X003 褐色土	銅製品	銅口		口徑0.8	厚27.6	3.54
第0010	175X003 褐色土	銅製品	銅口?		口徑1.0	厚31.7	10.47
第0011	175X003 褐色土	銅製品	銅口	文様刻む	厚5.8±α	厚1.60±α	3.87
第0012	175X003 褐色土	銅製品	銅口		厚13.3±α	厚1.60±α	5.44
第0013	175X003 褐色土	銅製品	銅口		厚13.3±α	厚1.60±α	8.15
第0014	175G075	銅製品	銅板		厚26.3	厚30.6	12.93
第0015	175X003 褐色土	銅製品	銅口	様式不明(2)	厚14.1±α	厚0.8	3.63
第0016	175G090 褐色土	真鍮製品	銅板	表裏刻印(1)後部	厚12.2±α	厚1.2	5.22
第0017	175G090 褐色土	真鍮製品	銅板		厚12.2±α	厚1.2	1.30
第0018	175X003 褐色土	銅製品	銅口		厚12.2±α	厚0.3	3.21
第0019	175X003 褐色土	銅製品	銅板	3本を組む	厚29.2	厚0.2	1.94
第0020	175X003 褐色土	銅製品	銅板		厚10.3	厚0.2	2.81
第0021	175X003 褐色土	銅製品	銅板	内側に反り残す	口徑0.2	厚24.8	10.06
第0022	175X003 褐色土	銅製品	銅板		厚25.8	厚0.2	2.93
第0023	175X115	銅製品	銅口		厚35.3	厚0.9	2.90
第0024	175X115	銅製品	銅板製品		厚32.2±α	厚12.2±α	3.63
第0025	175X115	銅製品	銅板		厚18.7	厚4.8	2.5
第0026	175X008 褐色土	銅製品	銅板	駒子か?	厚10.1±α	厚32.7	2.08
第0027	175X003 褐色土	真鍮製品	銅板	表裏刻印(1)後部	口徑1.4	厚24.1	5.26
第0028	175X003 褐色土	銅製品	銅口		厚26.4	厚0.3	4.15
第0029	175X003 褐色土	銅製品	銅口		厚24.7	厚1.6	8.72
第0030	175X003 褐色土	銅製品	銅板		厚24.4	厚0.2	1.32
第0031	175X100	銅製品	銅口	木口残す	厚26.7±α	厚0.7	2.66
第0032	175X025	銅製品	円筒状製品	器蓋の底板か	厚24.6	厚4.5	8.9
第0033	175G090	銅製品	銅板		厚12.2±α	厚23.8	2.12
第0034	175X010 褐色土	銅製品	銅口		厚23.7	厚0.2	4.3
第0035	175X010 褐色土	銅製品	銅口		口徑1.4	厚24.3	8.88
第0036	175X010 褐色土	銅製品	銅口		厚24.3	厚20.3	5.44
第0037	175X010 褐色土	銅製品	銅口		厚25.3	厚1.6	3.88
第0038	175X010 褐色土	銅製品	銅口		厚25.7	厚1.1	3.06
第0039	175X010 褐色土	銅製品	木蓋		厚25.4	厚0.9	10.27
第0040	175X010 褐色土	銅製品	円筒状製品	お玉の一部か	口徑0.5	厚31.2	22.02
探出番号	遺物番号	種類	種類	機能	口徑 (mm)	重量 (g)	
第0041	175G040 褐色土	銅製品	刀子か?		厚10.4±α	厚0.2	
第0042	175X003 褐色土	銅製品	半円形製品	器蓋か	厚24.8	厚1.6	22.69
第0043	175X003 褐色土	銅製品	半円形製品	器蓋か	厚3.3	厚0.6	0.8
第0044	175X003 褐色土	銅製品	半円形製品	器蓋か	厚3.0	厚0.7	0.6
第0045	175X003 褐色土	銅製品	半円形製品	器蓋か	厚4.8	厚0.1	0.6
第0046	175X003 褐色土	銅製品	釘?		厚2.0	厚0.2	26.78
第0047	175X003 褐色土	銅製品	釘?	木口残す	厚1.2	厚0.1	
第0048	175X003 褐色土	銅製品	釘		厚0.8	厚0.1	
第0049	175X003 褐色土	銅製品	半円形製品	器蓋か	厚0.2	厚0.2	0.3
第0050	175X003 褐色土	銅製品	釘		厚0.2	厚0.2	21.41
第0051	175X003 褐色土	銅製品	釘		厚0.2	厚0.2	
第0052	175X003 褐色土	銅製品	釘?		厚3.5	厚0.6	
第0053	175G075 褐色土	銅製品	刀子		厚1.1	厚1.7	0.9
第0054	175X003 褐色土	銅製品	板状製品		厚1.0	厚3.3	0.7
第0055	175X003 褐色土	銅製品	木蓋		厚4.4	厚0.6	
第0056	175X003 褐色土	銅製品	瓦片か?		厚17.0	厚0.7	
第0057	175X003	銅製品	板状製品		口徑9.8	厚32.4	
第0058	175X007	銅製品	板状製品		厚4.4	厚0.2	
第0059	175X004	銅製品	板状製品		厚2.2	厚0.4	厚0.2
第0060	175X000	銅製品	銅口		厚0.5	厚0.5	